ISSN 1880-3423

東北学院大学教養学部論集

東北学院大学
教養学部論集

第163号　2012年12月

第一六三号

〔論　　文〕

フランスプロサッカーリーグ（リーグ・アン）に関する考察
……………………………………………………………… 松原　悟・高橋　信二…… 1

新人類の情報格差（デジタルデバイド）……………………………………………………… 片　瀬　一　男…… 19

アジア諸国における所得格差を規定する要因に関する考察………楊　　世　英…… 55

セース・ノーテボームを読む　5）『モクセイ！　愛の物語』
――「日本」のイメージの生成 ………………………………… 吉　用　宣　二…… 69

〔翻　　訳〕

ステフェン・ターナー著　沢山のアプローチがあるが，成果は少ない
――マートンとコロンビア学派の理論構築モデル――
……………………………………………………………………… 久　慈　利　武　訳…… 107

（二〇一二・十二）

東北学院大学学術研究会

東北学院大学教養学部論集　第163号　　2012年12月

目　次

〔論　　文〕

●フランスプロサッカーリーグ（リーグ・アン）に関する考察
…………………………………………………………松原　悟・高橋　信二……　1

●新人類の情報格差（デジタルデバイド）…………………………………………………片　瀬　一　男……　19

アジア諸国における所得格差を規定する要因に関する考察……楊　　世　英……　55

●セース・ノーテボームを読む　5）『モクセイ！　愛の物語』
――「日本」のイメージの生成……………………………吉　用　宣　二……　69

〔翻　　訳〕

●ステフェン・ターナー著　沢山のアプローチがあるが，成果は少ない
―― マートンとコロンビア学派の理論構築モデル ――
……………………………………………………………久　慈　利　武訳……　107

●印の著作は東北学院大学学術研究会のホームページからも読むことができます。
<http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/gakujutsu/kyoyo_163/index.html> にて公開中です。
東北学院大学 <http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/index.shtml> から，
研究・産官学連携　➞学術誌　➞学術研究会（紀要，論集）へとお進み下さい。

東北学院大学学術研究会

執筆者紹介（掲載順）

松　原　　　悟	（本学教養学部　准教授）
高　橋　信　二	（本学教養学部　准教授）
片　瀬　一　男	（本学教養学部　教　授）
楊　　　世　英	（本学教養学部　教　授）
吉　用　宣　二	（本学教養学部　教　授）
久　慈　利　武	（本学教養学部　教　授）

【論　　文】

フランスプロサッカーリーグ（リーグ・アン）に関する考察

Consideration about the French professional football League 1

松　原　　　悟・高　橋　信　二

MATSUBARA Satoru・TAKAHASHI Shinji

Abstract　Many countries around world have professional football league now.　Football leagues in England, Spain, Italy and German football league are known as top class of the world.　Despite the French professional football league is categorized to a second class, the league supplies many players to the top class leagues.

We have studied the organization of the Japanese professional football league.　Therefore we investigated the French professional football league in this study.

We were able to get the following findings from the result.

（1）There are many teams with less than 25 players in the world top leagues.

（2）Japan has problems for 19-20-year-old players training.

（3）There are many young players of French nationality and the African nationality in the French professional football league.

The French professional football league supplies excellent young players to the world top league.

1.　はじめに

サッカーのリーグ戦は，現在世界各国で開催されている。東アジアだけでも，日本，韓国，中国，香港，台湾，モンゴル，マカオ，北朝鮮，東南アジアも同様に，タイ，マレーシア，シンガポール，ベトナム，インドネシア，フィリピン，カンボジア，ブルネイ，東ティモール，ラオス，ミャンマーと全ての国々で行われている。このように世界各国で開催されているサッカーリーグの頂点に位置するのが，プレミアリーグ（イングランド），リーガ･エスパニョーラ（スペイン），ブンデスリーガ（ドイツ），セリエA（イタリア），リーグ・アン（フランス）の5つである。これらのリーグには世界各国から優秀な選手が集まり世界最高峰のサッカーゲームを展開している。特に1992年にイングランドプロサッカーリーグの改編に伴い

新設されたプレミアリーグは，それまで注目度の低かったイングランドリーグを世界最高峰のリーグに築き上げた。スポーツビジネスに注目した投資家たちが，すでに完成されたスペイン，イタリア，ドイツのプロサッカーよりも改善の余地が高いイングランドに着目して投資した結果である。競技場を新しくし，優秀な選手を高額なサラリーで集め質の高いサッカーを提供することで全世界のサッカーファンが注目するリーグとなった。2012年には，ドイツブンデスリーガでの活躍が認められた香川真司選手がマンチェスターユナイテッドに加入し日本での注目度は更に高まるであろう。しかしながら，フランスのリーグ・アンがこれらのリーグと同列に位置しているかというと疑問である。チャンピオンズリーグなどの結果からも，プレミアリーグ，リーガ・エスパニョーラ，ブンデスリーガ，セリエAと比較すると同格とはいえない。

フランスにおけるプロサッカーは，1932年に創設され，トップリーグは，ディヴィジョン・アン（Division 1）と呼ばれていたが，2002年シーズンより，リーグ・アン（Ligue 1）と改称され現在に至っている。20チームがホーム＆アウェイ方式で戦い，上位チームには欧州サッカー連盟チャンピオンズリーグ，同ヨーロッパリーグへの出場資格が与えられ，下位3チームは下部リーグのリーグ・ドゥ（Ligue 2）と毎年自動的に入れ替わる仕組みである。世界のトップリーグというよりは登竜門としてのリーグと格付けされている。

著者らは，これまでにJ1リーグの組織等に関する調査を行い，40チームにまで増加したJリーグチームが今後どうあるべきかを検討してきた。一方では日本におけるサッカー競技の競技力向上のためには世界のトップリーグで活躍する選手を数多く輩出することが肝要である。韓国の朴智星選手は，韓国の大学を卒業後京都サンガでプレーし，PSVアイントホーフェン（オランダ）を経てプレミアリーグマンチェスターユナイテッドに移籍しレギュラーとして活躍，2012-13年シーズンは，プレミアリーグクウィーンズパークレンジャーズに移籍して主将を務めている。技術だけでなく人格も含めて現時点での東アジア最高の選手と評価されている。朴智星と入れ替わりに入団したのが香川真司選手である。

Jリーグが2013年から新たに導入する「クラブライセンス制度」を巡っては，すでにJリーグのチーム内からも「クラブライセンス」を取得できないチームの存在が指摘されている。Jリーグチーム加盟のハードルを一度はクリアしたにも関わらず新たなハードルによって除名されることは避けなければならない。日本社会におけるスポーツの理解やプロスポーツマネジメントが経済優先であるという未熟さを示すものである。

そこで，本研究では，世界トップリーグ登録選手状況，世界トップリーグでのフランス国籍，日本国籍選手の状況，トップリーグへの登竜門として存在するフランスプロサッカーリーグ・アン（Ligue 1）の選手状況を分析することから，日本のプロサッカーチームの問題点

について研究することを目的として行った。

2. 方法

2012 年 8 月時点での，リーグ・アン（20 チーム 541 選手）プレミアリーグ（20 チーム 634 選手，フランス国籍 34 選手，日本国籍 4 選手）セリエ A（20 チーム 536 選手，フランス国籍 13 選手，日本国籍 2 選手）リーガエスパニョーラ（20 チーム，485 選手，フランス国籍 14 選手，日本国籍 0）ブンデスリーガ（18 チーム，508 選手，フランス国籍 3 選手，日本国籍 10 選手）を対象に，各リーグのチーム別所属人数，リーグ・アン及び 4 大リーグのフランス国籍・日本国籍選手のポジション別年齢，体格，4 大リーグへの初めて移籍した年齢，リーグ･アンにおける移籍，2011 年リーグ･アン，ドゥの出場時間について集計を行った。対象選手は表 1～表 3 に示すとおりである。

尚，年齢に関しては，2012 年での年齢とし，リーグ・アンにおいて，身長不明選手 8 名，体重不明選手 9 名はそれぞれの集計から除外した。

表 1.　リーグ・アン　選手

内訳	年齢（歳）	身長（cm）	体重（kg）
N	541	533	532
M ± SD	25.0 ± 3.73	180.8 ± 4.86	74.8 ± 5.41
Max	38	197.0	96.0
Min	17	162.0	57.0

表 2.　4 大リーグ　選手（フランス国籍）

内訳	年齢（歳）	身長（cm）	体重（kg）
N	64	64	64
M ± SD	26.5 ± 3.42	183.0 ± 4.83	77.2 ± 5.25
Max	35	193.0	93.0
Min	19	170.0	65.0

表 3.　4 大リーグ　選手（日本国籍）

内訳	年齢（歳）	身長（cm）	体重（kg）
N	16	16	16
M ± SD	23.8 ± 1.91	177.6 ± 4.25	70.1 ± 3.64
Max	28	189.0	81.0
Min	20	170.0	62.0

3. 結果

（1） リーグ・アン及び4大リーグのチーム別所属選手について

2012年8月時点での，リーグ・アン及び，プレミアリーグ，セリエA，リーガ・エスパニョーラ，ブンデスリーガの各チームの登録選手は，図1～図5（図中のチーム番号は2011～12年の順位）に示すとおりである。

リーグ・アンにおいては，2011～12年1位のモンペリエが33名で最も多くトゥールーズが22名で最も少ない結果であった。プレミアリーグではトットナム45名ウェストハム25名，セリエAではインテル32名フィオレティーナ22名，リーガエスパニョーラではマラガ30名レバンテ21名，ブンデスリーガではVfsヴォルスブルグ36名ボルシア，レバークーゼン24名という結果であった。

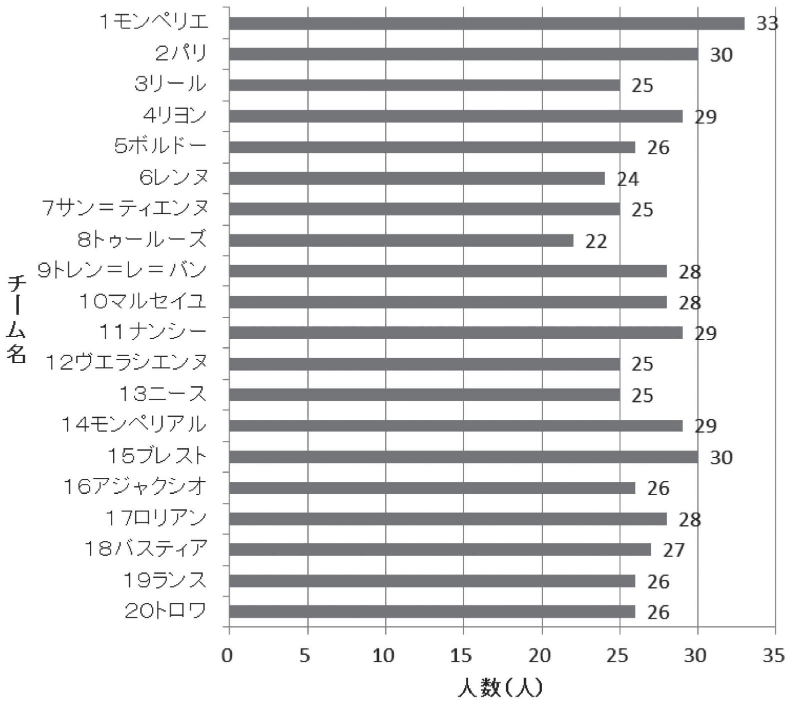

図1.　チーム別所属人数（リーグ・アン　2012年8月）

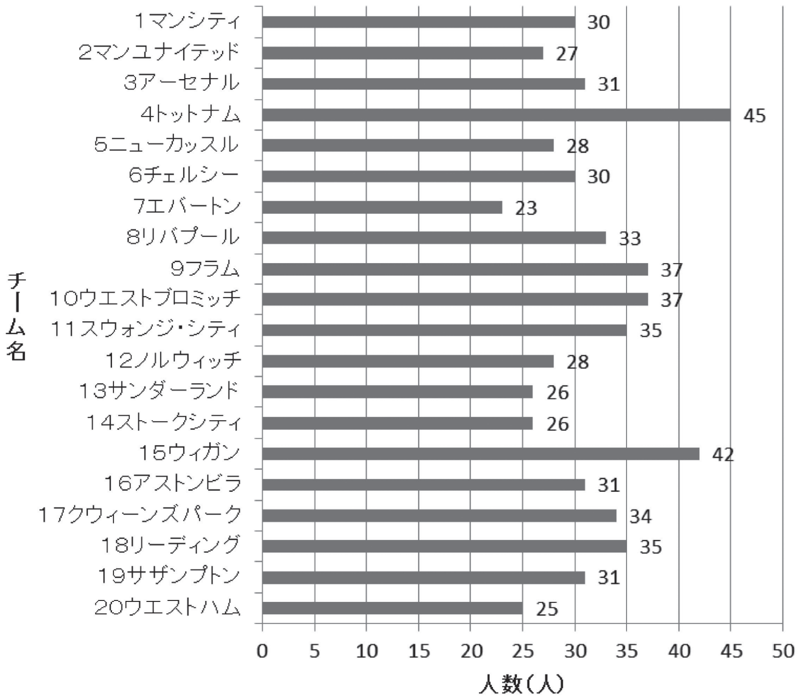

図 2.　チーム別所属人数（プレミアリーグ　2012 年 8 月）

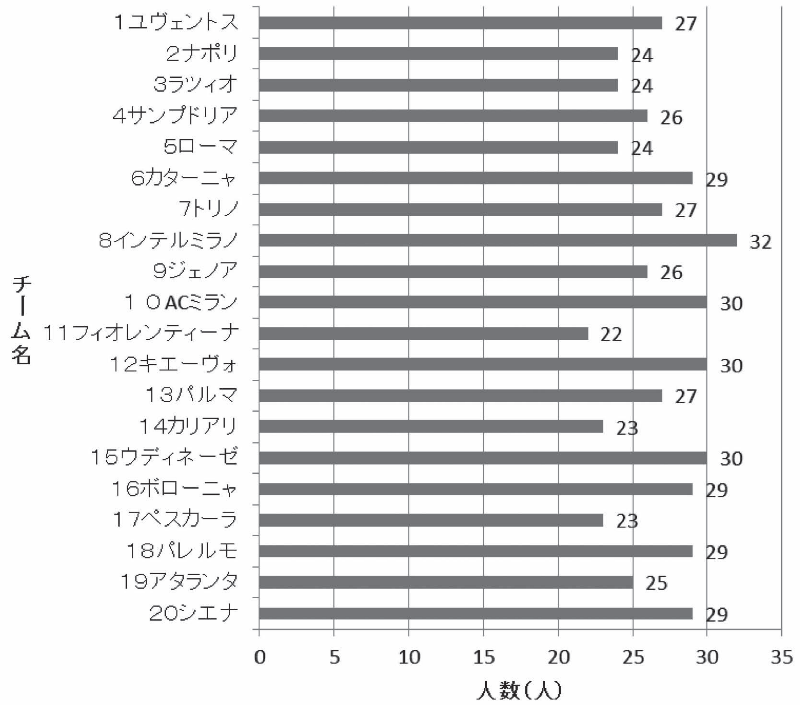

図 3.　チーム別所属人数（セリエ A アリーグ　2012 年 8 月）

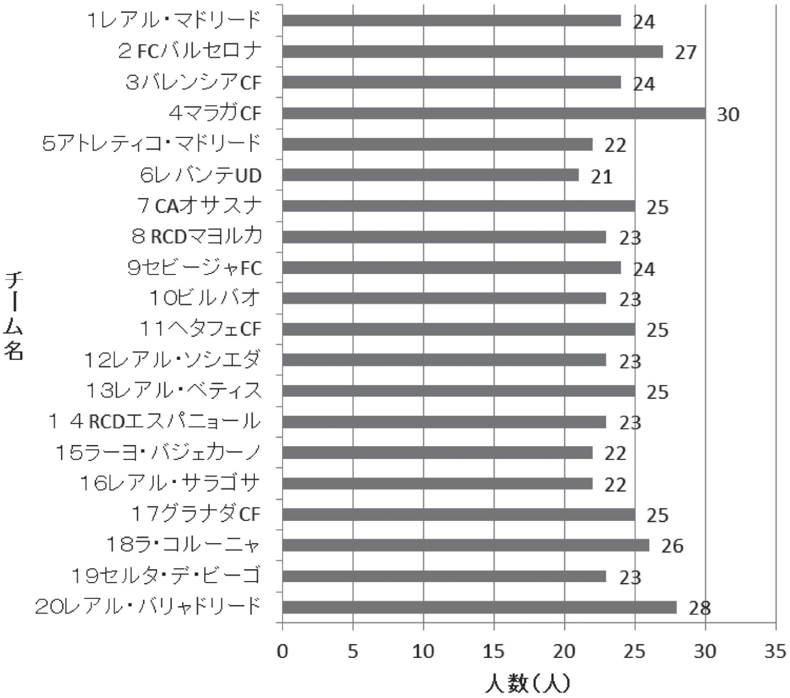

図4.　チーム別所属人数（リーガ・エスパニョーラ　2012年8月）

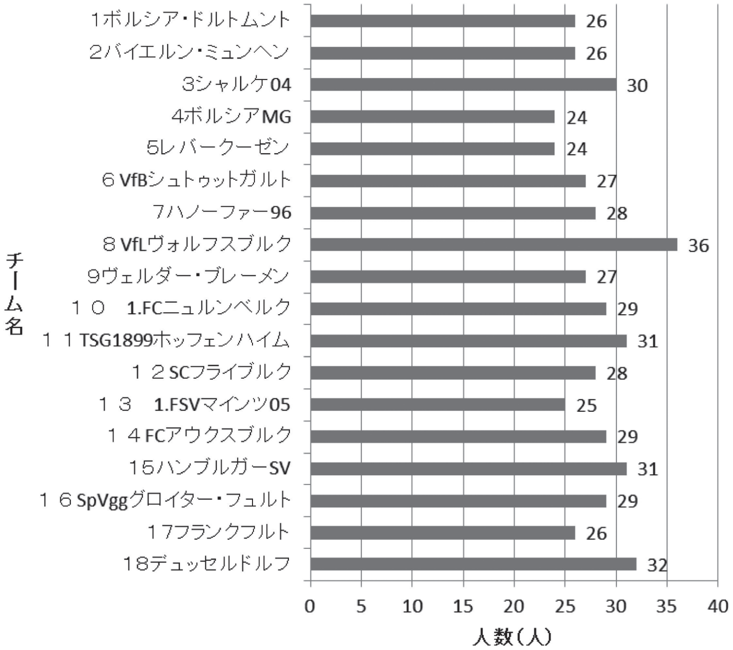

図5.　チーム別所属人数（ブンデスリーガ　2012年8月）

(2)　リーグ・アン及び4大リーグフランス国籍，日本国籍選手の年齢構成

リーグ・アン及び4大リーグに所属しているフランス国籍，日本国籍選手の年齢構成は図6，図7に示すとおりである。

リーグ・アンにおいては，20歳，22歳がそれぞれ48名と一番多く，以下24歳，27歳であった。4大リーグに所属するフランス国籍選手は64名であり53名がリーグ・アンを経験しており25歳7名が最も多い。日本国籍選手は15名中14名がJリーグを経験しており24歳4名が最も多い年齢であった。

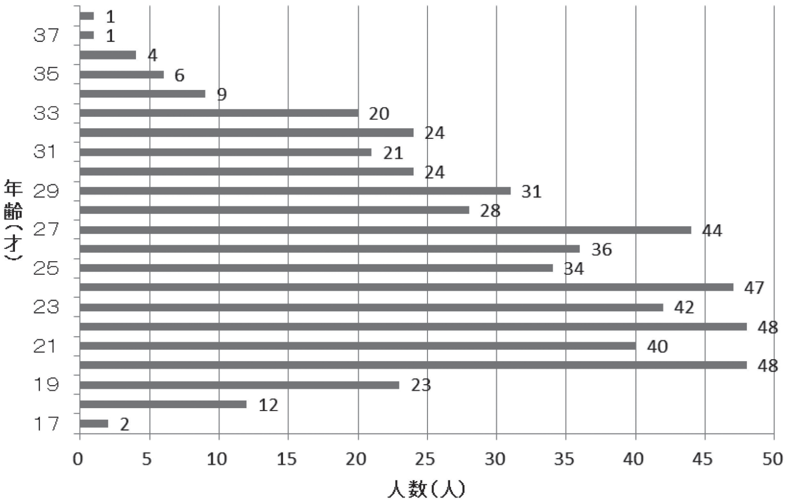

図6.　年齢構成（リーグ・アン　2012年8月）

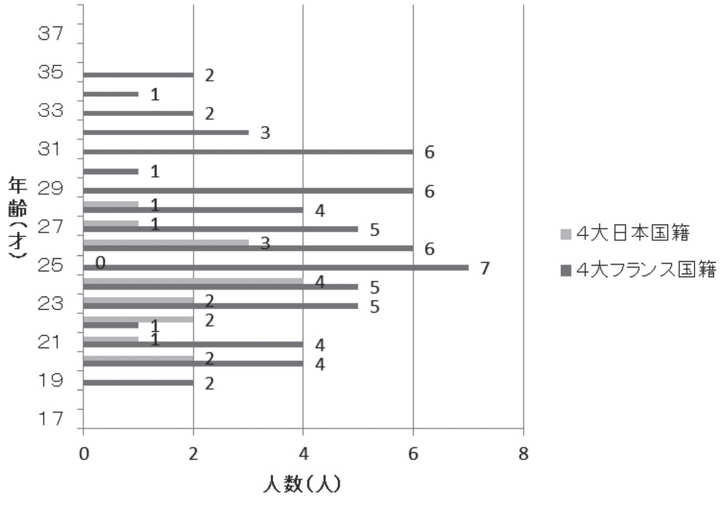

図7.　年齢構成（4大リーグ・フランス国籍・日本国籍　2012年8月）

（3）　リーグ・アン及び4大リーグフランス国籍，日本国籍選手のポジション別年齢，体格について

リーグ・アン及び4大リーグフランス国籍，日本国籍選手のポジション別年齢，体格については，表4〜表7に示すとおりである。

表4.　ポジション別人数（2012年8月）

内訳	リーグアン	4大リーグ	
		フランス国籍	日本国籍
ポジション	人数（人）	人数（人）	人数（人）
GK	67	1	0
DF	167	25	5
MF	182	25	7
FW	125	13	4
合計	541	64	16

表5.　ポジション別年齢及び体格（リーグ・アン　2012年8月）

内訳	GK			DF			MF			FW		
	年齢（歳）	身長（cm）	体重（kg）	年齢（歳）	身長（cm）	体重（kg）	年齢（歳）	身長（cm）	体重（kg）	年齢（歳）	身長（cm）	体重（kg）
N	67	65	65	167	166	165	182	180	180	125	122	122
M±SD	25.9±4.40	186.6±3.00	81.0±4.29	26.0±3.98	181.8±4.24	76.1±5.60	25.1±3.48	178.4±4.89	71.6±4.65	24.5±3.24	179.8±4.30	74.7±4.55
Max	38	197.0	94.0	37	193.0	96.0	36	194.0	91.0	33	195.0	95.0
Min	17	177.0	70.0	18	165.0	60.0	17	162.0	57.0	18	168.0	60.0

表6.　ポジション別年齢及び体格（4大リーグフランス国籍　2012年8月）

内訳	GK			DF			MF			FW		
	年齢（歳）	身長（cm）	体重（kg）	年齢（歳）	身長（cm）	体重（kg）	年齢（歳）	身長（cm）	体重（kg）	年齢（歳）	身長（cm）	体重（kg）
N	1	1	1	25	25	25	23	23	23	15	15	15
M±SD	32	190.0	93.0	27.7±3.59	185.1±4.40	79.8±4.72	25.9±2.31	179.3±4.44	73.4±3.31	24.9±4.20	184.7±3.69	77.5±5.56
Max	-	-	-	35	193.0	88.0	32	190.0	82.9	34	192.0	88.0
Min	-	-	-	19	174.0	70.0	21	170.0	67.0	19	173.0	65.0

表7.　ポジション別年齢及び体格（4大リーグ日本国籍　2012年8月）

内訳	GK			DF			MF			FW		
	年齢（歳）	身長（cm）	体重（kg）	年齢（歳）	身長（cm）	体重（kg）	年齢（歳）	身長（cm）	体重（kg）	年齢（歳）	身長（cm）	体重（kg）
N	-	-	-	5	5	5	7	7	7	4	4	4
M±SD	-	-	-	24.2±2.24	178.8±5.76	71.0±5.30	23.7±1.96	175.6±3.35	68.1±3.27	24.3±2.25	179.8±2.88	72.5±2.00
Max	-	-	-	28	189.0	81.0	28	180.0	73.0	27	183.0	76.0
Min	-	-	-	21	170.0	62.0	20	171.0	63.0	20	174.0	70.0

(4)　リーグ・アン及び4大リーグの国籍について

リーグ・アン及び4大リーグの国籍については，表8，表9に示すとおりである。フランス国籍の次にアフリカ国籍者が多い割合を示している。

表8.　リーグ・アンにおける国籍（2012年8月）

内訳	人数（人）	割合（%）
フランス国籍（単独）	290	53.6%
フランス国籍＋アフリカ国籍	120	22.2%
アフリカ国籍（単独）	57	10.5%
ヨーロッパ国籍（単独）	31	5.7%
中南米国籍（単独）	18	3.3%
ヨーロッパ国籍＋中南米国籍	13	2.4%
フランス国籍＋中南米	5	0.9%
フランス国籍＋ヨーロッパ国籍	4	0.7%
ヨーロッパ国籍＋アフリカ国籍	2	0.4%
ヨーロッパ国籍＋ヨーロッパ国籍	1	0.2%
合計	541	100.0%

表9.　4大リーグ　フランス国籍選手（2012年8月）

内訳	人数（人）	割合（%）
フランス国籍のみ	49	76.6%
フランス国籍＋アフリカ国籍	14	21.9%
フランス国籍＋ヨーロッパ国籍	1	1.6%
合計	64	100.0%

(5)　フランス国籍，日本国籍選手の4大リーグへの初移籍年齢について

フランス国籍，日本国籍選手の4大リーグへの初移籍年齢については，図8に示すとおりである。フランス国籍者が4大リーグに初めて移籍した年齢は，20歳24歳各8名，日本国籍者は19歳3名が多い年齢であった。

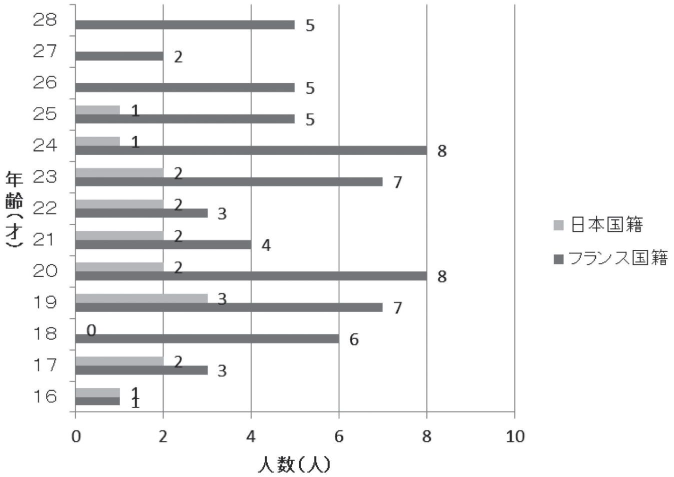

図8.　4大リーグへの初移籍年齢（フランス国籍選手，日本国籍選手　2012年8月）

(6)　リーグ・アンにおける移籍状況と2011～12年リーグ・アン，ドゥでの出場時間について

リーグ･アンにおける移籍状況と2011～12年リーグ･アン，ドゥへの出場時間については，表10，表11に示すとおりである。

表10.　リーグ・アンにおける移籍状況（2012年8月）

内訳	人数（人）	割合（%）
残留選手	442	81.7%
リーグ・アンから移籍	26	4.8%
リーグ・ドゥから移籍	26	4.8%
リーグ・ドゥからレンタルバック	20	3.7%
その他リーグからの移籍	14	2.6%
新人規契約	5	0.9%
リーグ・アンからレンタルバック	4	0.7%
4大リーグからの移籍	4	0.7%
合計	541	100.0%

表11.　リーグ・アン，ドゥでの2011年の出場割合

内訳	残留選手		リーグ・アンから移籍		リーグ・ドゥから移籍	
	人数（人）	割合（%）	人数（人）	割合（%）	人数（人）	割合（%）
出場無	64	14.5%	7	23.3%	7	15.2%
25%以下	119	26.9%	7	23.3%	12	26.1%
50%以下	87	19.7%	6	20.0%	10	21.7%
75%以下	89	20.1%	6	20.0%	7	15.2%
100%以下	83	18.8%	4	13.3%	10	21.7%
合計	442	100.0%	30	100.0%	46	100.0%

4.　考察

(1)　リーグ・アン及び4大リーグのチーム別所属選手について

リーグ・アンを含めた5つのリーグ98チームにおいて，チーム別の所属選手数は21名から45名という結果であった。特に25名以下のチームは，リーグ･アン6チーム，プレミアリーグ2チーム，セリエA 7チーム，リーガ･エスパニョーラ15チーム，ブンデスリーガ3チームの合計33チームであった。著者らの2011年J1の調査では，最小26名最大35名であり，J2昇格直後の柏レイソルが26人で優勝した。強力なスポンサーなど十分な資金力のあるチームは多くの選手を抱えることが可能であるが，経済力の乏しいチームは少ない人数で効率よく戦わなければならない。シーズン中の補強，チーム下部組織の充実なども考慮すべきであ

るが，高いレベルのリーグに所属するチームでも 25 名以下で編成していることに注目したい。

所属選手が少ないことでのメリットは，選手の人件費，練習，合宿，遠征，移動などの経費削減，所属選手の出場機会が高くなり選手のモチベーションが高くなる，指導者と選手や選手間の関係が厚くなりコミュニケーションが深まる，トレーニングが効率よく行われるなどがあげられよう。デメリットとしては，選手のコンディション不良が多い場合の対応，コミュニケーションが深いために切磋琢磨する競争力の欠如, トレーニングのマンネリ化, ハードなトレーニングを行いにくいなどが考えられる。

世界のトップリーグが少ない人数でもチーム編成が可能なのは，育成環境の問題もある。外国においてはプロ選手になるためにはプロチームの下部組織からのアプローチのみである。リーグ・アンで最も少ない 22 名で 2012 年シーズンを迎えたトゥールーズ FC を例にとると，下部組織としてアマチュア全国リーグ 2 に参加する成人のチーム，19 歳以下，17 歳以下，15 歳以下〜6 歳以下，女子とトッププロチームの下部組織として数多くのチームを抱えている。フランスでの成人のリーグ戦は，リーグ・アンを頂点にリーグ・ドゥ，3 部 4 部 5 部までが全国リーグ，その下に州，県リーグという構成でアマチュアも含めたピラミッド型である。従って，トップチームの人数が少なくても十分な選手資源を確保できており，かつ予備軍的な選手にも十分な試合が提供されている。

ブラジルなどの場合も，ステイトリーグが展開されている期間に前座試合として 19 歳以下のゲームが開催されプロになるための最終テストが行われる。最終的なテストの主となるものはプロとしてのメンタル，フィジカル面での強さ，スピードである。トップチームと同様に移動して週 2 回の 90 分ゲームをこなし僅かな合格者のみがプロ契約を結ぶこととなる。

日本においては，J クラブ，高校，大学とプロ選手になるために 3 つのアプローチがあり，下部組織の J ユースチームは高校 3 年生をもって終了となり，次のカテゴリーはトップチームしか存在しない。プロとしての最終段階は 19〜20 歳である。この年齢は筋力的に伸びる時期であり技術・個人戦術＋強さを習得できる時期にも関わらず日本の選手にはその場が提供されていないのが実情である。日本の J チームはリーグ戦を戦いながら選手も育成しなければならない。環境が整っているチームは良いが，存続や結果にこだわらなければならないチームでは育成に時間をかけることができず，J ユース・高校を卒業してプロになっても廃業せざるを得ない選手も数多く存在してしまっている。プロチームの監督は成績が目安であり毎年の結果が求められることを考えれば育成するという視点も欠けて当然であろう。ここに外国との大きな差異が生じている。チームの組織力に大きな差異がある。

日本の学校教育を考えれば高校 3 年生が節目であるが，プロサッカー選手を育成する視点

から選手として戦えるような年齢は20歳が目安である。19～20歳をどう強化するかは大きな問題である。Jリーグが19～20歳のアマチュアチームを持てば選手の社会的地位の問題が生じ，その後プロになれない場合の進路をどうするのかということは日本では大きな問題を引き起こすであろう。外国においても20歳までプロチームに所属していたものの，その後は社会に出され，それまで満足な教育も受けていないために生活に苦労しているケースは非常に多い。

現状では外国のように少ない人数でのプロチームの存在は日本においては厳しい状況であるが，Jリーグの中でも勝利は目指すが若手選手の育成に比重をかけるチームや19～20歳の選手を多く抱えるがその後の進路を提供できる環境づくり，例えば大学進学とか資格取得とかの方策を考えるなどの工夫が必要であろう。

(2)　リーグ・アン及び4大リーグフランス国籍，日本国籍選手の年齢構成

リーグ・アンにおいては，20～24歳までの選手が非常に多く541名中225名と約半数近くを占め，10歳代選手を加えると541名中262名に達する。チームの成熟度という点では，27～8歳前後の成熟した選手と22～3歳前後の伸び盛りの選手がバランスよく構成されたほうが良いとされている。リーグ・アンでは4大リーグへの登竜門として非常に若い選手が所属しているという特徴がみられる。

4大リーグのフランス国籍者は64名であり53名がリーグ・アン経験者である。25歳の7人が最も多く，リーグ・アンに比較すると成熟した年齢に達した選手が多い。リーグ・アンでの評価が4大リーグへのチャレンジとなっている。

4大リーグの日本国籍者は15名であり14名がJチーム経験者である。24歳の4人が最も多く，20歳から23歳の選手は7名と伸び盛りを迎えている選手が多く，今後も若い年代から移籍する選手が増える可能性がある。そのためにも各年代での世界大会での活躍が必要である。Jチーム個々の育成には限界があるので，引き続きトレセン制度や各カテゴリーでの代表チーム選手の育成が必要である。歴史的地理的環境的にJリーグが世界のメジャーになる可能性が低く世界で通用する選手を育てるにはやはり4大リーグへの移籍・出場が鍵となる。現在はブンデスリーガの所属に偏っているが今後も数多くの選手が移籍することを期待したい。フランス，ベルギー，オランダのリーグと同レベル程度の登竜門的リーグにレベルを上げる必要があろう。日本人の特徴からフィジカルコンタクト，瞬発力には劣るが知的能力，持久性，器用さなどを生かした内容のある試合を心掛けるべきであろう。現在移籍している選手にはセンターバック，ポストプレーといった高いフィジカルを求められるポジションよりもサイドなどでアクセントをつけるポジションが多いが，特にポストプレーなどフィ

ジカルの強い選手が移籍して活躍するようになれば日本のレベルも一ランク上がることができるであろう。

(3)　リーグ・アン及び4大リーグフランス国籍，日本国籍選手のポジション別年齢，体格について

表12は著者らの2011年J1の調査結果を引用したものである。

現在のシステムが4－2－3－1を多く採用しているために，リーグ・アン，4大リーグとJリーグでは若干ポジションの表記が異なるようである。トップ下の3を日本ではMF, リーグ・アン，4大リーグではFWととらえているチームもあり，ポジション別での比較が難しいが，日本人選手も体格の面では向上しているといえよう。今後は，体格面よりも，日本人が不足しているといわれる瞬発力などを中心とした体力の質に注目すべきであろう。

表12.　年齢・身長・体重（2011年J1ポジション別）

内訳	GK			DF			MF			FW		
	年齢（歳）	身長（cm）	体重（kg）	年齢（歳）	身長（cm）	体重（kg）	年齢（歳）	身長（cm）	体重（kg）	年齢（歳）	身長（cm）	体重（kg）
N	75	75	75	155	155	155	202	202	202	106	106	106
M±SD	24.7±5.89	185.5±3.45	78.1±5.03	26.3±5.00	179.4±5.66	73.4±5.74	25.5±4.95	174.6±5.06	68.4±5.23	24.8±4.73	177.9±6.55	71.9±6.06
Max	37	198.0	93.0	36.0	193.0	93.0	37.0	187.0	89.0	34.0	194.0	86.0
Min	16	179.0	65.0	17.0	162.0	60.0	17.0	162.0	58.0	18.0	165.0	57.0

松原悟（2011）「J1リーグチーム組織に関する考察」東北学院大学教養学部論集161号より引用

(4)　リーグ・アン及び4大リーグの国籍について

リーグ・アンにおいては，フランスの単独国籍者が54%フランス国籍とアフリカ国籍の2重国籍取得者は22%を占めている。4大リーグ所属フランス国籍者も単独は77%アフリカ国籍との2重国籍者は22%である。

フランスは，1984年のワールドカップでの優勝が唯一といってよい結果であり，それ以前はあまり注目される国ではなかったが，1970年代にプロサッカー選手育成システムをいち早く導入し，フランスサッカー協会主導のトップダウンでの改革を行い，協会は1972年に国立サッカー学院前身である育成センターを創設後，国内に11の前育成センター（12から15歳）を持ち，コーチライセンス，指導プログラム，公認育成センターなどの育成環境が充実しており，プロ32チームが公認の育成センターを所有している。また，2005年には移籍金による貿易収支が1,200万ユーロの黒字を記録し，各クラブにとっては貴重な財源ともなっている。アフリカの若い選手にとっては自国での育成は厳しい状況であることからプロという夢を実現するためフランスに渡り育成教育を受けることを希望する選手が多い。また，すでに育成がビジネス化しているためにスカウトはフランス国内のみならずアフリカを

中心として若い選手を獲得してフランスに連れてくるケースも多い。

育成システムが充実しているとはいえプロになる選手は限られ 100 人に 1 人いれば良いほうである。ビジネスの視点からは利益を上げるためには多くの若い選手が必要となる。10 代前半の才能を持った選手が成長と共に全てプロに適した選手にはなれない。その結果 10 代後半には切り捨てられる選手も多い。ビジネスと割り切る考えは理解できても日本では理解しがたい問題である。

ヨーロッパにおいては，植民地などの歴史的背景から多重国籍を認めている国が多く，ロシア，イギリス，アイルランド，フランス，イタリア，スイス，ポルトガル，フィンランドなどがあげられる。サッカーのリーグ戦において外国籍選手数の問題も絡み，2 重国籍を取得している選手も少なくない。

フランスにおいては，歴史的，距離的にも関係が深く育成環境の整っていないアフリカとの繋がりが強い。移住によってフランス国籍を取得している国民も多く，身体能力の高いアフリカ国籍，移住者などがプロサッカー選手の対象として注目されている。彼らの多くは生活基盤が弱くプロ選手としての成功を望んでチャレンジするが成功するのは一部の選手のみである。

歴史的，政治的問題であるので日本での多重国籍を考察することは難しいが，外国でプロ選手となることはこのような高いハードルと多くの競争によって成り立っていることは理解すべきであろう。日本でも同様に数多くの少年少女がプロスポーツ選手を夢見て活動しているが実現できるのはほんの少しである。

1984 年のロサンゼルスオリンピックがビジネスとしてのスポーツの大きな転換点であった。これはそれまでの政治的な介入やナショナリズムのスポーツからの自立として歓迎されるものであったが，ビジネスとしてのスポーツ，文化としてのスポーツがそれぞれ変容してきている。日本においては，青少年の健全育成，健康維持，文化としてのスポーツという理解は広がりつつあるが，経済的側面から企業スポーツの打ち切りや，プロスポーツ会社の倒産など，文化と容認しつつ，経済・ビジネスの基準が優先されている。欧州でもビジネス化したプロサッカーリーグや育成に問題が提起されているがスポーツそのものを問題視することにはならない。J リーグの掲げるスポーツ文化の醸成は大きな課題であろう。

(5)　フランス国籍，日本国籍選手の 4 大リーグへの初移籍年齢について

フランス国籍においては，20 歳 8 名，24 歳 8 名が最も多く，日本国籍では 19 歳 3 人が最も多い結果であった。4 大リーグのチームから見れば広範なネットワークから若くて有望な選手を早くからリストアップしていることが考えられる。移籍金などの問題も関係してくる。

FIFAによって定められた移籍代理人は，若い世代の世界大会や各国のリーグ状況から豊富なデータを集め，4大リーグで今後活躍しそうな選手を積極的にチームに売り込んでビジネスとしている。チーム側も若い選手は移籍金も安く将来一流選手になれば高額な移籍金収入が見込まれるという移籍市場の論理が働いている。選手の育成や移籍市場がビジネスとして成り立っているのである。

フランス国籍選手で24歳以降も多い傾向にあるのは，各チームが即戦力として補強する一環であることが考えられる。リーグ･アンが貴重な戦力補強のリーグであることが伺える。

日本協会，Jリーグも含めた若年層のプログラムが充実し各年代での世界大会での実績を上げ，その結果若い年代からの移籍は増えることが期待できる。現在はブンデスリーガに隔たっているが香川真司選手のようにさらにステップアップできる可能性もある。育成するチームの理解も必要であるが，ビジネスという面からも十分採算がとれるであろう。25歳以降の選手の移籍者が出現するようになれば，Jリーグがトップレベルに近いリーグと認識されよう。

（6） リーグ・アンにおける移籍状況と2011年度リーグ・アン，ドゥへの出場時間について

リーグ･アンにおける移籍状況では，残留選手はレンタルバックを含めると約87%である。著者らが2011～12年にかけてのJリーグでの調査での残留者は，J1が68% J2が58%であり，Jリーグに比較して移籍が活発ではない。また，4大リーグからの移籍はわずか1%に過ぎず，豊富な資金力を持つパリサンジェルマンチームに集中している。残留選手の出場時間については，2011年Jリーグの調査では，出場無がJ1で残留者364人中61人であったのに対し，リーグ・アンでは残留者442人中64人という結果であった。

リーグ・アンにおいては下部組織の充実もあり日本のように移籍が活発ではない。チーム組織の熟成度が高いために少ない人数でもリーグ戦を戦える状況であると考えられる。少ない人数のために出場機会も高い。リーグ・アンというプロリーグで戦える選手の資質が理解されているためにその基準に達していない選手は登録されず，登録された選手全てがリーグ戦に出場可能な能力を有しているといえよう。日本の場合は，チームの登録選手が多くチーム数も急激に増え，歴史も浅いために選手の能力基準が安定していない。技能の評価は相対的なもので難しい問題ではあるが，プロへの最終的な基準は，フィジカルの強さ，スピードの中での技術，戦術の発揮とチーム戦術などの理解能力である。ボールを蹴ったり止めたりの技術は少年でもできるが，成長に伴って強さ・スピードが増す中で技術を発揮できることや同レベルの強さ・スピードのなかで知的能力をいかに発揮できるかが必要である。この強

さ･早さなどは相対的で計量的に現わすことが難しいことからも，プロの登竜門であるJユース，高校，大学とJチームとの交流やJユース，高校，大学とジュニアとの交流など縦断的な交流を多くすることで選手自身の自己評価，点検，目標づくりを心掛けることが必要である。

5.　まとめ

世界トップリーグ登録選手状況，世界トップリーグでのフランス国籍，日本国籍選手の状況，トップリーグへの登竜門として存在するフランスプロサッカーリーグ・アン（Ligue 1）の選手状況を分析することから，日本のプロサッカーチームの問題点について検討した結果は以下のとおりである。

・世界のトップリーグでは25名以下の所属選手で構成しているチームが少なくない。
・日本では19～20歳の選手育成に問題点がある。
・リーグ・アンではフランス国籍，アフリカ国籍の若い選手が多く，トップリーグへの優秀な若い選手と即戦力選手の供給を行っている。
・リーグ・アンや4大リーグではプロ選手の持つべき能力を持っているものだけで構成されている。
・日本の選手が今後評価を高め競技力を高める点では若い選手がトップリーグに評価されることが重要であり，Jリーグ自体の質も高める必要がある。

プロサッカーの世界はプレミアリーグ，リーガ･エスパニョーラ，セリエA，ブンデスリーガを頂点として世界各国にリーグが展開され，プロ選手もプロを目指す選手もいつかは頂点のリーグでプレーしたいと希望を持っている。近年日本の選手が数多く移籍している事情は日本サッカー界が進歩していることを現わすものであるが，Jリーグが頂点のリーグになることは地理的歴史的環境的にも厳しい。2012年にJリーグが40チームまで増加したことは喜ばしい限りであるが，ビジネス的要素を多く抱えているプロチームは資金も含めた経済的な健全性は必要不可欠である。40チームが同列で優勝を目指すコンセプトでは今後成り立たないであろう。今回の研究によるリーグ・アンの示唆は，新たなコンセプトを生み出すことになると期待したい。プロチームが成り立っていくためには経済的基準だけで切り捨てられるようではスポーツ文化の醸成とはならない。一方プロチーム側も経済的基準だけでない新たなコンセプトを持つことも必要である。各チームの基盤に応じたチーム組織の提案，19～20歳代の育成方法などが今後の研究課題である。

参考文献

フロムワン編（2008）「愛するサッカーを仕事にする本」アスペクト.
グローバル・マーケティング研究会（2009）「日本企業のグローバル・マーケティング」白桃書房：16-40.
五島祐治郎（2009）「大学サッカーの断想」晃洋書房.
濱口博行（2010）「日本はサッカーの国になれたか．電通の格闘」電通.
広瀬一郎（2010）「極私的サッカー見聞録」東邦出版.
福　龍太（2008）「ブラジルのホモ・ルーデンス」月曜社.
J リーグ公式サイト（about J）　http://www.j-league.or.jp/aboutj/　2012 年 8 月.
J'sGOAL　http://www.jsgoal.jp　2012 年 8 月.
ジャン・ジュール・ジュスラン　守能信次訳（2006）「スポーツと遊戯の歴史」駿河台出版社：220-240.
松原　悟（2011）「選手構成からみた高校・大学サッカーの現状東北学院大学教養学部論集第 160 号：35-39.
松原　悟（2012）「J1 リーグチーム組織に関する考察」東北学院大学教養学部論集 161 号：55-66.
松原　悟・高橋信二（2012）「J リーグ移籍に関する考察」東北学院大学教養学部論集 162 号：17-30.
松原英輝他（2009 年）「フランスのサッカー選手育成の現状について」大阪教育大学紀要第 IV 部門第 57 巻第 2 号：241-258.
宮澤永光他（2009）「現代マーケティング」ナカニシヤ出版：208-227.
文部科学省ホームページ（スポーツ　スポーツの振興）http://www.mext.go.jp/a_menu/05_a.htm 2012 年 8 月.
R・トマ他　山下雅之訳「フランスのサッカー」白水社.
谷塚　哲（2008）「地域スポーツクラブのマネジメント」カンゼン.
The Official Website of the Barclays Premier League　http://www.premierleague.com　2012 年 8 月.
The Official Website of the Bundesliga　http://www.bundesliga.de　2012 年 8 月.
The Official Website of the League 1　http://www.lfp.fr/　2012 年 8 月.
The Official Website of the Legaseriea　http://www.legaseriea.it　2012 年 8 月.
The Official Website of the LIGA BBVA　http://www.lfp.es　2012 年 8 月.
The Official Website of the TFC　http://www.tfc.info　2012 年 8 月.

【論　文】

新人類の情報格差（デジタルデバイド）

片　瀬　一　男

デジタルデバイド（情報格差）digital divide
　情報化が進むことによって生じる経済格差のこと。パソコンやインターネットなど，情報機器やサービスを利用する能力の差によって，就職機会や収入に差が出てくる。

政治・経済教育研究会編
『改訂版　政治・経済用語集』山川出版社，2009：178-179.

　今後一層の進展が予想される社会の情報化に対応していくことはこれからの学校教育の重要な課題であり，このような社会に生きる児童生徒に必要な資質を養うとともに情報手段の活用による学校教育の活性化を図るという観点に立って，情報化への対応を進めていく必要がある。

総務省青少年対策本部編
『青少年白書（平成7年度版）』，1995：299

はじめに

　1970年代の若者が「モラトリアム人間」とラベリングされた（片瀬, 2010）のに対して，1980年代後半から90年代初頭—いわゆる「バブル期」の若者に対して，メディアは「新人類」なるラベルを付与した。この言葉は，1984年にマーケティング情報誌の『アクロス』（パルコ出版局）が最初に提唱した, とされる。同年にはまた『朝日ジャーナル』に, 筑紫哲也（当時，編集長）が10代から20代の若者との対談を行う企画「新人類の旗手たち」が連載された。この連載はその後，『新人類図鑑』（筑紫, 1986）として単行本化もされている。そして，この言葉は，1986年には新語・流行語大賞に選ばれている。

　この背景には，好調であった日本経済と，それがもたらした情報消費社会の成熟があった。すなわち，1970年代の2度のオイル・ショックをくぐりぬけ，体質強化を成しとげた日本経済は，1980年代半ばにはグローバル化しはじめた世界経済での地歩を固めていった。そして，中曽根内閣の私的諮問機関「国際協調のための経済構造調整研究会」の報告書（通称「前川レポート」）は，市場中心主義と経済のグローバル化を標榜し，規制緩和・民営化と金融自由化を提言した（1986年には国鉄改革・民営化関連法案が可決され，その翌年JRが発足することになる）。そして，1985年のG5（先進国5ケ国財務相・中央銀行総裁会議）に

おけるプラザ合意を契機とする円高は，のちにバブル景気と呼ばれる資産インフレをもたらしたのである。

こうしたなかで若者は，情報消費社会で先端的な位置を占めることになる。よく指摘されるように，1980 年代はブランド名をちりばめた『なんとなく，クリスタル』（田中, 1981）によって幕を開け，消費社会のなかの「「総ノリ」現象」（小谷, 1993）の主役として若者のサブカルチャーが開花したのである。小谷（1998）によれば，この「新人類」世代の社会心理的基盤は，彼らの子ども時代と高度経済成長期が重なっていたことにあり，「消費による自己確認」は 80 年代の若者の「心の習慣」（Bellah et al., 1985＝1991）ともなっていたという。すなわち，まず第一に，70 年代には成熟できない青年の問題系として語られていた「モラトリアム」志向は自明視され, むしろ大人になることを拒み, 豊かな社会でサブカルチャーを消費する主体となるという積極的な意味を帯び始めた（逆にいえば，企業の新たな顧客として重視されるようになった）。第二に，70 年代の「やさしさ」（栗原, 1981）が，対抗文化的性格をもち，他者（とりわけ弱者）へと開かれていたのに対して，80 年代の「やさしさ」は若者のなかで内閉し，お互いの自我を傷つけないよう，他者の内面に踏み込まない「やさしさ」へと変容していった。そして, 第三に, 70 年代の青年を特徴づけていた「遊戯性」（井上, 1977）もまた，消費社会の中で変容していった。というのも，消費社会の先端に位置する若者の「遊戯性」は，企業にとって大きな収益を生み出すものとなったからである。その結果，この時期,「「遊」と「俗」の結託」が生まれ，本来，批評的機能を有するはずの「遊」（井上, 1973）が変容し, いわば「遊戯性の専横」とも呼ぶべき事態が生じたのである（小谷, 1998：187-190）。こうして 70 年代の成熟できないままさまよう「モラトリアム人間」から, 80 年代の情報消費社会の主役としてモラトリアムを享受する「新人類」へと青年論の論調が転換したのである。そして，発達論的な含意をもつ「青年」（子どもから大人への移行期としての青年期）に代わって, この時期以降, 消費文化やサブカルチャーの担い手としての「若者」という用語が多用されるようになった。このことは，若者が大人との連続性・接続性よりも断絶性・異質性においてとらえられることを意味しており，まさに「新人類」という表現は，こうした若者論の転換を象徴しているともみることができる。

1. 「新人類」から「オタク」へ：情報化の光と影

1980 年代はまた情報化の流れが若者のサブカルチャーに大きな影響を与えた。そして,「コンピュータ新人類」（野田, 1987），「情報新人類」（逢沢, 1991）なる造語が若者に冠せられることになる。政治の熱狂が冷めた 1970 年代は，モラトリアムを長期化させた「シラケ世代」

と呼ばれた若者が，1980 年代には一転して，情報化の流れにも乗ることで，一躍，時代の最先端に踊りだしたかのように語られはじめたのである。ここでは「新人類」なる語は，成人世代から理解不可能な「異星人」（中野, 1985）であると同時に，最先端のブランドを身につけたり，新たな情報機器を自在に扱う先端的な存在を示す両義性をおびることになったのである。

この「情報新人類」論の先駆けとなったのは，守弘（1993）によれば，平野・中野（1975）の「カプセル人間」論だったという。ここでいう「カプセル」とは情報機器を備えた「自我の殻」であり, 当初, 念頭に置かれたのは個室で受験勉強をしながら, 深夜放送を聴く若者であった。しかし，やがて移動可能な「自我の殻」としての「クルマ」―エアコンのきいた快適で移動可能な「カプセル」のなかでカーステレオの音楽を聴く若者たちへの注目も集まった。彼らにとって個室も車も自分だけの居場所であり，好きな情報収集だけをすることができる。たとえば, 好みでない音楽や情報はスイッチを切ることで遮断することもできる。この点で,「カプセル」は，外界との境界を形成する「バリア」であると同時に，情報をろ過する「フィルター」でもあった[1]。守弘（1993）は, こうした平野・中野（1975）の「カプセル人間」論こそ, 1980 年代に展開される「情報新人類」論の原型をつくったとみる。

そして，実際，1985 年に開催された「つくば科学万博」に象徴されるように，本格的に情報化の流れが日本に入ってくると，若者をメディアのメッセージの「裏」まで解読する能力をもった「創造的受け手」（稲増, 1991），「情報的能力」と「統合的能力」のバランスをとることのできる「高感度人間」（成田, 1986）としてとらえる論調がめだってくる。たしかに,「カプセル人間」以来，孤立した「個室」「クルマ」に閉じこもる社会性の欠如を指摘する議論もあった[2]。つまり，「情報新人類」に対する評価には，肯定的評価と否定的評価が相半ば

---

[1] ソニーが 1979 年にウォークマンを発売すると，どこでも音楽を聴くことのできる携帯型ステレオカセットプレーヤーとして爆発的に売れ，これによって若者の「カプセル人間化」はさらに進んだとされる。

[2] 1990 年代にも，中島（1991=1995）が改めて若者における＜コトバ＞の不在としての「コミュケーション不全」を問題にする。彼女は，この時期に特有の「オタク」，「ダイエット」，さらに少女たちの「少年愛趣味」(「やおい」) が一見ばらばらに存在するかのように見えても, 現代社会においては「コミュニケーション不全症候群」という名の現代的な適応様式としてとらえられるとした。彼女の言う「コミュニケーション不全症候群」とは，電車内で他人の足を踏んでも何とも思わなかったり，車中で平気で化粧や食事をする若者にみられるように，まさに他者の存在に対する想像力の欠如である。すなわち, ① 他人のことが考えられない, ② 知り合いになるとそれがまったく変わってくる，つまり自分の視野に入ってくる人間しか「人間」として知覚されない，③ 人間関係への適応過剰もしくは適応不能, であるとした。このような「対人知覚障害」は, かつては世間の「常識」「礼儀作法」といった伝統的知恵によって, あるいは他者との共感を可能にする「教養」「想造力」によってカヴァーされてきたが，現在のような常識や教養が崩壊した時代には，それもできなくなっている。そして，中島（1991=1995）は，この「症候群」をもたらした要因が，個人の問題に還元されるものではなく，過密化・選別化がすすむ現代社会の構造そのものにあると主張する。

さらに，中島（1991=1995）によれば，たとえばカーマニアにみられる「車」という＜モノ＞への固執は，それが周囲の危険から守ってくれる「自我の外殻」「バリヤー」であるからだという。かつてならば，自我は広い知的・想像的世界で紆余曲折を経ながら自力で形成されたが，現代において

したが，80 年代後半には前者の評価が優位に立ち，「理解はできないが将来性がある」という評価に収斂していった，とされる（守弘, 1993）。

ところが，こうした「新人類」への評価を暗転させる事件が 80 年代末に起きる。それは，1989 年 8 月に連続幼女殺人犯として宮崎勤元死刑囚（2008 年に死刑執行）が逮捕されたことである。それまで「情報新人類」は，「理解できない」という評価があったものの，それは来るべき情報化社会の「未来を先取りする」者という肯定的な評価によって「打ち消された形になっていた」（守弘，1993：158）。しかし，この事件を境にメディアは「情報新人類」に今度は「オタク（おたく）」というラベリングをし[3]，その否定的側面を強調しはじめる。とりわけ，宮崎が個室（自宅の離れ）に閉じこもり，隙間もないほど山積みされたビデオとコッミックに囲まれた生活をしていたことから，生身の人間とのコミュニケーション能力を欠き，現実と虚構の区別がつかないまま，連続少女殺人事件という，まさに理解不能で異常な犯行に及んだとメディアによって喧伝され，社会に大きな衝撃を与えた。

小谷（1998）は，こうした「おたく」的な行動様式を情報化社会における「情報爆発」に対する反応の一形態としてみる。過剰な情報は他者の真意を図りがたい存在とし，コミュニケーションを不安定化する。そこで，「おたく」的な行動様式は，「個室」という「シェルター」にこもり，過剰な情報や他者から「逃避」することである。そして，情報機器の持つ「母親的性格」に着目する。すなわち，高度化した情報機器は，自分の欲求に忠実に奉仕し，言うことをきいてくれる「母親」代わりとなる。そして，これによって自分の意のままにならない他者との煩わしいコミュニケーションを回避することができるというのである。

宮台（1990, 1994）もまた，80 年代の若者論が「「新人類」論に明けて「オタク」論に暮れた」と総括する。そして，記号消費論やシステム論をもとに，両者を次のように対比する。すなわち，「新人類」が記号的な消費行動と対人関係を結合した若者であったのに対して，「オタク」はそうした新人類的な対人関係から退却してメディアの与える世界に自閉する若者た

は「車という現実に彼らの存在を世界からつつみ，隔て，場合によっては防衛のヨロイにも，また攻撃の手段にもなってくれる人工の殻のなかに身をひそめ」，自閉してしまうところに「コミュニケーション不全症候群」が発生した，という。このように，「おたく」や「ひきこもり」，摂食障害，「やおい」文化などを，若者の関係性の問題（たとえば，性愛における「所有」と「関係」のジェンダー差）として統一的にとらえる視点は，その後，斎藤（2009）などにもひきつがれていく。

ただし，中島（1991=1995）の議論では，「コミュニケーション不全症候群」を引き起こした原因が，社会構造や文化（とくにコミュニケーションを媒介する言語文化）の変容との関連でとらえられていないために，それへの「処方箋」も「自分をみつめ，苦しみを認識する勇気をもとう」といった心理主義に陥っている。

3　この「オタク（おたく）」の語は，宮台（1990, 1994）によると，1983 年に評論家の中森明夫が『漫画ブリッコ』のコラムでコミック・マーケットに集まる若者を「おたくと命名する」として，差別的な扱いをしたことに由来する。しかし，2004 年に「オタク（おたく）」を主人公とした『電車男』（中野，2004）が映画化・ドラマ化されヒットすると，「オタク株は急上昇」（「社会を映すラベリング：名前をつけ分類するのが好きな日本人」『朝日新聞』2005 年 12 月 24 日）したという。そして，これと逆に肯定的評価が否定的評価に変わったのが「フリーター」だとされる。これについては，注 9 参照。

ちである，という。そして，1985年と86年にマーケッティング・リサーチ会社で行った大学生の調査をもとに，若者をいくつかのクラスターに分けたうえで，両者が分化していく過程を仮説的に描き出した。それによると，どんな文化も拡大期にリーダーとフォロワーが分化する。当初（1970年代中盤）は，リーダー部分で新人類文化とオタク文化は未分化であったが，まず新人類文化が広範なフォロワーを獲得し，80年代に入ると新人類文化が優位にたった。これによってメディアによって喧伝される「メジャー文化」としての新人類文化は「取り残された者」にとって参入が困難な「敷居の高い」文化になっていく。こうしたなかで新人類文化に「取り残された者」の「救済コード」となったのが「オタク文化」だという。そして，この「オタク文化」にも広範なフォロワーが成立していった。その過程で，宮台（1990, 1994）によれば，2つの文化類型が「対人関係得意人間」と「対人関係不得意人間」という人格類型と重なる事態が進行したという。つまり，当初は同一のリーダー部分で発生した文化が，フォロワー部分で担い手の分化を引き起こしているというのである。

この人格類型と文化類型の対応関係に注目して，宮台（1990, 1994）はまた文化の差異における「階層コードの崩壊」を主張する。すなわち「文化の敷居」は従来は階層的要因（所属階層・可処分所得・財産など）によって形成されてきたが，80年代は中流意識の飽和と高度消費社会の到来が「階層コードに言及する＜物語＞」を無効化したという。とりわけ人格システムにとっては，階層コードの無効化によるコミュニケーションの手がかりの不足を複数の選択可能な＜物語＞によって埋め合わせることになった。そこでは，記号消費と対人関係の様式が相互に前提を供給しあうようになった。その結果，対人関係が不得意な「オタク」的な若者にとっては，新人類的な記号消費は「敷居」の高い文化となって参入しにくくなった。このように消費コードが，階層コードを媒介とせずに，直接，対人関係能力に言及し始めたこと—これが新人類とオタクを分化させる要因になった，というのが宮台（1990, 1994）の仮説である。

これに対して，新井（1993）は，70年代から80年代に至る若者像の変遷を次のように総括している。すなわち，まず「70年代青年論」の基調をなした自我論の図式（片瀬, 1993）に，80年代前半にメディア親和性によって描かれた「高感度人間」（成田, 1996）が付加され，戦後の日本的個人主義を特徴づけるミーイズムが徹底されていった。その結果，ライフスタイルのプライバタイゼーションが全面化し，最終的に情報消費感覚が一般化したために，対人的なコミュニケーションが回避され，メディアに依存した「オタク」的な存在が描き出されるにいたった。

さらに新井（1993：197-200）は，こうした「情報新人類」論の言説を批判的に検討し，論者たちが実証的手続きを二の次にして，自らの生活体験（学生時代の体験）をもとに時代

迎合的な若者論を展開してきたのではないか，という疑義を提起する[4]。それによると，80年代の若者論の論者は，いわゆるエリート的な教育経験をもっている。そうした「難関」を突破するためには並はずれた情報処理能力が必要である。こうして主に首都圏で「高感度人間」としての訓練を受けた学歴エリートが展開したのが，この時期の若者論であったというのである。

そこで新井ら（新井・岩佐・守弘, 1993）は，1989年と92年に首都圏に住む若者（高校生・専門学校生・大学生）を対象にメディア接触行動を調べた。その結果，彼らのメディア接触は稲増（1991）が指摘するほど「創造性」はなく，たんに一時的な余暇として視聴する「消費性」が強かった。つまり，この時期の若者は，能動的・創造的なメディア駆使能力をもっていなかったのである。こうして新井ら（新井・岩佐・守弘, 1993）は，「新人類論の虚構性」を指摘する。そして，その背後にある要因として，若者像の過度の単純化や若者の親メディア性に対する極端なオプティミズム, 先端風俗の過度の一般化, さらには時代精神の問題（情報化に適合的な若者像が求められたこと）を指摘している。

しかし，この新井ら（新井・岩佐・守弘, 1993）の調査もまた，首都圏（しかも「新人類論」とはずれた世代）の若者（高校生・専門学校生・大学生）に限られている。さらに先にふれた宮台らの調査も, リクルート社に登録された首都圏の大学生であった。調査時点(1985年，86年）の大学・短大進学率は，30% 程度であることを考えると，どちらの調査もサンプルに偏りがあることは否めない。したがって, 全国調査のデータにもとづき,「情報新人類」世代を再定義して分析する必要がある。

2.　情報新人類論の再検証

2.1　情報コンシャスネスの帰結：脱階層志向性と情報格差のパラドックス

そこで，こうした「情報新人類」をめぐる言説を再検討するために，以下では1995年の「社会階層と社会移動に関する全国調査（SSM調査）」のデータを使って分析を行う。しかし，SSM調査は階層と移動に関する調査なので，職業や学歴・所得といった階層変数を中心に設問が設定されている。そのため，実際の情報行動が質問にとりいれられたのは，2005年SSM調査（B票）で「インターネットで買い物やチケット予約をする」「インターネットや携帯電話などの通信の費用」が訊ねられたくらいである。しかし, 1995年SSM調査には, 所有財の質問項目に「ビデオデッキ」「パソコン・ワープロ」「FAX」がある[5]。そこで，以下

4　新井（1993）によれば，宮台（1990）は，自らの高校時代の生活環境を前提とした「我田引水」的な調査データの解釈を行っているという。

5　なお, 2005年のSSM調査（A票·B票）では, 財産項目には情報処理機器として「電話（携帯電話·PHSを含む)」「衛星放送·ケーブルテレビ」「DVDレコーダー」「パソコン·ワープロ」「高速インター

ではこれらの項目を用いて，当時の若者の情報行動に関する分析をおこなう。

ただし，1995 年の SSM 調査で，この項目を使った分析は，すでに遠藤（1998, 2000）によってなされている。遠藤（1998）は，まず「パソコン･ワープロ所有者」と「FAX 所有者」に注目し，15 歳時の情報関連機器（ラジオ・テレビ・電話）の保育状況や学歴との関連をみた。そして，パソコン・ワープロの所有が 15 歳時の情報関連機器の保育や学歴と関連するのに，FAX 所有はそれらと関連しないことを指摘する[6]。

そして，両者の間には階層の重視度や「自己-社会認識」にも違いがあることから，「パソコン・ワープロ所有者」を「情報コンシャスなグループ」と定義し，その社会的属性および社会意識・ライフスタイル戦略を年代も考慮に入れながら分析している。それによると，情報コンシャスなグループは，学歴が高く，収入・財産も多いうえに，自己評価や階層帰属意識も高いという。そして，階層帰属意識の高い者は，「階層志向」と「脱階層志向」（片瀬・友枝, 1990）の双方が強いが，そのなかにあって「情報コンシャスなグループ」は，社会活動やサークル活動，家族などを重視する一方で，収入や財産の獲得を重視しない「脱階層志向」が顕著（ただし学歴の重視度のみ高い）であり，また「現状変革志向」も強いという。

さらに遠藤（2000）によれば，パソコン・ワープロといった情報関連機器が，一般の耐久消費財のもつ地位表示機能とは異なり，使用してはじめて価値を生むので，① 使用目的がある，② 使用する能力（コンピュータ・リテラシー）がある，という 2 つの条件を満たさないと所有する意味がないという。このうち ① の条件から，情報コンシャス層は専門・管理職に偏り，② の条件からリテラシー獲得機会としての高い学歴も必要になるという。そして, エーレンライヒ（Ehrenreich, 1989=1995）のエリート層としての「専門職の中流階級」――すなわち資産よりも収入の高さによって特徴づけられる高学歴の専門・管理職――という概念を援用しながら，情報コンシャス層を「コンピュータおたく」よりも社会の中核を占める層と特徴づける。また収入の高さは，当時はまだ高価であった情報関連機器を購入できる前提であったと同時に，その結果として高収入を得ている可能性もあると推測する。

遠藤（1998, 2000）はまた，年代別の分析により，こうした「情報コンシャスなグループ」のもつ脱階層志向的なライフスタイル戦略が普及してきた過程に関して 2 つのシナリオを仮説的に提示している。1 つは 20 代から 40 代にかけて社会化が進行することによって，情報コンシャスなグループの脱階層志向性が拡大するというシナリオである。すなわち，若い世代ほど情報機器に関心があると言われてきたが，1995 年の SSM 調査のデータからは，必ず

ネット回線」が含まれている。

[6] その理由として，遠藤（1998）は，パソコンやワープロが，すべての情報をデジタル化するのに対して，FAX はアナログ情報をそのまま扱える機器であることをあげている。

しもそのような傾向は見られなかった。むしろ30代，40代の方が「パソコン・ワープロ」を保有する「情報コンシャスなグループ」に属する者が多かった。20代ではまだ社会的経験が少なく，そのライフスタイルは自分で築き上げてきたというより出身家庭の属性に依存している。しかし，社会的経験を積むなかで30代では情報コンシャスなグループの割合が増大し，階層的地位にもその影響が及びはじめる。そして，40代になると階層的地位の上昇に対する情報コンシャスネスの有効性の結果として，「情報コンシャスなグループ」はますます社会的優位性を獲得する――これが遠藤（1998, 2000）の言う第一のシナリオである。

これに対して，第二のシナリオは，40代から20代へと社会の情報化が進行するというものである。すなわち，情報化が進展しはじめたのは，95年時点での40代が20代初めであった頃（パソコンが登場したのが1970年代後半であった）であり，フロンティア精神をもった人々がこれに関心を示し，脱階層的な志向をもつ若者文化とコンピュータ技術が結びついた（遠藤, 1998）。そして，このコンピュータ技術が社会的優位性をもたらすことから，情報コンシャスネスと脱階層志向的なライフスタイル戦略が結びついて一般化した。その結果，後続する世代ではこうした脱階層志向的なライフスタイル戦略がより受け入れやすいものとなり，情報コンシャスネス以上に普及したために，「情報コンシャスなグループ」とそれ以外のグループの差異が曖昧化した。そして，さらに情報化が大衆化することによって，情報コンシャスネスのライフスタイル戦略は，もっとも若い20代では，社会的優位性を表示するものでなくなり，むしろ階層志向的な価値を重視する傾向が表れ始めた，という。そして，遠藤（1998）は，現実にはこの2つのシナリオが混在して現在の状況を作り出したと推測している。ここから，遠藤（1998）は，「情報コンシャスなグループ」は優位な位置を占めているので，その脱階層志向的なライフスタイル戦略が今後，日本社会において全般的な潮流となる可能性がある一方で，情報コンシャスを「梃子」として，階層社会における優位性が再生産され，現実には階層格差が維持･拡大されるという「脱階層志向と情報格差のパラドックス」（遠藤，1998：167）がみられると結論づける。

さらに遠藤（2000）は，情報コンシャス層では，全般的公平感が高いと同時に，領域別別不公平感（とくに性別･年齢などの属性要因による不公平感）も高いことから，この層を「オルトエリート」すなわち「潜在的にはエリート層になることの可能な能力を持ちながら，何らかの（個人の努力を超えた）理由でその能力が社会的に評価されないかもしれないとの大きな不安を抱え，この不安にせき立てるように何らかの行動を起こそうとする」対抗的エリート[7]，社会における自己実現をつうじて現状のエリートにとって代わろうとするエリート予備

[7] 「オルトエリート」とはAlternative-Eliteの略で，遠藤（1999）によれば，平等を建前としながらも階層性を内包した民主主義社会に，インターネットに代表されるCMC（Computer Mediated

軍であるとする。そこで，遠藤（2000）は，20代の情報コンシャス層／非コンシャス層に注目する。そして，20代の若年層が，他の世代に比べて，地位不安が高く，現状維持志向が低いという。この世代は自分が社会の周縁に位置づけられていることを自覚しているために，社会の優位層に上昇しようとする志向が，とくに情報コンシャス層で高い。また全般的不公平感も情報コンシャス層で高く，非コンシャス層で低いという分化もみられる。ここから遠藤（2000）は，若者層における2つの地位戦略を推測する。1つは，社会における未熟者――この時期，高等教育進学率の急増によって，モラトリアムの長期化も大衆的規模で生じていた――という地位を受け入れ，そこから着実に社会の階梯を登ろうとする同調戦略であり，もう1つは自らを革新的な「オルトエリート」として位置づけ，年長世代に挑むという対抗戦略である。

このように，遠藤（1998, 2000）においても世代に着目した分析がなされているが，必ずしも「情報新人類」といった若者論の文脈での検討はなされていない。また情報機器としてFAXとパソコン・ワープロの所有に着目し，最終的に「パソコン・ワープロ所有」を「情報コンシャスネス」の指標としているが，もう1つ「情報新人類」を考察する上で重要な情報機器が1995年のSSM調査の財産項目に含まれていた。それは「ビデオデッキ」である。これは先にもみたように「情報新人類」の「亜種」ともいうべき「おたく（オタク）」を特徴づける情報機器である[8]。さらに，遠藤（1998）は，社会意識（とくに脱階層志向性）との関連に関心があったためか，1995年SSM調査のB票のみを分析しているが，財産項目はA票・B票に共通してある。そこで，両者のデータを統合することでサンプル数を確保することができる（ただし，以降の分析ではA票・B票のいずれにしかない項目については，それぞれの調査票のデータを使う）。以下では「情報新人類」の社会的性格という観点から，1995年SSM調査データの分析を行うが，それに先立ってどの世代（出生コーホート）を「情報

Communication）が浸透し，大衆化した情報化社会が参加のコストの低いコミュニケーションや組織・運動――これを遠藤（1999）は1995年の阪神大震災の際のボランタリーなネットワークに萌芽的にみられた「インターネット・アクティビズム」と呼ぶ――が実現することによって誕生してくるという。それは「やがてエリートになる能力を潜在させているが，現状では，権威のヒエラルキーの中位以下におり，したがって，心情的にはエリート層に対抗的（非エリート層に同調的）であり，マイナーカルチャーに自己のアイデンティティを託す」層を意味する。具体的には，遠藤（1999）は，当時のアメリカ民主党の大統領・副大統領候補で「情報ハイウェイ構想」をもっていたクリントンとゴア，マイクロソフト社の創業者・ビル・ゲイツなどを念頭に，現在は周辺的な位置にある若年層や女性などがインターネットをもとに緩やかなネットワークを形成しながら，社会的な発言力を強めていくという。

8　実際，1980年代の「情報新人類」論を批判的に検討した新井ら（新井・岩佐・守弘，1990，1993）が着目したのも，当時の若者のテレビ・ビデオ視聴行動であった。また，パソコンが一般家庭に普及し始めたのは，1995年SSM調査が行われた年にマイクロソフト社からGIF機能を備えたWindows95が発売された以降であった（パソコンの普及率は，1988年度末で9.7%，90年度末で10.6%，95年度末は15.6%であるのに対して，99年度末には37.7%，2003年度末では78.2%となっている（総務省『通信利用動向調査報告書世帯編』）。

新人類」とするか検討しておく必要がある。

2.2　情報新人類の世代

「情報新人類」の世代の定義については，さまざまな論者が議論しているが，それらの議論はおおむね一致している。たとえば，逢沢（1991）は，「情報新人類」を当時の 20 代（1962〜1971 年出生）としたうえで，「物質的な面で不自由することもなく育った世代」とする。そして，その特徴を企業への帰属意識が低く，転職をいとわず，場合によっては特定の企業に属さず「フリーター」的な生き方をする点に見出している[9]。また，逢沢（1991）は，「情報新人類」は，企業に入っても昇進を望まない傾向があると述べているが，この点は先の「情報コンシャスなグループ」の脱階層志向性を指摘した遠藤（1998）の議論とも符合する。

また，小谷（1998）は，「新人類」を 1960 年代以降に生まれた者（1995 年 SSM 調査でいえば，20 歳〜35 歳に該当する）と規定し，この世代が幼少時からテレビをはじめとするメディアに囲まれて成長してきたために，「高度のメディア・リテラシーと，先行世代にはない「感性」とを有している」（小谷，1998：180-181）と特徴づけた。そして，この世代の「社会心理的基盤」に関しては，「子ども時代と高度成長期が，ほぼ完璧に重りあっている」ために，「消費による自己確認」ともいうべき心性を育んできたという。その結果，彼らは自らが所有する消費財と，メディアから得た情報の新奇性・豊富さを誇示することで「自己の比較優位性を確認」する傾向をもつとした。

他方，野田（1987：26-27）は，コンピュータ体験の仕方から，世代を 3 つに分けている。まず，コンピュータ第 I 世代は，当時（1987 年時点）30 代（1948〜57 年出生）で，就職後，仕事の中でコンピュータに接した世代で，「コンピュータ思考に浸る以前に，産業社会への社会化の過程を終えて」いるので，しばしばコンピュータの作動に苛立ち，いわゆる「テクノストレス」を感じている人々である。これに対して，第 II 世代は，当時の 20 代（1958〜67 年出生）で，マイコンの登場（1977 年から 79 年）の頃，高校生か中学生であり，成人としての社会的役割を獲得する以前もしくはそれと並行してコンピュータ世界になじんだ青年たちである。さらに，コンピュータ第 III 世代は，やはり当時でいえば 10 代（1968〜77 年出生）で，多様なゲームのソフトを通じてコンピュータに出会った世代である。そして，野田（1987）は，このうちコンピュータ第 II 世代と第 III 世代を「コンピュータ新人類」と呼んでいる。つまり，

9　なお，「フリーター」という語は，現在では正規雇用に入れなかった若者というネガティブな意味で使われているが，いわゆる「バブル期」の 1980 年代には別の意味で使われていた。「フリーター」なる語は，1987 年にリクルート社のアルバイト情報誌『フロム・エー』が最初に使ったとされるが，その当時は，バブル経済のもと「正社員になることを拒否して，自由に好きなアルバイトをして生活をする」という「フリー・アルバイター」の新しいライフスタイルを意味していた，という（小杉，2002）。

成人役割を獲得する以前にコンピュータ世界と遭遇したのが，「コンピュータ新人類」というのである。

そこで，これらの議論を踏まえたうえで，以下では 1995 年 SSM 調査データから 20 歳から 35 歳（コーホートでは，1960〜1975 年出生コーホート）を「情報新人類世代」として取り出し，それ以上の世代，ただし年齢幅を 15 歳にそろえて 36 歳から 50 歳まで（コーホートでいうと，1945〜1959 年の戦後出生コーホート）を仮に情報旧人類世代と呼び，この両者の比較もまじえながら，この世代の特徴をみるとともに，遠藤（1998）の議論を再検討していきたい。ただし，遠藤（1998, 2000）も注意を促しているように，パソコン・ワープロとビデオデッキは，世帯単位の保有財として訊かれている。したがって，若い世代の場合，当時まだ高価であった情報機器を親世代に購入してもらっていた可能性がある。さらに既婚者の場合，配偶者が購入し，もっぱら配偶者が使用していたことも考えられる。また逆に年長世代の場合，とくに娯楽性の強いビデオは，子世代の要望によって購入し，実際に使用していたのは子世代であった可能性が高い。そこで,「情報新人類世代」は 1960〜75 年出生コーホートのうち未婚者とし，「旧人類世代」はこの「新人類世代」と同居していない者と操作的に定義して分析をすすめていく[10]。

3. 2 つの情報コンシャス層

3.1 情報をめぐる世代間・世代内分化

まず，パソコン・ワープロとビデオデッキの保有状況を 2 つのコーホート（情報新人類と旧人類）ごとにみたものが，表 1 である。表 1 の全体の欄にまず注目すると，パソコン・ワープロの所有率は新人類で 58.5%，旧人類で 61.0% と両者の差異はほとんどない。これに対して，ビデオデッキの所有率は，新人類では 95.5% であるのに対して，旧人類では 86% と 10 ポイント近い差がある。このことからみる限り，新人類と旧人類とを分けるのは，パソコン・ワープロの保有よりもビデオデッキの保有である可能性が高い。また，ビデオデッキの方がパソコン・ワープロのよりも倍近い保有率となっていることも確認できる。

実際，内閣府の経済社会総合研究所『消費動向調査年報』によれば，1995 年の VTR（テレビ録画機）の普及率は 73.7% であったの対して，ワープロは 39.4%，パソコンは 15.6% と普及率が低かった。また総務庁青少年対策本部（1997：9）が，1996 年に全国の 12 歳から

10　具体的には，1995 年の SSM 調査では，一番年長の子どもと一番年少の子どもの年齢を回答させている（A 票問 29，B 票問 19）ので，これらの項目から「情報新人類世代」の子どもがいない「情報旧人類世代」を抽出した。

29 歳までの青少年とその親を対象に行った「第 3 回情報化と青少年に関する調査」によれば，自宅にある情報機器でもっとも多かったのは「ビデオデッキ」の 93.3% で，「ヘッドホンステレオ（ウォークマンなど）」と「テレビゲーム機（ファミコンなど）」がこれに続き，「ワープロ」は 42.8%，「パソコン」は 23.9% に留まっていた。さらに「ふだんよく使用している情報関連機器」についても，「ビデオデッキ」が 62.0% と際立って高くなっている[11]。

このようにパソコン・ワープロとビデオデッキの普及率・使用率の違いを反映して，表 1 の各セルに注目すると，どちらのコーホートでも「ビデオデッキのみ所有者」（新人類では 37.8%，旧人類では 34.8%）と「パソコン・ワープロとビデオデッキ所有者」（新人類では 57.7%，旧人類では 59.2%）は多いが，「パソコンのみ所有者」（新人類では 0.8%，旧人類では 1.8%），「どちらも非所有者」新人類では 3.7% と，旧人類では 4.4% はきわめて少ない。さらにビデオとパソコン・ワープロ所有の関連をみると，新人類でも旧人類でも有意な関連を示し（新人類：$\chi^2=18.649$（$p<0.001$）　旧人類：$\chi^2=41.585$（$p<0.001$）），関連係数もほぼ等しい（新人類：$\varphi=0.177$，旧人類 $\varphi=0.170$）。

つぎに，それぞれの世代ごとに情報コンシャス層と非コンシャス層とをわけてみよう。表

表 1.　ビデオデッキ とパソコン・ワープロの所有状況

コーホート	ビデオデッキ	パソコン・ワープロ		合計
		所有	非所有	
新人類	所有	57.7	37.8	95.5
（N=598）	非所有	0.8	3.7	4.5
	全体	58.5	41.5	100.0
旧人類	所有	59.2	34.6	86.0
（N=1,446）	非所有	1.8	4.4	14.0
	全体	61.0	39.0	100.0

注）新人類：$\chi^2=18.649^{***}$　$\varphi=0.177$
　　旧人類：$\chi^2=41.585^{***}$　$\varphi=0.170$　＊＊＊：$p<0.001$

11　また総務庁青少年対策本部（1997：9）によれば，12 歳から 17 歳の青少年とその親を比較すると，「ビデオデッキ」「ヘッドホンステレオ」などの AV 関連機器，「テレビゲーム機」などのゲーム機器は，青少年の使用率が高いのに対して，「ファクシミリ」「携帯電話・PHS」などの電話通信機器，また「ワープロ」「パソコン」などの情報処理機器の使用率は親世代の方が高かった。さらに，『平成 12 年国民生活白書』によれば，この時期のパソコン・ワープロ関連支出は単身世帯で多い，という。それによると，1995 年の単身全世帯のパソコン・ワープロ関連支出を 1 とすると 2 人以上全世帯では 0.44 となり，その後はこの差は増減を繰り返すが，2000 年には単身全世帯では 1.91 となったのに対して，2 人以上全世帯では 0.93 とさらに格差が開いている。また消費支出に占める割合は 1995 年から 2000 年にかけて 24 歳以下の世帯および 25 ～ 29 歳の世帯では 3% 程度から 7% 台へと伸び，他の年齢階層との差を拡大させている（全世帯の平均は，2000 年の時点で 3%）。情報関連支出（「電話機通信料」「通信機器」「パソコン・ワープロ」「放送受信料」の合計）が消費支出に占める割合は，1995 年から 2000 年にかけて，単身全世帯では 3.5% から 5.6% に伸びたが，2 人以上世帯では 2.4% から 3.6% の増加にとどまった。

1 からみると，新人類世代と旧人類世代を分けるのが，どちらかと言えばビデオデッキの保有であったのに対して，ビデオの保有率はともに 9 割前後であったので，それぞれの世代内で情報コンシャス層と非コンシャス層を分けるのは，保有率が 4 割台にあるパソコン・ワープロであろう。そこで，どちらの世代もパソコン・ワープロ（以下まとめて PC と略記）を保有する者を「情報コンシャス層」, 保有しない者（ビデオデッキのみ所有）を「非コンシャス層」と呼ぶことにする。つまり，① 新人類世代情報コンシャス層，② 新人類世代情報非コンシャス層，③ 旧人類世代情報コンシャス層，④ 旧人類世代情報非コンシャス層（以下ではそれぞれ新人類コンシャス層，新人類非コンシャス層，旧人類コンシャス層，旧人類非コンシャス層と略記する）の 4 つのグループに分けて，その間の階層的格差やライフスタイル戦略の差異をみていこう。

3.2　新人類の階層的基盤

まずこの 4 つのグループについて，学歴との関連をみていこう。表 2 は，2 つの世代ごとに学歴と情報コンシャス層・非コンシャス層との関連をみたものである。この表によると，まず新人類世代の場合，高等学歴（短大・高専・大学・大学院）の者では情報コンシャス層は 70% を占め，もっとも多くなっている。これに対して，中等学歴（高校）では 5 割ほど，初等学歴では 4 割程度にとどまっている。また旧人類世代でも，同じく高等学歴の者で情報コンシャス層が 75.5% ともっとも多く，中等教育の経験者では 61.6%，初等教育経験者では 37.3% にとどまり，高等教育経験者との間に 40 ポイント近い差がある。このことから，遠藤（1998, 2000）も指摘するように，情報コンシャス層は世代に関わらず，学歴エリート層であることがわかる。このことからは，学歴の高さが，情報機器（とくに PC）を利用する

表 2.　世代別にみた学歴と情報コンシャス度の関連

世代 / 情報コンシャス度	本人学歴			全体
	初等教育	中等教育	高等教育	
新人類コンシャス	42.9	51.1	70.1	60.0
新人類非コンシャス	57.1	48.9	29.9	40.0
合計	100.0	100.0	100.0	100.0
（実数）	（21）	（268）	（268）	（557）
旧人類コンシャス	37.3	61.6	75.5	62.8
旧人類非コンシャス	62.7	38.4	24.5	37.2
合計	100.0	100.0	100.0	100.0
（実数）	（158）	（790）	（388）	（1336）

注）　新人類：$\chi^2=22.873$（$p<0.001$）　$\gamma=0.378$
　　　旧人類：$\chi^2=71.137$（$p<0.001$）　$\gamma=0.408$　＊＊＊：$p<0.001$

表3.　世代別にみた職業と情報コンシャス層度との関連

世代/情報コンシャス度	本人現職								全体
	専門	大W	中小W	自営W	大B	中小B	自営B	農業	
新人類コンシャス	69.4	63.8	57.1	60.0	64.3	47.1	66.7	50.0	59.2
新人類非コンシャス	30.6	36.2	42.9	40.0	35.7	52.9	33.3	50.0	40.8
合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
（実数）	（98）	（47）	（105）	（5）	（14）	（85）	（9）	（12）	（375）
旧人類コンシャス	77.8	74.4	57.4	75.2	52.6	41.5	56.3	73.7	63.0
旧人類非コンシャス	22.2	25.6	42.6	24.8	47.4	58.5	43.7	26.3	37.0
合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
（実数）	（171）	（121）	（195）	（101）	（19）	（176）	（71）	（38）	（892）

注）　新人類：$\chi^2=10.779$　$\gamma=0.213$
　　　旧人類：$\chi^2=70.900$　$\gamma=0.255$　＊＊＊：$p<0.001$

ための情報リテラシーの獲得を促進していることが推測される。ただし，いずれの世代でも学歴と情報コンシャス度との関連はともに有意であるが，関連係数でみると，旧人類世代に比べ，新人類世代では学歴との関連が弱まっており（旧人類の$\gamma=0.408$に対して，新人類世代では$\gamma=0.378$），情報機器の保有における学歴格差は縮小しているといえよう。

次に表3では，世代別に職業と情報コンシャス・非コンシャス層の関連を示したが，ここからも世代にかかわらず，情報コンシャス層の階層的優位性を確認することができる。すなわち，まず新人類世代からみると，標本数の少ない自営ホワイト・ブルーカラーを除外して考えると，情報コンシャス層が多いのは専門職（69.4%），大企業ブルーカラー（64.3%），大企業ホワイトカラー（63.8%）となっている。これに対して，旧人類世代でも，情報コンシャス層はやはり専門職（77.8%），自営ホワイトカラー（75.2%），大企業ホワイトカラー（74.4%）の順で多くなっている。とくにホワイトカラーで多いのは，遠藤（1998）が，1994年のIDCジャパンによる家庭でのPCの利用の実態調査[12]を引用しながら指摘しているように，この時期のPCの利用は文書作成などのビジネス·ユースが大きな割合を占め，今日のように娯楽（音楽・動画視聴やゲームなど）に用いられることが少なかったためであろう。また専門職の利用が多いのも，データ分析や文書や教材作成の必要があるとともに，専門職（とくに非正規雇用の専門職）は自宅への仕事の持ち帰りが多いため（片瀬，2012）であるからと考えられる。

他方，所得（個人所得）という点からも，情報新人類の階層的基盤をみておこう。表4には，これまでと同じく2つの世代ごとに情報コンシャス層と非コンシャス層の個人所得の平均値を集計した結果を示した。これによると，新人類世代では，情報コンシャス層でも非コンシャ

[12]　この調査は，遠藤（1998）によれば，首都圏と近畿圏を中心に16歳から69歳のPCを持っている男女9,443人に実施されたという。遠藤（1998）はまた，『国民生活白書』などを参照しながら，この時期のPCユーザーが40〜49歳をピークとした単峰型分布をしていることから，「若者の方が情報に強い」という俗説に注意を促している。

表 4.　情報コンシャス層・非コンシャス層の個人所得

世代 / 情報コンシャス度	平均値（万円）	標準偏差	実数
新人類コンシャス	226.028	157.511	326
新人類非コンシャス	237.009	143.785	214
t 値	－0.820 ns.		
旧人類コンシャス	421.588	514.489	806
旧人類非コンシャス	351.974	437.229	461
t 値	2.554**		

注）＊＊：$p<0.05$

ス層でも，年間の個人所得（税込）で 230 万円前後で，統計的にみても有意差はない。これに対して，旧人類世代では情報コンシャス層では 420 万程度の所得があるのに対して，非コンシャス層では 350 万円程度と，70 万円ほどの格差がある。そして，t 検定の結果も 5% 水準で有意である。また標準偏差をみても，旧人類世代では新人類世代よりも大きく，この世代の内部でも所得のばらつきが大きくなっている。つまり，情報関連行動によってもたらされる経済格差は, 新人類世代ではみいだされないが, 旧人類世代ではみいだされることになった。

次に，PC とビデオデッキ以外の財産の保有状況を比較してみよう。出身階層をあらわす 15 歳時の主要な財産保有状況は，表 5 に示した。まず，新人類世代からみると，応接セットと自動車, テレビを除き, 情報コンシャス度と 15 歳時財産には有意な関連がある。そして, 情報コンシャス層は非コンシャス層に比べて，財産の保有率が高い出身階層を背景にもっていることがわかる。とくに関連係数（φ 係数）からみて，情報コンシャス層は電話・ラジオといった情報・通信機器に加えて，文学全集・図鑑，ピアノ，美術品・骨董品といった「客体化された文化資本」（Bourdieu, 1979=1986）に恵まれていた環境で育ったと考えられる。他方, 旧人類世代でも情報コンシャス度は，持ち家を除き，15 歳時財産と有意な関連があり，

表 5.　情報コンシャス層・非コンシャス層の 15 歳時財産

世代 / 情報コンシャス度	持家	応接セット	自動車	電話	ラジオ	テレビ	株券・債券	文学全集・図鑑	美術品・骨董品	ピアノ
新人類コンシャス	85.2	46.4	78.3	99.1	99.7	99.1	23.5	68.7	18.8	37.7
新人類非コンシャス	79.2	42.9	77.4	94.7	97.3	99.1	16.4	51.8	11.5	24.3
ϕ 係数	0.078*	0.034	0.010	0.136**	0.105*	0.001	0.086*	0.171***	0.098*	0.140**
旧人類コンシャス	83.5	31.2	43.3	78.4	97.4	92.7	18.7	48.2	19.2	11.7
旧人類非コンシャス	81.8	23.4	36.3	72.9	97.8	87.0	8.6	29.5	11.8	7.6
ϕ 係数	0.022	0.083**	0.069**	0.062*	0.041*	0.096***	0.136***	0.184***	0.096***	0.065*

注）　＊＊＊：$p<0.001$,　＊＊：$p<0.01$,　＊：$p<0.05$

表6.　情報コンシャス層・非コンシャス層の財産

世代/情報コンシャス度	クーラー・エアコン	電子レンジ	食器洗い機	乗用車	応接セット	スポーツ会員権	株券・債券	美術品・骨董品	ピアノ
新人類コンシャス	88.1	90.1	14.8	86.4	41.7	12.8	20.6	18.8	29.3
新人類非コンシャス	74.3	78.3	4.0	84.1	28.3	8.8	10.2	6.6	17.7
ϕ係数	0.178***	0.164***	0.172***	0.032	0.136**	0.094*	0.137***	0.172***	0.131***
旧人類コンシャス	85.9	96.6	19.3	93.8	47.8	16.0	70.1	17.8	44.7
旧人類非コンシャス	75.2	85.6	10.4	86.8	34.6	7.0	84.6	7.0	25.4
ϕ係数	0.107***	0.114***	0.093***	0.120***	0.196***	0.131***	0.183***	0.151***	0.193***

注）　***：$p<0.001$,　**：$p<0.01$,　*：$p<0.05$

情報コンシャス層は非コンシャス層に比べて，財産の保有率が高い家庭出身者が多い。やはり，関連係数からみると，情報コンシャス層は，文学全集・図鑑，美術品・骨董品といった文化資本だけでなく，株券・債券といった経済資本やテレビといった情報機器にも恵まれていたことがわかる。以上のことから，いずれの世代でも，情報コンシャス層は富裕層，とくに文化資本や情報機器――これも佐藤（2008）の立場にたてば文化資本としても考えることができる――に恵まれた階層の出身と言うことができる。

つぎに，表6には，現在の財産保有を世代・情報コンシャス度ごとに示した。新人類世代の乗用車を除き，いずれの世代でも情報コンシャス層は非コンシャス層に比べ財保有が多い。また情報コンシャス度と財保有の関連は，全体として15歳時の財保有に比べても高くなっている。とくに新人類世代では，クーラー・エアコン，食器洗い機，電子レンジといった家電製品に加えて，美術品，ピアノといった文化資本の保有率が高い。これに対して，旧人類世代でも，応接セット，株券・債券などの財に加え，ピアノ，美術品といった文化資本の保有率が高い。

では，文化階層という点では，情報コンシャス層と非コンシャス層に差異はあるのだろうか。1995年SSM調査では，A票で現在の文化活動を正統的文化活動（クラシック・コンサートや美術館・博物館に行く頻度など）と大衆的文化活動（カラオケやパチンコをする頻度など）にわけて訊ねている。これらはいわゆる「身体化された文化資本」（Bouredieu, 1979=1986）とみなすことができる[13]。表7はこれらの文化活動を「週1回以上」「月1回くらい」すると答えた比率を示したものである。まず新人類世代からみると，正統的文化資本のうち小説・

[13]　ブルデュー（Bouredieu, 1979=1986）は，文化資本を「客体化された文化資本」（文化的な財―たとえば文学全集や百科事典の保有など），「身体化された文化資本」（「ハビトゥス」とも呼ばれるように個人の身体に蓄積された文化的な性向や慣習），「制度化された文化資本」（学歴や資格のように社会的に承認され，正統化された文化的財）に分けている。本稿では，表5に示した15歳時財産のうち，文学全集・図鑑，美術品・骨董，ピアノの保持は「客体化された文化資本」の保有にあたる。そして，こうした「客体化された文化資本」によって個人に蓄積された文化活動への性向が，表7の「身体された文化資本」にあたる。また表2に示した学歴は，これらの文化資本が社会的に承認された「制度化された文化資本」となる。

表 7. 世代・情報コンシャス度別にみた文化資本（「週 1 回以上」+「月 1 回くらい」）
1995 年 SSM 調査 A 票

世代 / 情報コンシャス度	クラッシック コンサート	美術館・博物館	小説・歴史書	華道・茶道・書道	カラオケ	パチンコ	スポーツ新聞
新人類コンシャス	6.9	6.9	56.3	8.0	61.5	23.3	69.7
新人類非コンシャス	2.0	5.0	40.4	7.1	62.7	35.6	61.8
ϕ 係数	0.106	0.037	0.152*	0.015	−0.012	−0.133*	0.081
旧人類コンシャス	2.1	5.3	51.9	10.8	24.0	14.5	63.2
旧人類非コンシャス	2.0	2.7	33.8	4.7	26.5	22.0	62.1
ϕ 係数	0.004	0.062	0.175***	0.107	−0.028	−0.096*	0.011

注） ***：p<0.001, **：p<0.01, *：p<0.05

歴史書を読む頻度が情報コンシャス度と有意な関連があり，情報コンシャス層ほどこれらの書籍をよむ頻度が多い。これに対して非コンシャス層は，パチンコをするといった大衆的文化行動をする者が有意に多い。他方，旧人類世代でも，正統的文化資本のうち小説・歴史書を読む頻度や華道・茶道・書道をする者が情報コンシャス層に多いのに対して，パチンコをする者は非コンシャス層に多い。これの点からみて，いずれの世代でも，情報コンシャスは非コンシャス層にくらべて，正統的文化資本に親和的であり，大衆的文化には非親和的であることがわかる。

以上のことから，情報コンシャス層は，その階層的基盤からみて，1945〜59 年の出生コーホートである情報旧人類世代――それは野田（1987）のいうコンピュータ第 I 世代，すなわち就職した後に，仕事の中でコンピュータに接した世代――においても，成人役割を獲得する以前にコンピュータ世界と遭遇した情報新人類世代（1960〜1975 年出生コーホート）においても，学歴や職業的地位からみて優位な位置を占めていた。彼らの職業的地位の高さ（たとえば専門職の多さ）は学歴の高さにも由来し，それが情報リテラシーの獲得機会になっていたと推測される。また，幼児期文化資本（15 歳時の文化的財の保有）からみても，また現在の文化活動からみても，大衆的文化に非親和的であり，より正統的な文化活動をしていることがわかる。したがって，情報コンシャス層は，遠藤（2000）も指摘するように，エリート層としての「専門職の中流階級」――資産よりも収入の高さによって特徴づけられる高学歴の専門・管理職であり，「コンピュータおたく」よりも社会の中核を占める層として特徴づけることができる。また，個人収入の点では，新人類世代では情報コンシャス層と非コンシャス層では差異がみられなかったが，旧人類世代では有意な差がみられ，コンシャス層は非コンシャス層よりも高い所得を得ていた。この収入の多さは，当時，まだ高価であった PC を個人所有する資源になっていたと同時に，PC の所有によってさらに職業的地位の階梯を登り，より高い所得を得ていたという可能性も想定することができる。先にもみたように，宮台（1990, 1994）は，この時期，中流意識の飽和とも相まって，新人類の誕生によっ

て「階層コード」が無効化したと主張したが，上記の分析に照らす限り，情報新人類世代においても，情報コンシャス層と非コンシャス層の間には，経済的にも文化的にも明らかに格差が存在していたことになる。

3.3　情報コンシャス層の社会意識

先にみたように，遠藤（2000）は，PCを所有する情報コンシャス層が，学歴が高く，収入・財産も多いだけでなく，生活満足度や階層帰属意識も高い一方で，社会活動やサークル活動，家族などを重視し，収入や財産の獲得を重視しない「脱階層志向」（片瀬・友枝, 1989）が顕著であり，また「現状変革志向」も強いと特徴づけた。さらに遠藤（2000）によれば，とくに20代の情報コンシャス層は，全般的公平感が高い一方で，とくに性別・年齢などの属性要因による領域別の不公平感が高いことから，この層を「オルトエリート」すなわち潜在的にはエリート層になる能力をもちながら，個人の努力を超えた理由でその能力が社会的に評価されないという地位不安を抱え，この不安にせき立てるように行動を起こそうとする対抗的エリート，社会における自己実現をつうじて現状のエリートにとって代わろうとするエリート予備軍であるとしていた。このような社会意識は，今回，再定義した新人類世代の情報コンシャス層にも見出すことができるだろうか。

まず彼らが階層帰属や生活満足度，自己評価が高いか検討しておこう。表8は，世代別に情報コンシャス層･非コンシャス層の階層帰属意識の分布をみたものである｡「上」と「中の上」の合計比率でみると，まず新人類世代では情報コンシャス層では36.3%いるのに対して，非コンシャス層では25.2%と，前者の階層帰属意識が高い。また旧人類世代でも，やはり情報コンシャス層では「上」と「中の上」が35.6%であるのに対して，非コンシャス層では26.7%と，10ポイント近い差があり，情報コンシャス度と階層意識の間には，1%水準で

表8.　情報コンシャス層・非コンシャス層の階層帰属意識

世代/情報コンシャス度	階層帰属意識					合計
	上	中の上	中の下	下の上	下の下	
新人類コンシャス	1.2	35.1	46.5	13.5	3.7	100.0（325）
新人類非コンシャス	1.9	23.3	51.4	19.0	4.3	100.0（210）
全体	1.5	30.5	48.4	15.7	3.9	100.0（535）
旧人類コンシャス	1.6	34.0	52.8	9.9	1.8	100.0（832）
旧人類非コンシャス	0.6	26.0	51.9	16.7	4.8	100.0（480）
全体	1.2	31.1	52.4	12.3	2.9	100.0（1,312）

注）　新人類：$\chi^2 = 9.393$　$\gamma = 0.192$
　　　旧人類：$\chi^2 = 29.285$　$\gamma = 0.235$　＊＊＊：$p<0.001$,　＋：$p<0.10$

みても有意な関連がある。このことから，遠藤（1998, 2000）も指摘するように，世代を問わず，情報コンシャス層は非コンシャス層に比べて，高い階層帰属意識をもっていることがわかる。

また，表9には，生活満足度の分布を示したが，「満足」「どちらかといえば満足」の合計比率でみると，新人類世代の場合，情報コンシャス層では63.5%，非コンシャス層では48.3%と，前者の生活満足度が高い。同じく旧人類世代でも，情報コンシャス層では「満足」と「どちらかといえば満足」が65.5%であるのに対して，非コンシャス層では58.2%となっている。どちらの世代でも，情報コンシャス度と生活満足度には有意な関係があり，情報コンシャスである者ほど生活に満足している者が多いことになる。

他方，ライフスタイルという点では，情報コンシャスなグループは，「脱物質主義的志向」（Inglehart, 1977=1978）や「脱階層志向」（片瀬・友枝, 1990）をもっているのだろうか。まず表10は脱物質主義を示す「これからは，物質的な豊かさよりも，心の豊かさやゆとりのある生活をすることに重きをおきたいと思う」という意見への賛否（ただしB票のみ）を世代別・情報コンシャス度別に集計したものである。この脱物質主義と情報コンシャス度は旧人類世代では関連がないが，新人類世代では有意な関連があり情報コンシャス層ほど，この意見に「よくあてはまる」「ややあてはまる」と回答する者が多く，脱物質主義的傾向を示している。

では，価値志向という点ではどうであろうか。表11は「社会的評価の高い職業につくこと」から「高い地位につくこと」の8つの項目につき4件法で回答を求めたものに「重要である」4点～「重要でない」1点の得点を与えて集計した結果を示している。これによると，今度は逆に新人類世代では情報コンシャス度によって価値志向に有意な差はなく，旧人類世代では

表9. 情報コンシャス層・非コンシャス層の生活満足度（1995年SSM調査B票）

世代/情報コンシャス度	生活全般の満足度					合　計
	満足している	どちらかといえば満足	どちらともいえない	どちらかといえば不満	不満である	
新人類コンシャス	19.2	44.3	21.0	11.1	4.4	100.0 (343)
新人類非コンシャス	17.3	31.0	27.9	16.8	7.1	100.0 (226)
全体	18.5	39.0	23.7	13.4	5.4	100.0 (569)
旧人類コンシャス	16.6	48.9	20.0	11.6	2.8	100.0 (854)
旧人類非コンシャス	12.9	45.3	21.9	15.5	4.4	100.0 (497)
全体	15.2	47.6	20.7	13.0	3.4	100.0 (1,351)

注）新人類：$\chi^2=14.414^{**}$　$\gamma=0.192$
旧人類：$\chi^2=10.420^{*}$　$\gamma=0.137$　＊＊：$p<0.01$,　＊：$p<0.05$

表10.　情報コンシャス層・非コンシャス層の脱物質主義（1995年SSM調査B票）

世代/情報コンシャス度	脱物質主義					合計
	よくあてはまる	ややあてはまる	どちらともいえない	あまりあてはまらない	まったくあてはまらない	
新人類コンシャス	37.0	40.6	14.5	7.9	0.0	100.0（165）
新人類非コンシャス	29.3	33.3	20.3	14.6	2.4	100.0（123）
全体	33.7	37.5	17.0	10.8	1.0	100.0（288）
旧人類コンシャス	44.5	38.1	15.0	2.4	0.0	100.0（467）
旧人類非コンシャス	42.1	34.3	18.9	3.5	1.2	100.0（254）
全体	43.7	36.8	16.4	2.8	0.4	100.0（721）

注）　新人類：$\chi^2 = 10.630^*$　$\gamma = 0.230$
　　　旧人類：$\chi^2 = 8.776$ n.s.　$\gamma = 0.088$　＊：$p<0.05$

表11.　情報コンシャス層・非コンシャス層の価値志向（ライフスタイル）：重視度スコア
（1995年SSM調査B票）

世代/情報コンシャス度	重視度スコア							
	評価の高い職業	高い収入	高い学歴	高い地位	多くの財産	家族の信頼	社会活動	サークル活動
新人類コンシャス	2.413	2.922	2.256	2.181	2.329	3.419	2.834	2.436
新人類非コンシャス	2.347	2.992	2.163	2.057	2.451	3.390	2.678	2.462
t値	.659	－.752	1.055	1.296	－1.298	.311	1.475	
旧人類コンシャス	2.401	2.920	2.430	2.070	2.276	3.659	2.983	2.433
旧人類非コンシャス	2.349	3.071	2.413	2.103	2.410	3.589	2.848	2.365
t値	.851	－2.517*	.272	－.570	－2.155*	1.534	2.086*	1.111

注）　＊：$p<0.05$

いくつかの項目で差がみられる。そして，「高い収入」「多くの財産」の獲得を重視する階層志向性は情報非コンシャス層で高く，コンシャス層で低くなっている。また，ボランティアなどの「社会活動」を重視する脱階層志向的なライフスタイルは，遠藤（1998, 2000）の指摘するように，情報コンシャス層で顕著にみられている。

これに対して，政治意識という点では，「情報新人類」はどのような志向をもっているのだろうか。原（1990）は，階層意識を2つの次元すなわち対自己的意識と対社会的意識という次元と，認知的側面・評価的側面・志向的側面という次元を設定して，その組み合わせから整序している。それによると，対自己的意識の認知的側面が階層／階級帰属意識，評価的側面が満足度，志向的側面が価値意識―ここには遠藤（1998, 2000）が扱った脱階層的ライフスタイルも含まれる―となる。これに対して，対社会的意識の認知的側面は階層イメージ，評価的側面が公平感，志向的側面が政党支持意識（政治意識）とされる。遠藤（1998, 2000）は，志向的側面に関しては，対自己的意識の脱階層志向性（片瀬・友枝, 1990）を扱っているが，

対社会的意識の政党支持（政治意識）については触れていない。それは，遠藤（1998, 2000）が主として個人のライフスタイル戦略に関心があったからであると推測されるが，「オルトエリート」の社会的性格を考えるためには，フロム（1941=1951）やアドルノら（1950=1980）以来，問題にされてきた政治的志向性を検討する必要があるだろう。

1995 年の SSM 調査における政治意識研究で問題にされたことは，いわゆる 55 年体制の崩壊――すなわち，1992 年の「日本新党」の結成に始まった政界再編成は，1994 年 6 月のいわゆる「自社さ」連立政権の成立にともない，従来の「保守-革新」の対立軸を崩壊させた[14]――に伴う支持なし層の増大と政治参加様式との関連（小林，2000：片瀬・海野, 2000）であった。そこでは，遠藤（1998, 2000）が注目した「脱物質主義」(Inglehart, 1990=1993）を背景とした「エリート対抗的政治参加」まさに「オルトエリート」による政治参加が注目されたのである。すなわち，イングルハート（Inglehart, 1990=1993：293-294）によれば，無党派層（支持政党なし）が増えても，政治参加は衰退しないばかりか，その政治参加の様式を変えるという。というのも，① 若い世代ほど学歴が上昇して政治的認知能力が高まり，② 従来の性別役割分業の衰退によって女性の政治参加が増大し，③ 脱物質主義的な価値の浸透によって政治のように疎遠で抽象的な事象への関心は高まるからである。その結果，彼によると，従来の「エリート指導型」党派心は低下して既成政党（日本でいえば 55 年体制を支えた自民党と旧社会党）への支持者は減少するが，「認知動員型」の非政党帰属者は増大する。彼らは，特定の支持政党はもたないものの，個人の政治認知にもとづく自発的な政治参加を行い，エリート（政治家や官僚など）への批判を強める。その結果，これまでの「エリート指導型政治」は終焉を迎え，「エリート対抗的政治」が登場する――これがイングルハートの予測であった。

彼の予測は西欧社会に関するものであったが，1995 年 SSM 調査データによる検証（片瀬・海野, 2000）からは，日本でも 1985 年に比べて 95 年では支持政党なし層の政治的認知能力

---

[14] 具体的には，1993 年 6 月の宮沢内閣への不信任案可決は，自民党の分裂を引き起こし，「新生党」「新党さきがけ」を誕生させた。この内閣不信任に伴う 93 年 7 月の総選挙では自民党は過半数を割り込み，「日本新党」「新生党」「新党さきがけ」の新党と，社会党などの既成野党が，日本新党党首・細川護熙を首班とする非自民連立政権を誕生させた。これが「55 年体制」の崩壊と呼ばれた事態である。しかし，この細川内閣も 8 ケ月で総辞職し，新生党党首・羽田孜に首相の座を譲った。ところが，この羽田連立内閣には，社会党とさきがけが参加しなかったこともあり，わずか 65 日で退陣を余儀なくされた。そこで，野に下っていた自民党は社会党と連立を組み，1994 年 6 月に社会党委員長・村山富市を首班とする「自民党・社会党・さきがけ」による連立内閣が成立した。そして，この内閣のもと，社会党が非武装中立政策を放棄し，日米安保条約の容認を打ち出すなど，従来の安全保障政策を転換し，「革新政党」としての性格を変えていった。他方，村山政権の成立によって政権を離れた新生党と日本新党・民主党などは 94 年 12 月に「新進党」を結成して野党第一党になった。こうして従来の「保守―革新」といったイデオロギー的政治対立の枠組みは融解し，「支持政党なし」が増大した。実際，1994 年まではほぼ 30% 台で推移していた「支持なし」層は，94 年の後半には 50-60% 台となった（片瀬・海野，2000)。

が高まっていること，また政治参加志向には 1985 年の時点から政党支持層と支持政党なし層で有意な差はなく，この時点から支持政党がないことがただちに政治参加からの撤退につながっていないことがあきらかにされた。そして，政治的認知能力と党派性（支持政党の有無）の組み合わせから，① 認知的党派型，② 認知的無党派，③ 儀礼的党派型，④ 非認知的無党派にわけ，社会的属性との関連をみたところ，認知的党派型（政治的認知能力が高く支持政党がある層）が 50 歳台を中心とした高年層にみられるのに対して, 認知的無党派（政治的認知能力が高く支持政党がない層）は都市部居住者および若年層で多く，とくに 20 歳代では約 4 割を占めていた。その一方で，年齢が若いほど非認知的無党派（政治的認知能力が低く支持政党がない層）も多くなっていた（片瀬・海野，2000：227-230)。つまり，若年層はその政治意識の点からからみると，認知的無党派と非認知的無党派に二極化しているといえる。

他方，階層的地位との関連では，認知的無党派層では，学歴が高いほど多く，高等学歴層ではほぼ半数を占めていた。逆に高学歴層で少ないのは，非認知的無党派層と儀礼的無党派型（政治的認知能力が低く支持政党がある層）であった。また職業では，エリート対抗的な認知的無党派層は，専門職・大企業ホワイトカラーで多いのに対して，認知的党派型は管理職でもっとも多く，大企業ブルーがこれに次いでいた。このことからイングルハートが想定した認知動員にもとづくエリート対抗的な無党派層は，高学歴で都市部に居住する若年の専門職や大企業ホワイトカラー層に典型的にみられることがあきらかになった。さらに，実際の政治参加様式との関連からは，認知的無党派層の方が認知的党派型に比べてエリート対抗的な政治参加志向が強いことも示唆された（片瀬・海野，2000：230-232)。しかし，この分析では，遠藤（1998, 2000）が注目した「情報コンシャス」という観点から政治参加のあり方が検討されているわけでない。政治的認知能力の高さが情報コンシャスネス（PC などによる情報処理能力）によって影響されている可能性もある。そこで，以下ではこの情報コンシャスに注目して，政治的認知能力や政治参加の様式について改めて 1995 年の SSM 調査を用いて分析を行う。そして，遠藤（1998, 2000）の言うように，情報コンシャスな「オルトエリート」が，その政治的認知能力を背景に，エリート対抗的な政治参加を志向しているのか検討していきたい。

3.4　情報コンシャス層の政治志向

そこで以下では，次の手順で分析を行う。まず 2 つの世代（情報旧人類・新人類世代）ごとに情報コンシャス度によって，政治的認知能力とエリート対抗的政治参加スコアに差異があるか検討する。次に，片瀬・海野（2000）にならって，政治的認知能力と党派性（支持政

党の有無）の組み合わせから，4 つの政治参加類型（認知的党派型，認知的無党派，儀礼的党派型，非認知的無党派）を作成したうえで，2 つの世代ごとに，情報コンシャス度との関連をみる。そして，階層的地位を統制したうえでも，情報コンシャス度がエリート対抗的な政治参加志向を促しているか検討する[15]。

まず，表 12 は世代別・情報コンシャス度別にみた政治的認知能力・エリート対抗的政治参加のスコアを示している。どちらのスコアも，旧人類世代では統計的にみて有意な差があり，情報コンシャス層は非コンシャス層よりも，認知能力もエリート対抗性も高い。これに対して，新人類世代は，情報コンシャス度によって政治的認知能力にもエリート対抗的政治参加志向にも差異がみられない。

表 12. 世代別・情報コンシャス度別にみた政治的認知能力・エリート対抗的政治参加
（1995 年 SSM 調査 B 票）

世代 / 情報コンシャス度		政治的認知能力スコア	N
新人類情報コンシャス		3.05	169
新人類情報非コンシャス		2.91	124
	t 値	0.768 ns	
旧人類情報コンシャスコンシャス		3.24	468
旧人類情報コンシャス非コンシャス		2.84	256
	t 値	3.511***	
		エリート対抗的政治参加スコア	N
新人類情報コンシャス		7.38	169
新人類情報非コンシャス		7.52	124
	t 値	−0.468 ns	
旧人類情報コンシャス		7.54	468
旧人類情報コンシャス非コンシャス		7.18	256
	t 値	1.940＋	

注） ***：$p<0.01$，＋：$p<0.10$

15　具体的な変数の構成は，次のように行った。まず政治的認知能力は，1995 年 SSM 調査 B 票から，「政治のことは難しすぎて自分にはとても理解できない」に「そう思わない」とする程度によって 5 段階で求めた回答をもとに得点を与え，1～2 点を認知能力の低いグループ，3～5 点認知能力の高いグループとした。そして，政党支持に関する回答から，いずれかの政党を支持する者を党派型，「支持する政党なし」を無党派とし，両者の組み合わせから 4 つの政党支持類型（① 認知的党派型，② 認知的無党派，③ 儀礼的党派型，④ 非認知的無党派）を操作的に定義した。また，エリート対抗的政治参加スコアは，同じく B 票から，参加志向を示す「政治のことはやりたい人にまかせておけばよい」に反対する程度および反権威主義的な傾向を示す「この複雑な世の中で何をすべきかを知る一番よい方法は，指導者や専門家に頼ることである」に反対する程度の合計得点で操作化した。したがって，以下の分析は B 票のみの分析となる。

次に，表13は，世代別みにみた情報コンシャス度と政党支持類型の関連を示している。これによると，新人類世代は旧新人類世代に比べて，認知的党派が少なく，認知的無党派層が多い（全体欄）ものの，情報コンシャス度と政党支持類型には有意な関係がみられない。これに対して，旧人類世代では情報コンシャス度と政党支持類型には有意な関係がみられ，情報コンシャス層では非コンシャス層に比べ，認知的無党派が13ポイントほど多く，逆に儀礼的無党派や非認知的無党派がそれぞれ6ポイントほど少ない（非認知的無党派が情報コンシャス層で少ない傾向は新人類世代でもみられる）。

そこで，最後に階層的地位を統制したうえでも，情報コンシャス度が政治的認知能力やエリート対抗的な政治参加志向を促しているか検討するために，重回帰分析を行った。まず従属変数であるエリート対抗的な政治参加志向は，1995年SSM調査B票から，参加志向を示す「政治のことはやりたい人に任せておけばよい」に反対する程度および反権威主義的傾向を示す「この複雑な世の中で何をすべきかを知る一番よい方法は，指導者や専門家頼ることである」に反対する程度を合成（単純に合計）した得点である（政治的認知能力スコアについては注12参照）。次に，性別・教育年数・職業階層（基準は農業）を統制したうえで，世代（情報旧人類世代を基準）と情報コンシャス度（非コンシャス層を基準）をダミー変数として投入し，これらの変数が政治的認知能力やエリート対抗的な政治参加志向を強めているか検討した。その結果は，表14に示した。

まず政治的認知能力の規定因からみていくと，男性であるほど，また教育年数が長いほど，政治に関する認知能力は高くなる。また職業階層では，専門職および大企業ホワイトカラーであるほど，政治的認知能力は高い。そして，これらの要因を統制したうえでも，情報コンシャス度は政治的認知能力に有意な効果をもち，情報コンシャスであるほど，政治に関する認知能力も高くなっている。他方，世代も有意な効果をもつが，係数の符号からみて新人類

表13. 世代別にみた情報コンシャス度と政党支持類型（1995年SSM調査B票）

世代/情報コンシャス度	政党支持類型				合計	（実数）
	認知的党派型	認知的無党派	儀礼的党派型	非認知的無党派		
新人類情報コンシャス	14.9	48.4	6.8	29.8	100.0	（161）
新人類情報非コンシャス	10.3	47.0	7.7	35.0	100.0	（117）
全体	12.9	47.8	7.2	32.0	100.0	（278）
旧人類情報コンシャス	25.9	39.3	12.8	22.0	100.0	（460）
旧人類情報非コンシャス	26.2	26.6	18.5	28.6	100.0	（248）
全体	26.0	34.9	14.8	24.3	100.0	（708）

注）新人類：$\chi^2 = 1.809$（*n.s,*）　$V = 0.081$
旧人類：$\chi^2 = 14.01$（$p < 0.01$）　$V = 0.141$

表 14. 政治的認知能力とエリート対抗的政治参加の規定因
（重回帰分析：標準化偏回帰係数）

	政治的認知能力スコア	エリート対抗的政治参加スコア
男性ダミー	0.214***	−0.019
本人教育年数	0.205***	0.140***
専門職ダミー	0.041*	0.016
大企業ホワイトダミー	0.050*	−0.005
中小企業ホワイトダミー	0.011	−0.007
自営ホワイトダミー	0.014	0.002
大企業ブルーダミー	0.010	−0.031
中小企業ブルーダミー	−0.010	−0.019
自営ブルーダミー	−0.004	−0.014
情報コンシャス度	0.059**	0.013
世代ダミー	−0.051**	0.007
調整済み R^2	0.117***	0.022***

注） ＊：$p<0.05$， ＊＊：$p<0.01$， ＊＊＊：$p<0.001$

世代よりも旧人類世代の方が認知能力が高いことになる。

他方，エリート対抗的政治参加志向については，教育年数のみが有意な効果をもち，学歴が高いほどエリート対抗的である。しかし，職業階層もエリート対抗的政治参加に影響していないし，情報コンシャス度も有意な効果をもっていない。このことからは，情報コンシャスネスが政治意識に及ぼす影響は限定的なものであり，政治的認知能力は高めるものではあっても，エリート対抗的な政治参加志向を強めるものではないと結論づけることができる。

むすび

このように本稿の分析によれば，いわゆる「情報新人類」と呼ばれる世代にも，遠藤（1998, 2000）が指摘したように，「情報コンシャス層」（PC とビデオの双方を保有）と「非コンシャス層」（ビデオのみ保有）の間には，冒頭のエピグラフの定義に示したような「情報格差」が存在していることが分かった。「情報コンシャス層」は出身階層という点でも，上層が多かった。そして，客体化された文化資本や身体化された文化資本にも恵まれていた。その結果，学歴が高く，職業も専門職や大企業ホワイトカラー・ブルーカラーが多くなっていた。とくに専門職やホワイトカラーで多いのは，この時期の PC の利用は文書作成やデータ分析などのビジネス・ユースが大きな割合を占め（遠藤, 1998），今日のように娯楽に用いられること

が少なかったためであろう。これに対して,「非コンシャス層」は，経済的・文化的にも下層出身者が多く，学歴や職業的地位も低かった。彼らはPCを持たず，ビデオデッキのみを保有していたのであり，情報発信というより情報消費的な行動をしていたと推測することもできる。

このことは，当時，青少年（全国の12歳から29歳，17歳までは親も調査）を対象に行われた調査結果（美馬, 1997）からも窺い知ることができる。それによれば, 本稿でいう「新人類層」よりも世代が下るが，調査時点（1996年）で15歳から17歳の全国の青少年では, PCを学校で使い始め，教師の影響が強かったが，それはこの世代では，1999年に公示された新学習指導要領で，情報教育の重要性が強調され，中学校の「技術家庭」において「情報基礎」が必修となったためであるという。逆に23～30際の年齢層で「一度も使ったことがない」という回答が男女とも2割近くともっとも多いのは, この学習指導要領の施行前であったためだとも考えられる。これに対して，14歳以下でPCを使い始めた者では，自宅で使用し始めた者が多く，この世代では親は学歴が高いほど子どもにPC操作を教える傾向が強く（大学・大学院卒で52.9%，高校卒業で37.0%），逆に学歴が低い親は子どもからPCを教わる者が多く（高校卒業で38.8%，大学・大学院卒で27.9%）なっている。したがって，親の学歴階層（子どもの出身階層）は，青少年層の情報コンシャスネスに影響していることがわかる。したがって，ここからは中学校で情報教育に接する前に，家庭でのPCの有無や親の指導が子どもの情報格差を生む可能性が高いとされる。そして，実際にも親子とも「情報弱者」が社会に取り残される懸念を抱いている者が少なくない（美馬, 1997)。

また，同じデータの分析から，井上（1997）は，情報メディアを「受信型パッケージ系」（ビデオ，テレビゲーム機，ヘッドホンステレオなど）と「参加型相互通信系」(PC，ワープロ，携帯電話・PHSなど）にわけ，今後は前者から後者への移行が生じるという。その理由として井上（1997）は，① 自宅にある情報機器のうち「参加型相互通信系」メディアの増加が著しい，② 青少年自身でも親世代でも，とくにPC，ワープロの利用意向が高いこと，③ 学校でもPCを中心とした「情報処理教育の拡充」が進められていること，④ 社会の情報インフラの整備によって，今後，PCがインターネットの端末機として利用されることが増えると予想さること, であった。このうち, 今回, 情報コンシャス度の指標としたのは, PCとビデオデッキの保有状況であった（PCとビデオデッキをともに保有する者がコンシャス層，ビデオデッキのみ保有する者が非コンシャス層)。すなわち，情報コンシャス層はPCという「参加型相互通信系」メディアを保有しているのに対して，非コンシャス層はビデオデッキという「受信型パッケージ系」のメディアのみを保有しているのであった。

この「受信型パッケージ系メディア」であるテレビゲームの利用層の対人行動パターンを

分析した橋元（1997）によると，共感性（「友人が悩み事を話し始めると話をそらしたくなる」傾向）やコミュニケーション耐性（「相手の答えが遅いといらいらする」傾向），批判受容耐性（「傷つきたくないから本気で議論するのは避ける」傾向）が強いほど，テレビゲームを使う頻度が高くなるという。この分析は，今回の分析で使用したビデオデッキではなく，テレビゲームの利用頻度であるが，もしこのことが同じ「受信型パッケージ系」メディアであるビデオデッキのみを保有する「情報非コンシャス層」にも当てはまるとしたなら，「非コンシャス層」もまたコミュニケーション耐性や共感能力が低い――すなわち，いわゆる「おたく（オタク）」的性格をもっていると推測される。さらに，先にみたように，若年層はその政治意識の点からからみると，認知的無党派と非認知的無党派に二極化しており，情報コンシャス度は政治的認知能力に有意な効果をもち，情報コンシャスであるほど，政治に関する認知能力も高くなっていた。つまり，政治意識においても新人類世代には情報コンシャス度による格差が存在し，高学歴で PC を駆使する情報コンシャスな層は政治的認知能力が高く，エリート対抗的な政治参加を志向する「オルトエリート」的性格をもつのに対して，もっぱら情報消費的なビデオ視聴をする非コンシャス層は，政治的認知能力も低く政党支持もない無関心層を形成していると考えられる。そして，政治的･社会的関心の低さも「おたく（オタク）」の定義に加えるならば，この層は「おたく（オタク）」的な社会的性格をもつといえるだろう。

このうちオルトエリート的性格をもつ情報コンシャス層は，日本の戦後史においてどのような位置づけをもったのだろうか。1987 年に関西圏の大学生の意識調査を行った片桐（1988）によると，この当時，「新人類」と呼ばれた青年が先行する世代に「異人類」と思われる最大の特徴は，「「関係ない」感覚」すなわち自分たちが「新人類」と呼ばれても抵抗を感じず，自分には「関係ない」と受け流す極端な個人主義であり，それは日本文化の特徴である集団主義と相いれないものであるという。彼らは当時の「企業戦士」の対極にあり，企業組織の伝統的価値観を軽視し，仕事よりも余暇に生きがいを見出しているとされる。こうした「新人類」の個人主義的志向は，片桐（1988）によると，日本が高度経済成長を遂げるなかで徐々に生じた価値意識の延長上にあるものであり，彼らが先行する世代とまったく断絶した異質な存在ではないという。彼らは集団主義を厭い個人主義的ではあるが，他者との協調は望んでいる。そして，片桐（1988）は，見田（1984）[16] の図式を敷衍しながら，「新人類」世代の価値観を「個同保楽」主義と特徴づける。それによると，先行世代に若者が「異人類」と見

[16] 見田（1984）は，当時の青年の意識の変化を，平等主義と情緒主義の進行と捉えている。これに対して，片桐（1988）は，これは「同」と「楽」の重視と読み替えられるが，私生活主義の進行としての「個」の重視と，政治意識における「保」（保守主義）の併存を捉えきれていないと批判し，若者の意識の特徴を「個」と「楽」のなかに「同」と「保」を内包するものとしている。

えるのは，とくに「個」と「楽」の内側に従来型の「同」と「保」を抱え込んであることにある，と指摘する。つまり，この世代は，個人主義や享楽主義の内側に同調主義や保守主義を根強く残存させていると結論づけている。

その一方で，「新人類」と呼ばれた最初の世代に属する海上（2009）は，当時のことを回顧して，この言葉を最初に耳にしたとき「いやな響きに感じた」と述懐している。実際に海上は大学卒業後に企業に勤務した経験があるが，入社当時，ある種の「カルチャーショック」を受けたという。それは市民社会に生きているはずなのに，企業社会が封建的な集団主義によって個人を拘束しているというショックである。海上（2009：19）の表現を借りると「豊かさの中で，個性が大切だと考えてきた「新人類」に対しては，日本的経営の企業という「アンシャンレジーム（旧体制）」が待ち構えていた」という。「新人類」に先行する全共闘世代にしても，「新人類」からみれば，社会に反抗しようが，企業社会に順応するにしても，基本的には「集団主義」で「個」は軽視された独裁的権力体制のもとにある（その象徴が「連合赤軍事件」だという）。「新人類」世代は，こうした全共闘世代の学生時代の集団暴力と，就職後の手のひらを返したような企業戦士ぶりに反発し，軽蔑していた世代でもあるという。この点では，海上（1992）は，「新人類」の意義を「社会の豊かさが生んだ「遅れてきた市民革命」」であったとする。その意味では，新たな情報テクノロジーにいち早く適応し，集団主義に批判的でエリートに対抗する情報新人類のなかからは，やがて「遅れてきた市民革命」を教導した層が出現した可能性も否定できない。

2003年にその後の「新人類」の生き方を追った『河北新報』の「三十代の自画像」（河北新報社文芸部，2004）によれば，この世代は子ども時代に男子は「マジンガーZ」「宇宙戦艦ヤマト」といったアニメに夢中となり，女子はピンクレディーを踊った，という。そして，中学時代にはYMOを聴き，インベーダー・ゲームに熱中した。大学時代はユーミンをBGMに村上春樹などの新しい日本文学を読んでいた。卒業時にはバブル経済を体験し，円高のなか，海外に卒業旅行に行く者が増えた。そして，「男女均等法世代」として女性の中には総合職としてのキャリアを歩む者もふえた（河北新報社文芸部，2004：7）。

この世代の現在（2003年当時，30代）をみると，企業戦士と専業主婦が多い団塊世代に比べ，まだ少数とはいえ次第に家事・育児に関心をもつ男性が増えてきたという（河北新報社文芸部，2004：13-17）。あるいはこの世代の子ども世代から，2000年代後半に入って，いわゆる「草食系男子」（森岡，2008），すなわち従来の男性性＝「男らしさ」の呪縛に拘束されず，対等な女性観をもつ若年層が誕生した可能性もある。また「友達親子」といわれるように，親となった新人類世代は，子どもとも対等な関係を築き，家族が一緒にいる時間を重要視するという（河北新報社文芸部，2004：24-29）。この点でも，仕事中心の企業戦士となった団塊＝全共

闘世代と対照的である。その一方で，仕事と家庭を両立させるために「別居結婚」を選択する者も現れ始め，近代家族のあり方も問い直されていったのである。そして，このルポルタージュは，新人類世代こそ「伝統的価値観から個人を核にした文化に移ろうとした」世代（河北新報社文芸部，2004：206）と総括されているので，この世代こそが「遅れてきた市民革命」の担い手であったという海上（1992）の見解も正鵠を射ていると考えられる。

補論：情報新人類の前衛と末裔

1985年9月から94年4月まで『別冊少女コミック』（小学館）に連載された吉田秋生の『BANANA FISH』（吉田，1997）は，ニューヨークのロウアー・イースト・サイドを根城にするストリート・ギャングのボスであるアッシュ・リンクスと，カメラマン伊部俊一の助手としてニューヨークを訪れた奥村英二の友情（というより無垢の愛）を中心に展開される物語である。アッシュは，幼児期にコルシカ・マフィアのボスであるディノ・フランシスに凌辱されたが，その優れた頭脳と身体能力，美貌を見込まれ，KGB出身の殺し屋・カサブランカに射撃の訓練も受けた。また，ディノ・フランシスからはオペラ観劇をはじめとする文化資本を相続され，後継者として指名されている。まさに遠藤（1999，2000）のいう「オルトエリート」である。しかし，アッシュはディノの性的嗜癖を嫌い，その元を飛び出し，今はニューヨークの下町を根城にするストリート・ギャングのボスとなっている。この作品名となったBANANA FISHとは，J・D・サリンジャーの短編集『ナイン・ストーリーズ』におさめられた「バナナフィッシュにうってつけの日」（「バナナフィッシュ日和」という訳もある）に由来し，「死を招く魚」を意味する（ただし，サリンジャー作品では，主人公のシーモアが，バナナを見るといくらでも食べてしまう架空の魚「バナナフィッシュ」についての会話を少女と交わした後，拳銃自殺するというストーリーとなっている）。しかし，本作品ではBANANA FISHとは，ベトナム戦争時代に，LSDの製造過程で化学者のドースン兄弟が製造してしまった一種の麻薬で，人の潜在意識に働きかけ，その人間を殺人者に仕立て上げることが可能な劇薬を指している。物語では，このBANANA FISHとその秘密をめぐって，マフィアや華僑犯罪組織，フランス傭兵さらにはアメリカ政府まで巻き込んだ抗争が繰り広げられる。

アッシュがコンピュータから情報を引き出そうとした時，伊部俊一からは「コ　コ　コ　コンピュータが使えるのか!?」と驚かれるが，アッシュは「使えないの!?　なさけねーの／市立図書館（しりつとしょかん）にだって／あるじゃねーかよ」と答える。アッシュにとってニューヨーク市立図書館は，一人になれる数少ない場所であった。これに対して俊一はこう言う。「くっーそー

／新人類め！／大きらいだ／インテリの不良少年／なんて」（『BANANA FISH ③』小学館文庫）

またディノ・フランシスが凶悪犯のみを収容し，人体実験をするために作った精神科の隔離病棟からBANANA FISHの製造者の1人アレクシス・ドースン博士を救出するために，アッシュは病棟に忍び込む。そこで囚われた俊一らを見つけ，彼らも救い出そうとする。なぜ病棟のセキュリティ・システムを熟知しているかと問う俊一に，アッシュはコンピュータ・ネットワークから設計図を引き出したという。ここでも「情報旧人類」世代に属する俊一らはこう嘆息する。「ちー／ハイテク小僧め！」「どーせ／旧人類だよ！」（『BANANA FISH ⑦』：46）

1985年時点でアッシュは17歳，生年は1968年ということになる。本稿では「情報新人類」を1960〜1975年出生コーホートとしたが，日米における情報化の進展の速さに違いがあるにせよ，ちょうどこのコーホートの真ん中に位置する。つまり，アッシュは情報新人類の前衛にあたる。この『BANANA FISH』は，今日のBL系コミックの先駆（斎藤, 2009）であると同時に，情報新人類の前衛を描いた作品でもあった。そして，『BANANA FISH』の連載が終わった翌年（1995年），世界的にWindows95が発売され，情報化の進展が始まる。そして, この年の3月には日本では「BANANA FISH」ならぬマインド･コントロールによって操られた若者たち, 新人類世代による「地下鉄サリン事件」がおきる。それは, 小谷（1997, 1998）のいう「逃避としての「おたく」」宗教＝オウム真理教が起こした大量殺戮事件であった。

小谷（1997, 1998）によれば，1989年の宮崎勤元死刑囚による連続幼女殺戮事件と1995年のオウム真理教による「地下鉄サリン事件」の間には，ある種の共通性があるという。それは外的な「現実」あるいは他者とのコミュニケーションを拒否し，自分（あるいは教団）が作り上げた身勝手な「虚構」の中で生きることであり，この点で夥しい数のビデオで埋め尽くされた宮崎の八畳間と上九一色村のサティアン群は機能的等価物であるという。また小谷（1997, 1998）は，宮崎のビデオコレクションという「遊び」が，彼の生を豊饒にするものではなく, 現実や他者とのコミュニケーション回路を遮断する方向に向かったと指摘する。これに対して，本来の「遊び」は，ゲームであれ自然探索であれ，その対象のもつインパーソナルな法則性を理解し，自我をそれに従属させることで，自我に囚われていた現実からの一時的解放をもたらものであり, この点で「遊び」はある種の治療的効果をもちうる。実際, エリクソン（Erikson, 1972＝1987；1977＝1981）は，プラトンの『法律』にある遊び論を踏まえて，遊びの本質を「自由」と「制限」の両義性をもつもの，すなわち「定められた限界内部での自由な動き」（Erikson, 1977＝1981：154，傍点原文）としてとらえていた。そして，子どもは，拘束から解放された「遊び」のなかで現実をコントロールする感覚を身につけ，

内的葛藤を処理してから，再び現実に舞い戻ることで他者や社会的現実への対処能力を獲得するとした。

ところが，小谷（1997, 1998）によると，宮崎元死刑囚はこうした現実への還り道を自ら断ち切ってしまったという。そして，このことは宮崎に限ったことではなく，1980年代の全共闘運動――それは小熊（2009）によれば，政治と対峙することによる「自分探し」であったという――の挫折以降, モラトリアムが「社会的遊び」のなかでの自由な「役割実験」による自我の組み換えの期間という本来の発達機能を失ってしまったことの帰結であるという。その一方で，小谷（1997, 1998）は，「おたく」という言葉が，他者への呼びかけであったことにも注意を促す。「原子化した個人の極北」(小谷, 1998：204)であったはずの「おたく」たちも他者との「連帯」を希求していたのである。この「連帯」は，全共闘世代からの若者たちの重要なテーマであった。けれども，他者と視線を交わすこともなく，その名前を呼ぶこともなく「おたく」と他者に語りかける「おたく」は,「コミュニケーションを徹底的に「間接化」することで見えざる「シェルター」に閉じこもったまま，互いの自我を絶対に傷つけない形での「連帯」を志向したのである」（小谷，1998：205)。こうした「意味のある他者」（Mead, 1934=1973）ぬきの「自分探し」をしたのが，小谷（1997, 1998）によれば，オウム真理教であったという。というのも科学信仰のなかで他者との共感能力を減退させた若者に，「他者なき自分探し」の誘惑をささやいたのが「尊師」麻原彰晃被告であり，集団外部の他者を拒絶する個人主義が，パラドキシカルに全体主義的宗教集団を生んだことになると小谷（1997, 1998）は指摘する。そして，この「他者承認なき自分探し」は，やがて2000年代のバブル崩壊後の若者たちにも継承されていくことになるのである（片瀬, 2013)。

これに対して，2001年（『文藝』冬号）に発表され，第38回文藝賞を受賞した綿矢りさ（1984年生まれ，2004年『蹴りたい背中』で芥川賞を最年少受賞）の『インストール』（綿矢，2001＝2005）に登場する小学生の「かずひろ」は，情報新人類の末裔ともみることができる。この作品は，高校3年の少女・朝子が不登校を決意し，自室の小物や家具をごみ捨て場に放置するところからはじまる。しかし，朝子は自室にあったPCを捨てることには躊躇する。というのも，このPCは，母子家庭で寂しい生活を送る朝子のために，大阪の祖父がEメールの交換をする目的で買い与えてくれたものであったからだ。しかし，当時，小学生校6年生であった朝子は, PC（マッキントシュと思われる）をネット接続することもできず，また祖父もカタカナだらけの説明書を理解できないまま，「天国へ逝（い）ってしまった」。捨てるかどうか迷った末に，とりあえず電源を入れてみるが画面が消え，コンピュータも昇天。そこで，マンションのごみ捨て場にPCを運ぶが，そこで同じマンションに住む小学6年生の青木かずひろにPCを譲ってほしいと頼まれる。そして，同時にかずひろからから時給1,500

円の「アルバイト」を斡旋される。それは, 不登校で暇なら, かずひろが復活させたPCを使って, 子育てに忙しい風俗嬢・雅の代わりに, かずひろとともにアダルト・サイトのチャットで風俗の「仕事」をすることだった。かずひろは, 携帯でも閲覧できるサイトに女性名で（いわゆる「ねかま」である）メル友となった雅からこの仕事を頼まれたのである。折から始まった「ゆとり教育」「「生きる力」教育」のなか, 自分の「やりたいこと」や「個性」をみつけられず, 自己嫌悪に陥って不登校になった朝子に, とりあえず生きがいとなる仕事を体験させようという「インターンシップ」である。「あんた, 私のこともインストールしてくれるつもりなの ?」（綿矢, 2001＝2005 : 58）.

かずひろは,「あんたさっき文字で会話するのがチャットとか言っていたけど, あのさ, 実は私ワープロさえ打てないんだよね。人指し指だけ使って一分かけて, やっと自分の名前入力できるっていう, そんな感じ」（綿矢, 2001＝2005 : 68）の非情報コンシャスの朝子に, キーボード操作をはじめPCの使い方を教える。そして, 朝子は朝10時から昼2時まで, かずひろから借りた鍵を使って青木家に忍び込み, かずひろの部屋の押し入れのなかにおかれたPCでチャット嬢の仕事にはまっていく…。

作品発表時（2001年）を起点とするなら, 12歳のかずひろは1989年生まれ, 小学校入学時は1995年で, Windows95が発売され, 本格的なIT時代に入った年にあたる。この年行われた『第4回情報化社会と青少年に関する意識調査』（総務省青少年対策本部, 2002）によれば, この当時, 全国の12～14歳の青少年でインターネットを「現在利用している」者は46.3%, また「現在アクセスしている情報機器」（複数回答）ではPCが88.3%, 携帯電話・PHSが14.9%となっている。さらにインターネットの利用者にその利用目的を訊いたところ「個人のホームページを見る」が42.8%ともっとも多く,「企業・政府・団体のホームページを見る」「動画・音楽・パソコンソフトなどのダウンロード」「オンラインゲーム」をする者が33～38%程度いる。また「キーボードを見ないで打てる」「キーボードを見ながら, ある程度速く打てる」者は年齢層があがるほど増えているが, 12～14歳の青少年でも30.6%いる（ちなみに朝子の年代に当たる15～17歳では41%）。

この2001年にはまた, 情報通信技術（IT）の恩恵をすべての国民が享受できるようにすることを国と地方公共団体の責務とした「高度情報通信ネットワーク社会形成基本法（通称IT基本法）」が施行されている。このなかでは, 学校でも情報倫理を含むメディアリテラシーの育成し,「生きる力」や「問題発見・問題解決能力」の涵養によって, コンピュータやインターネットを適切に用いる能力の育成が重要であるとされた。

この総務省のデータを分析した清原（2002）は, 学校教育の影響に関して, 世代差を見いだしている。すなわち, 最初にインターネットに接した機器を見ると, PCは74.4%, 携帯電話・

PHSは18.9%であるが,学校教育にPCやインターネット教育が普及する以前にインターネットの利用を始めた18〜22歳といった年齢層は，携帯電話･PHS端末によって初めてインターネットに出会った人が多いのに対して，学校に情報教育が導入された以降の若い世代（12〜15歳)ほどPCでインターネットに初めて接する傾向が確認された。朝子とかずひろのメディア・リテラシーの相違はここに由来するとも推測される。

他方，家族の影響に関しては，同じデータを分析した中村（2002）が，親の学歴による子どもの情報格差の存在を指摘している。それによると，まず情報機器の中でも子どものPC利用頻度は両親のどちらとの相関も高く，とくに女子の場合，母親が利用していると子どもも利用する傾向が特に強い（$r=0.41$）。これに対して，携帯電話（PHSを含む）の利用は親子の間の相関が弱いことから，家庭の影響が弱いメディアであるという。さらにPCの利用に関してロジスティック回帰分析を行うと，子ども本人の属性要因（性別，都市規模など）は利用に関連しなかったのに対して，階層要因では親の学歴に有意な効果がみられ，親の学歴が高いほど子どもがPCを利用していることが分かった。そして，親の学歴が高校以下の場合，子どものPC利用は男子で30.6%，女子で27.0%であるのに対して，親が大学卒業以上であるとの場合，それぞれ47.9%，61.1%となり，とくに母親の影響が強い。こうしてみると，21世紀を迎えても，親の学歴といった階層要因は青少年の情報格差をもたらしているとみることができる。

［付記］

本稿執筆にあたっては，2005年SSM調査委員会よりデータ使用の許諾を得た。本研究は，科学研究費補助金基盤研究（B)「戦後日本社会の形成過程に関する計量歴史社会学的研究」(代表：橋本健二）の助成を受けたものである。また，この当時の若者論のいくつかは，本学の久慈利武教授より寄贈された。記して感謝したい。

参考文献

Adorno, Thedor et al, 1950, *The Authoritarian Personality*. Harper & Brothers（=1980, 田中義久・矢澤修次郎・小林修一訳,『権威主義的パーソナリティ』青木書店).
逢沢　明，1991，『情報新人類の挑戦』光文社.
新井克弥，1993，「情報化と若者の描かれ方：80年代後半の若者論を検討する」小谷敏編『若者論を読む』世界思想社：169-203.
新井克弥・岩佐淳一・守弘仁志，1990，「若者におけるビデオ視聴：ビデオ視聴を通してみた若者像の実証的分析」『年報社会学論集』3：119-130.
新井克弥･岩佐淳一･守弘仁志，1993，「虚構としての新人類論：実証データからの批判的検討」

小谷敏編『若者論を読む』世界思想社：204-230.
Bellah, Robert, N. et al., 1985, *Habits of the Heart : Individualism and Commitment in American Life*. University of California Press（=1991, 島薗進・中村圭志訳『心の習慣：アメリカ個人主義の行方』みすず書房）.
Bouredieu, Pierre, 1979. "Les trois etats du capital culturel." *Actes de la Recherche en Science Sociales*. 30.（=1986, 福井憲彦訳.「文化資本の三つの姿」『アクト』1：18-28）.
筑紫哲也, 1986,『新人類図鑑』朝日文庫.
Ehrenreich, Barbara, 1989, *Fear of Falling : The Inner Life of the Middle Class*, Charlotte Sheedy Library Agency Inc.（=1995, 中江桂子訳『「中流」という階級』晶文社）.
Erikson, Erik, H., 1972, Play and Actuality. in Piers, M.,（ed.）*Play and Development*. Norton（=1987, 阿部好策ほか訳「遊びと現実」『遊びと発達の心理学』黎明書房）.
Erikson, Erik, H., 1977, *Toys and Reasons,* Norton（=1981 近藤邦夫訳『玩具と理性：経験の儀式化の諸段階』みすず書房）.
遠藤　薫, 1998,「情報コンシャスネスと社会階層：情報化社会のライフスタイル」今田孝俊編『社会階層の新次元を求めて（1995年SSM調査シリーズ20）』1995年SSM調査研究会：119-168.
遠藤　薫, 1999,「オルトエリート：再帰的自己創出システムとしての大衆電子社会」『社会情報学研究』3：25-34.
遠藤　薫, 2000,「情報コンシャスネスとオルトエリート」今田孝俊編『日本の階層システム5 社会階層のポストモダン』東京大学出版会 ：111-148.
Fromm, Erich, 1941, *Escape from Freedom.* Rinehart（=1951, 日高六郎訳,『自由からの逃走』東京創元社）.
橋元良明, 1997,「情報行動倫理観の要因分析」総務庁青少年対策本部編『情報化社会と青少年：第3回情報化社会と青少年に関する調査報告書』大蔵省印刷局：213-222.
原　純輔, 1990,「序論：階層意識研究の課題」原　純輔（編）『現代日本の階層構造 ② 階層意識の動態』東京大学出版会：1-21.
平野秀秋・中野収, 1975,『コピー体験の文化』時事通信社.
稲増龍夫, 1991,『フリッパーズ・テレビ ：TV文化の近未来形』筑摩書房.
Inglehart, Ronald, 1977, *The Silent Revolution : Changing Values and Political Styles among Western Publics*. Princeton University Press（=1978, 三宅一郎ほか訳『静かな革命』東洋経済新報社）.
Inglehart, Ronald, 1990, *Culture Shift in Advanced Industrial Society.* Princeton Univ. Press（=1993, 村山皓ほか訳『カルチャーシフトと政治変動』東洋経済新報社）.
井上　理, 1997, 総務庁青少年対策本部編『情報化社会と青少年：第3回情報化社会と青少年に関する調査報告書』大蔵省印刷局：276-288.
井上　俊, 1973,『死にがいの喪失』世界思想社.
井上　俊, 1977,『遊びの社会学』世界思想社.
河北新報社文芸部, 2004,『大人になった新人類 ：三十代の自画像』, 河北新報社.
片桐新自, 1988,「「新人類」たちの価値観： 現代学生の社会意識」『桃山学院大学社会学部論集』21(2)：121-150.
片瀬一男, 1993,「発達理論のなかの青年像：エリクソンとコールバーグの理論を中心に」小谷敏編『若者論を読む』世界思想社：29-53.
片瀬一男, 2010,「モラトリアム人間の就職事情」『東北学院大学教養学部論集』, 156：1-24.
片瀬一男, 2012,「仕事特性と努力－報酬不均衡：J-SHINEデータによる分析」平成24年度文部科学省科学研究費新学術領域研究「現代社会の階層化の機構理解と格差の制御：社会科学と健康科学の融合」第5回定例研究交流会シンポジウム報告資料(2012年8月9日).
片瀬一男, 2013,『ライフイベントの社会学［新版］』世界思想社（印刷中）.
片瀬一男･友枝敏雄, 1990,「価値意識 ： 社会階層をめぐる価値志向の現在」原　純輔（編）『現

代日本の階層構造 ② 階層意識の動態』東京大学出版会：125-147.
片瀬一男・海野道郎，2000,「無党派層は政治にどう関わるのか：無党派層の変貌と政治参加の行方」海野道郎編『日本の階層システム 2 公平感と政治意識』東京大学出版会：217-240.
清原慶子，2002,「デジタル時代の青少年のメディア利用行動と意識に関する社会的対応の在り方」総務庁青少年対策本部編『情報化社会と青少年：第4回情報化社会と青少年に関する調査報告書』大蔵省印刷局.
小林久高，2000,「政治イデオロギーは政治参加にどう影響するのか：現代日本における参加と平等のイデオロギー」海野道郎編『日本の階層システム ② 公平感と政治意識』東京大学出版会：173-193.
小杉礼子，2002,「若者の就業行動は問題か」小杉礼子編『自由の代償／フリーター』日本労働研究機構：1-14.
小谷 敏，1993,「消費社会の到来と「総ノリ」現象：80年代の社会と若者（1)」小谷敏編『若者論を読む』世界思想社：82-85.
小谷 敏，1997,「若者文化のハルマゲドン：あるいは,「新人類」たちの運命」『社会学部論集』16(1)：1-44.
小谷 敏，1998,『若者たちの変貌：世代をめぐる社会学的物語』世界思想社.
栗原 彬，1981,『やさしさのゆくえ＝現代青年論』筑摩書房.
Mead, G.H., 1934. *Mind, Self and Society*. The University of Chicago Press（=1973, 稲葉三千男・滝沢正樹・中野 収訳『精神・自我・社会』青木書店).
見田宗介，1984,『新版 現代日本の精神構造』弘文堂.
宮台真司，1990,「新人類とオタクの世紀末を解く」『中央公論』10月号：182-202.
宮台真司，1994,『制服少女たちの選択』講談社.
美馬のゆり，1997,「青少年におけるコンピュータの利用行動と情報教育のあり方」総務庁青少年対策本部編『情報化社会と青少年：第3回情報化社会と青少年に関する調査報告書』大蔵省印刷局：244-260.
守弘仁志，1993,「情報新人類論の考察」小谷敏編『若者論を読む』世界思想社：142-168.
森岡正博，2008,『草食系男子の恋愛学』メディアファクトリー.
中島 梓，1991,『コミュニケーション不全症候群』筑摩書房（=1995, ちくま文庫).
中村雅子，2002,「青少年（12歳～18歳）の情報行動・社会意識に対する親の影響」総務庁青少年対策本部編『情報化社会と青少年：第4回情報化社会と青少年に関する調査報告書』大蔵省印刷局：314-335.
中野独人，2004,『電車男』新潮社.
中野 収，1985,『まるで異星人：現代若者考』有斐閣.
成田康昭，1986,『「高感度人間」を解読する』講談社現代新書.
野田正彰，1987,『コンピュータ新人類の研究』文藝春秋社.
小熊英二，2009,『1968：若者たちの叛乱とその背景（上)（下)』新曜社.
斎藤 環，2009,『関係する女 所有する男』講談社現代新書.
佐藤卓己，2008,『テレビ的教養：一億総博知化への系譜』NTT出版.
総務庁青少年対策本部，1997,『情報化社会と青少年：第3回情報化と青少年に関する調査報告書』蔵省印刷局.
田中康夫，1981,『なんとなく，クリスタル』河出書房新社.
海上知明，2009,「日本の遅れてきた市民革命：「新人類」の文明史的意義を考える」『金融財政business』10042号：11-30.
綿矢りさ，2001,『インストール』河出書房新社（=2005, 河出文庫).
吉田秋生，1997,『BANANA FISH』小学館.

【論　文】

セース・ノーテボームを読む　5）

『モクセイ！　愛の物語』――「日本」のイメージの生成

吉　用　宣　二

『モクセイ！』は日本を舞台にした短編である。オランダ人写真家が旅行案内のために「日本」を写真に撮る。そして，モデルの女性に恋をする。彼女は着物姿で，富士山を背景に撮影されるのだが，その日本のステレオタイプ的なイメージが意外であった。『儀式』の中には川端康成や楽茶碗が登場した。それはノーテボームの日本についての並々ならぬ知識と関心の深さを推測させた。日本女性との愛の物語だから，その出会いの設定の類型性は，小説全体の構造の中に解消されるのであるが，日本のイメージ（の生成）とそれに関係して「紀行文」の文体の生成を考えてみたい。ノーテボームは多くの「紀行文」を書いている（9巻のドイツ語版全集の4巻は「紀行文」―「旅の途上で」―である）。

私は『モクセイ！』において日本はどのように表象されているか論じる。それから彼の日本の紀行文（および海外での日本の展覧会の訪問記など）を年代順に読む。イメージは通時的に形成されるのではない。旅と読書や展覧会に由来するイメージ群が重なり，言語的に画定可能なイメージの帯が形成される。その潮流を描写したいと思う。そしてそれが「どう語るか」という文学の問いと複合的に絡み合い，ノーテボームは自分の「紀行文」の文体を形成していった。

1. 『モクセイ！―愛の物語』（1982）

『熱帯物語』ですでに見たように，ノーテボームは，異国を舞台にした多くの作品を書いている。異国の何か具体的な状況を設定し，そこに人物を投げ入れ，生起する出来事を描写する。その物語はその出来事よりむしろ，出来事が起こる異国の世界を描くためのものである。

『モクセイ！』では，主人公の，30代はじめのオランダ人写真家が日本という謎の国の中

に投げ込まれ，彼がどう反応するか，どのような波紋を投げるかが描かれている。彼は日本にとって旅行者，異人 stranger である。そして彼にとって「二つの日本がある」(II. S. 621)。

天皇誕生日の皇居での行列と警備の異様な厳戒を前に写真家，ペセルス Pessers は，日本兵がオーストラリアの戦争捕虜を斬首した写真を思い出す。「私が見るのは，少しの即興も我慢しない，いくつかのおぞましい軍人だ。この民族は病的に従順だ」(II. S. 623)。彼の友人のデ・ゲーデ De Goede は，「日本は，異なった風に異なっている」と言う（II. S. 625)。その「異なっていること」に対する反応は，「理解できない」日本と，「美しい日本」の分離である。ロンドンでの徳川美術展について，「残るのは芸術だ，メディチの場合のように。芸術はすべてにとって良い」(II. S. 627）とデ・ゲーデは言う。

だが一つの国の文化と社会をそのように二分することはできない。日本は謎としてあり続け，それを彼らの肉体の物理的な大きさが示している。「皇居の列の中で，突然彼は彼の友人と彼がどれほどはるかに大きく建造されているかを見た。〈…〉彼らは私たちを見ない，見たくないのだ，と彼は思った。自分がそれほどでかくて不可視であると感じるのは奇妙なことだと彼は思った」(II. S. 627)。

その「ガイジン」の違和感は「東洋の神秘」というクリシェへの反応でもあるが，文化は肯定／否定の尺度で測られるものではない。デ・ゲーデは「従順な日本人」に関して言う。「自分を群衆として隠し，目立たないことを一番好むそのような国で，流れに逆らって泳ぎ，絶望的に失敗する幾人かの狂人が英雄なのだ」。そして『The nobility of failure』(失敗の崇高)(II. S. 627）に言及する。

この文化論的な会話は冒頭にある。「異文化」の中で疎外感に苦しむ男の描写に属する個所だ。だが，小説は異文化理解の書ではない。女は愛の物語の文学表現の意味で分析されるべきだ。そしてその女の描写の中に文化的記号が組み入れられている。その成否がこの小説の評価を決めると思う。

「彼は彼女になりたかった，そして彼女においても同じことが起こっているという感情を持った，と彼は考えた。〈…〉ある女の手をつかむ時に，その手が一つの欲望によって駆られていることが感じられるか，人はどのように描写できようか」(II. S. 629)。愛は，文化理解のメタファーだろうか。

アパートのドアの中の女。「彼女は半分だけ服を着て，ドアの隙間にエロチックな彫刻のように立っていた。日本の空間の中の飾りのないデコールの中のほとんど動かないイメージ」(II. S. 630)。ドア枠の女，額縁の女。浮世絵の美人画のように。

そこからフラッシュバックして，女との出会いが語られる。そこでも文化的なイメージが先行する。『ズーム』誌の 1858 年の写真，「レッド・リヴァーの堤防の上の大草原」。「灰

色の鉛のような古風な平原，その中でプレーリーと水が区別なしに互いに入り組んでいる」。(II. S. 632)。「もののあわれ」とデ・ゲーデは言う。「ものごとのパトス das Pathos der Dinge」。「それは正確にその写真に適合していた」と写真家は思う（II. S. 633)。「もののあわれ」という曖昧な概念が言及され，その後で，女との出会いがある。写真家は「私はなにかもっと日本的なものをほしい」（II. S. 635）と言い，そのモデルを紹介される。「さとこ」。「彼女の顔は，彼が北方の山の滑稽なドライブで見た雪フクロウを思い出させた」(II. S. 636)。

「さとこ」は殆ど存在感がないように描写されている。『仮象と存在の歌』のラウラのように。その曖昧な（写真の茫洋としたイメージのような）「さとこ」が富士を背景に撮影されるのだから，ますます「さとこ」＝日本のイメージが強化される。もちろん，ノーテボームはクリシェを常に異化しようとする。富士山へのドライブの際の「交通指示をするロボット。それから出てくる，脅かすような感情，機械の手がその運動を遂行する，その致命的な一様性，それを彼は振り払った」(II. S. 638)。

一方，富士山は女と等価になる。「山は一つのエロチックな所与だった，その高い先端が尖っていく形は彼女の顔の性愛性に何かを付け加えるだろう。まるで山が一人の女の胸の象徴となったかのように。その胸は写真の中では着物の下に隠された胸を表現するだろう」(II. S. 639)。

だがノーテボームはクリシェとの微妙な差異の中で描写する。

「富士の白い円錐が彼女の頭の上に雪の女王の王冠のように漂っていた。山のマッスは彼女の肩とその惨めな，たいそう日本的な門の上に流れていた。だからこれがその均衡だった。女，山，門。彼女は完全なモデルだった。彼女は姿勢や表情のほんの少しの変化によって彼のために他のイメージを考え出すすべを知っていた。彼はそのための表現を見出した，つまり彼女は光を食べるのだ。それは光が，彼女の光がどこにあるか彼女が知っていたので，可能だった。彼女は光と共に働き，光を放ち，自分をいつも他のポーズで彫刻した。そうして彼に激しい欲望が生まれた」(II. S. 641)。

要するに，ノーテボームはクリシェ的なイメージを利用し，それを批評的にずらすことによって日本を描写している。メタ「エキゾチシズム小説」である。

女と一緒にいることが，日本をもっと深く見させる。

「夕方。〈うかい　とりやま〉へ。一人の見知らぬ女と一緒に車に乗り，人が以前に聞いたこともないところへいく途上にあることは，奇妙なままでとどまるだろう」(II. S. 642)。

彼は一人で旅館の周辺を散歩する。

「彼は，彼が大洋の上のどこかで失った彼の魂がいまゆっくりとふたたび彼の仲間に加わることを感じた。ある曲がり道の脇に彼はブッダ像のある小さな祭壇の一種を見た。彼らは

結ばれた赤い飾り帯を締めており，あらゆるものから遠ざけられて，落葉した果物の木の背景の前に立っていた。その背後に直接に針葉樹のある丸い丘がそびえていた。今，私はそこにいると彼は感じた。今, 私は本当にそこにいる。そこで一つのもっと明るい音と一つのもっと暗い音が聞こえた水のそばでのように正確に，暗い色の針葉樹の木々の間の開口部を通して，第二のもっと遠くにある丘が見えた。彼はさらに近づいた。ブッダ像たちはその表情をもう変えることはできなかった，果物の木の葉を色づかせ，退色させ，落とさせるであろう季節もこれらのブッダ像の顔の上にいかなる影響も持たなかった。ブッダ像自身がすでに季節であった。その前に怒ったような紫色の花があった。〈…〉葉は長く薄かった，しかし花はしわくちゃになったようなものを持っていた，水銀のような水滴がそれらを囲んでいる緑の葉に掛かっていた。すべての中に奇妙な統一性があった。水の音，ゆっくりと世界の上に降りてきて霧をもっと迫ってくるものに，もっと陰鬱にする暗闇，そのすべてが一つであるように見えた。そしてさらに今コオロギの音，10 月に。そしてコオロギが呼んでいるのは，それだ，10 月，10 月と」(II. S. 643)

日本人は季節の移り変わりの自然のリズムに生活を重ね合わせて生きてきた。このノーテボームの描写は西洋人の自然描写ではない。自然支配とは異なった自然との関係が暗示されているように思う。そしてそれがノーテボームの日本についての観念を決定している。

この自然描写の後で，彼は部屋の中に女を見出す。

「彼女は写真のために置かれたようにそこに坐っていた，そしてそれが何を意味しているかを写真家が一番良く知っている。彼女は，彼女が自分を場面に置いたように，見られることを望んだ。そしてその後保存されることを」(II. S. 644)。

女は写真のモデルとして演じているばかりでない。彼女は日本の女のクリシェを演じている。

「彼女は酌をし，食事をする。どの彼女の動きも流れるような優美さがあった。欲することも，願望することも，尋ねることもなかった。まったくかすかに今なお外から三味線の音が響いていた，それは静寂とほとんど聞き取れない遠くの川の音を通して黄金の糸を張っていた。緑色のかすかに苦いお茶の後で彼女はただ一瞬の間まったくかすかに彼女の手を彼の膝の上に置いた」(II. S. 645)。

庭を散歩。「彼女は彼の手を取った，それはまるで彼女が彼と踊りを，あの庭の迷路の中での踊りをしているかのように見えた。その庭は，永遠に消えてしまった時間の中以外のどこにも存在していなかった。〈…〉この夜，彼の人生の唯一の現実的な愛の物語が始まった。〈…〉それは彼を根本まで焼き，そしてその前とその後のすべてを消し去ることになった情熱だった」(II. S. 646)。

この女の身振りは類型的である（あるいは日本人の私はそう思う）。日本舞踊のようだ。この女は「日本」である。男はその女＝日本に恋をするのである。だが，愛にはクリシェはない。愛はクリシェを焼き尽くす。

だがその愛は情熱ではなく，「もののあわれ」的である。

「翌朝，彼は周囲で撮影した。独特な甘い香り。女は〈モクセイ〉だと言った。今，彼女は三つの名前をもった，彼にとってだけの密かな名前，雪の仮面と，彼がけっして使わなかった彼女自身の名前，さとことそしてモクセイ」（II. S. 648）。

こうして彼らの愛は始まった。彼女はヨーロッパに行くことを拒否した。「行けば，両親が死んでしまうわ」（II. S. 648）。彼は日本での仕事の時に彼女を訪れた。そこでの日本は，近代化された，世界のどこにもある姿である。六本木のディスコ。

「それは明白に〈もう一つの〉日本だ，失敗した模倣の精神的なスラム，人がライヴァルを憎むように彼が憎んでいる国だ。彼が彼女において愛しているものすべて，距離，謎，近づきがたいもの，それがここではその反対物に変えられ，彼に一つの別の仮面を見せているように見える。彼を脅かし，彼を追い払うであろう，人間的な卑俗さの仮面を」（II. S. 651）。

しかし女はその「もう一つ」の日本も所有している。あるいは女にはそのような「もう一つの」の日本などない。「もう一つの日本」を見るのは異人だけである。

女は結婚すると言い，この恋は終わる。女の他者性は，「眠る女」の姿で示される。

「眠っている人は，近く，同時に遠く離れている，君からそして自分自身から。無力であり，しかしその不在性によって強力である。彼は彼女のとなりで寝る。彼は彼女の体を知っている，しかし彼女のことを何も知らないことを知っている」（II. S. 652）。

本来，すべての愛は，stranger と stranger の間で起こる。愛の物語は，いわば「異文化」理解のそれである。文化理解の不十分さの故に愛は挫折する。この場合，女は自己イメージを意識しない。男は過剰にイメージを読み取り，そのイメージの過剰さによって女は離れていく。私は『モクセイ！』を異文化理解のメタファーとして読んだ。ノーテボームは「日本文化」の類型的なイメージを小説世界の中に巧みに組み入れている，そしてその仕方は批評的である。『モクセイ！』は小説として構成されているので，文化理解のスタイルである「紀行文」とは異なる。小説の中では「愛」は「謎」でとどまる。しかし「紀行文」は「謎」を解こうとする，理解しようとする。「東洋の神秘」に祭り上げておくのは，容易であるが，西洋精神の方法ではない。だから小説の形式ではない，日本についての他のテクストは，その謎の解明に向かうだろう。「謎」のままにしておく精神の怠惰を批判するだろう。

この短編はヨーロッパの『蝶々夫人』以来のエキゾチシズムの系譜において読まれると思

う。つまり日本人の読者に向かって書かれたものではない。ここで問題となるのは，私は日本人であるので，日本人としての自己イメージをすでに持っている。それでは，私はノーテボームの日本についてのイメージを客観的に評価できるのだろうか。「富士山, 芸者」のイメージについて言えば，1863 年ごろ横浜に姿を現したイギリス人フェリックス・ベアトたちが，外国人旅行者向きにちょんまげ姿の侍, 力士や芸妓, 名所風景の写真を売りだした。この「横浜写真」は輸出もされ，「東洋の神秘の国」のイメージの形成に貢献した[1)]。国のイメージはその国の人たちが作るのではなく，外国の人間が作り，それをその国の人たちが内面化するのである。外国人が日本をそのように理解したならば，そのイメージは「正しい」。私がこの『モクセイ !』に居心地の悪さを感じたのは，私が日本人であるからだ。ほとんど無意識に持っている日本という自己イメージが動揺したのだ。いずれにせよ，ノーテボームは，類型的な日本を描いているのではない。日本という「謎」は，その謎を解明する誘いとして提示されている。そしてこれからノーテボームによる「解明」を見ていこう。

2. 『天皇誕生日，もののあわれ，そして他の日本の経験』（1977）― 最初の日本旅行

『モクセイ !』は 1982 年の作である。ノーテボームは 1977 年に日本を訪れ，その紀行文を書いている。その冒頭には，『モクセイ !』でも触れられた，戦争中の日本兵によるオーストラリア人捕虜の処刑の写真が記述されている。

「私は当時 12 歳だった，私に大きな印象を与えた一枚の写真。馬鹿げた長いコロニアルなカーキ色のズボンをはいた，オーストラリアの戦争捕虜が椅子の木の幹の上に座っている。彼の目は縛られている。金髪が風にいくらか翻っている。彼の手は一本のロープで縛られている。彼の後ろに一人の日本人が立っている，彼は略帽，黒いズボンと長靴，白い半そでのシャツを身につけている。両手に，高く掲げた，大きな剣。ゴルフプレーヤーがクラブを最高の位置に掲げているように。〈…〉私が日本について持っている一番古いイメージ」（VI. S. 264）。このイメージは鮮明に西洋には不可解な日本を示している。そしてそれが日本への関心を起こさせるのである。

「私を今没頭させている問いは，日本はどのように〈異なっている〉かということである。この最近の年月に私は谷崎，川端，大江，三島を読んだ。〈…〉もし私が異国性を取り去るならば，あるいは別の異国性と取り替えるならば，私が理解しないであろうものは何も残らない」（VI. S. 265）。しかしそれは「日本」を理解したことではない。では「本当の日本」とは何か。日本文学の予備知識を持ってノーテボームは初めて日本に来た。そして日本の現実の中で当惑する様子をこの紀行文は描いている。冗長なタイトルのように，旅は動揺，困

惑とともに始まる。

「そのような到着の後の最初の日は，いつもまったく奇妙である。私の部屋の中はとても静かである。部屋自体はかすかにベージュ色で，無装飾だ。一瞬の間私はそれがついに彼岸であることを期待する，しかしとんだ間違いだ。ドアにかすかなさらさらという音，そして私は新聞がゆっくりと押し込まれるのを見る，Mainichi Daily News。経済委員会は社会保障にもっと高い貢献を要求する。これは決定的に彼岸ではない。私は窓辺に行き，カーテンを開く。スモッグなのか，単に悪い天気なのか。Groning のような空の下に途切れることのない列の町，家，工場，線路がぼんやりとした地平線まである。私は 5 本の列車が同時に走るのを見る。窓の下には人間の肉が有意義な仕事への途上へと揺れている。宇宙は回転し，すべては符合する。私はテレビをつける。もぎたての桃の顔をしたティーンエージャーの一団がステップダンスを見せている。彼女たちは恐ろしいアメリカ的な微笑を浮かべているが，それを除けばとてもかわいい。私は次々とすべての 13 のチャンネルをつける。〈…〉今私は本物の世界に熟し，下に降りる。玄関ホールの角に一つの庭が設置されている，その中で着物姿の可憐な娘がお茶をサーヴィスしている。徐々に物事が形をとり始める。一人の女が私の方にちょこちょこ歩いてくる，彼女は眼に見えないレールの上を移動している，と言えるだろう。私の少し前で彼女はお辞儀をし，銀の音を発する。その後で彼女は私にお茶を注ぎ，私は彼女への，同時にまったく日本への，深い不幸な愛の中で，燃え上がる。それはもう変えられない。それはあっという間に起こった，考えられるもっともナンセンスなクリシェの中で。マニキュアした指の白い人形の娘，彼女の肌のバラ色の傷つけられないユリの葉のような絹のきらめき，その肌の中に偉大な石工が二つの眼をはめ込んでいるのだが，その眼の中で人は，何かを見ることなしに，世界の創造まで振り返って見ることが出来る。私は観光客のように椅子に座る，救いがたく火をつけられ，もう消すことのできない幸福感につかまれて」(VI. S. 267f.)。

ノーテボームは後に『これから話す物語 Die folgende Geschichte』(1991) を書いた。それは，アムステルダムで眠った男が，リスボンのホテルの一室で横になっている自分を見出すところから始まる。後に男は生と死の境にあることが明らかになるが，ここで東京のホテルの部屋を「彼岸」と思うところは，その小説のヒントになったのかも知れない。いずれにせよ，異国に身を置くことは，過去の自分を仮死状態にすることである。かすかなアイロニーでもって語られる，移動に当惑し，少しずつ知覚を開始する姿の描写は素晴らしい。現象学的還元のように，世界が，すべてのあらかじめの観念がカッコ入れされ，純粋に知覚，描写されるような。

一方で，見ることを可能にするのも日本における「ガイジン」の位置である。

「私は，地面に記入されているところに，自分を置かねばならないことを知っている，そこに間違えることなくドアが止まるからである。私は，豆腐のように柔らかく，白い手袋をはめた紳士によって他の肉の間に，列車の中に押し込まれることを知っている，私がそこで誰に出会うのかを知っている。制服の女生徒，新聞を読む人，白いシャツとネクタイのスーツの紳士。誰も私を気にかけない。私はそこにいないからだ。私は誰でも見ることが許される。プラットホームの上，列車の中で不在の口たちが物語を朗読している，そして私が読むことのできる唯一のものは，プラットホームにおける名前の報告である」（VI. S. 270）。

そこに存在しているのだが，しかし見られていない「ガイジン」や，西洋の群衆とは異なった様態を示す日本人は，ノーテボームに謎に見えたに違いない。

「人が街を歩き回ると，一つの状態を常に意識するようになる。人は強引に群集に取り巻かれる。信号が青になると，洪水の波のように群集は進む。雲の上で人はデパートに運ばれ，彼らは何ダースも壁の赤い電話で電話をする，電話はただ，ボックスもなく，壁に掛かっている，人の周りのいたるところに，運動がある，海のように減少し，膨張する運動がある。しかし決して攻撃的ではない，1,700万の人間と一緒に一つの都市の中で生きる，唯一の可能性は規律の一形式であることをすべてのものから学んだ民族。普通それは私がそれほど感激しない何かである。しかしここではそれは絶対的な必然性である。押し合いへし合いはない，すべてはまるで自然法則が関係しているかのように経過する。群集は流れ込み，流れ出ていく。大きな地下の湖が地下鉄の駅の周囲に渦巻いている，黒い髪をしたすべての顔，皆なきちんとした服装をし，明白な目標を持っている。私はこの集合性を恐ろしく不安にさせるものと考えるように準備していた，しかしその反対が妥当している。この群衆の中を一緒に流れること，理解不能な肉体性によって囲まれていること，自分も群集であることは，官能的な快楽である」（VI. S. 271f.）。

ロラン・バルトは『記号の国』の中で，個別の細部を取り上げ，考察を記していた。「日本文化」を一般的に論じても意味はない。ノーテボームはバルトのように項目をもうけないが，細部の海に漂い，その流れを記述する。

東京の「破壊的な醜さは，何度も小さな形式の美によって中断される，何度も人は小さな無上の喜びを体験する。人間の優美さなど」（VI. S. 269）。その「美」は例えば，食事である。「しかし外国人のために献立の素晴らしい，欺くように本物に見えるディスプレー。給仕の男か女を一緒に連れ出し ― それはたくさんの笑いを伴う ― そして食べたいと思うすべてを指し示す。〈…〉お皿の上に来るものはすべて素晴らしく美しく料理されている。小さなコンポジション，食物の絵画。都市が博物館的な美を持っていないことが少しも重要でないと私が言うならば，そのことを私は主張しているのである。救済的な優美さは小さな

物ごとの中にある。日常生活の文化の中に。〈…〉そのような小さな芸術作品を食べることは根本的には美とのコミュニケーションである。同じことは，デパートでの包装の仕方にも妥当している。エスカレーターの足元でのささやかれる挨拶や優美なお辞儀にも妥当する」（VI. S. 272f.）。

ノーテボームは国会を見学する。不可視の外人が可視的になるときの齟齬を小説家はカフカ的な不条理のパロディのように描写している。

議事堂の守衛のところ。「何かが合っていない。私はすでに人はできるだけ興奮してはならないと学んでいた。そして最初の聖体拝領の顔で辛抱強く微笑む。カオスの中から英語を話す一人の紳士が現れる。私たちはお辞儀をする。名刺を交換する。私は Ito さんと待ち合わせていると言う，彼はそれはありえないと言う。〈…〉彼はきっと大きなむつかしさの中にいる，何度も私のカードを鼻先に持っていき，つぶやいている。〈…〉時々彼は制服の男たちの方を振り向く，制服の男たちは彼の苦悩の道に対する完全な尊敬の念をもって観察している。Nutbum，と彼は再び言う。オランダ。その通り。私たちはお辞儀をする，Ito と私は歌う，〈アポイントメント〉，〈オランダ大使館〉。〈大使館 ?〉。イエス，Mr. Ito ?。ついに彼は，私を中に連れて行くことを決心する，しかし彼は幸福ではない。彼は詰め物をされたネズミを前にしているコブラのようにシューと音を立てる。そして私を窓口に連れていく，そこで私はたくさんの書類に記入しなければならない。それから私たちは大きな建物に入る，この空間のどこかに彼は電話をしに行く，それはとても長い会話となる。くもの糸のもつれが解かれると，私がその機構全体を混乱させたことが明らかになる」（VI. S. 273f.）。彼は結局，衆議院と参議院を間違えたのであった。Ito 氏は衆議院に行きたいジャーナリストを，Moegi 氏は，参議院に行きたいジャーナリストを迎えるのである。

政治はしかし国会の外で彼の注意を捉える。右翼の示威行動。「その怒号は不安にさせ，私を終始，追いかける。それがどこへ行ったにしても，不快な」（VI. S. 275）。捕虜処刑の写真，天皇誕生日に皇居での異常な警備。オランダ人は東南アジアで日本人の捕虜となっている。しかしノーテボームが日本の歴史を見る眼は驚くほど同情的だ。彼は日本の第二次世界大戦への参戦を日本が世界から差別されていたことから説明する。

「アメリカの法律（1924）。日本人はアメリカで〈白人〉と結婚してはならない，どの土地も所有してはならず，あからさまな人種主義の様相を我慢しなければならない。第二次大戦。日本が世界の残りの国にとって，そんなにも異質な不透明な文化を持った，不安にさせる不可解な神秘であることが加わる。その文化には言語の障壁が寄与している。さらに日本があの年代に封建的な農耕社会から，大変革や歪みを伴った工業社会へと発展したことが加わる。〈…〉そして持続的に増える人口（年に 100 万）。〈…〉その小さな資源の少ない，人口過剰

の国は，窒息したくなければ，もっと空気を必要としていた。日本を中国に方向付けるように強制したのは，確かに大国の人種主義や保護主義だった」(VI. S. 277f.)。

これにはオランダもまた小国として植民地を作った国家であったという反省がある。ノーテボームが多くの紀行文を書いている三つの国，スペイン，ドイツ，日本はすべてオランダの「敵国」であった。

政治もまた文化であるが，ノーテボームの「求めている」ものは政治や社会ではない。皇居で彼は一人の少女を見る。

「私は知らない花の甘い香りを嗅ぐ。開いた平面に一人のとても小さな女の子が白い服と小さなピンクの靴をはいて立っている。彼女は紙の小旗を濡れたアスファルトの上に落としてしまった。私は彼女の方を見る。まるでこの小さな子供の中に，私にとって日本であるところのものがすべて丸く固められているように見る。彼女は泣かない，彼女はまったく静かに立っている，母親が来て，旗を取り上げる，彼女のドレスのように赤と白の。それから彼女たちは再びその怠惰な列の中に並ぶ，その列に私は属しており，属していない。私たちの中の最後のものが外に出るとき，門衛が高い皇居の木の門を閉じた。そして私は帰宅する」(VI. S. 278)。

『モクセイ !』はこの少女のイメージから生まれたのかもしれない。

7 日目，ノーテボームは一日中ホテルにとどまり，考える。イメージの氾濫に対して踏みとどまろうとするかのようだが，それは日本文化を理解する試みである。彼は，谷崎や三島などの小説を読み，理解する。「人が単純さのために〈本質的な〉物事と名づけるものは安心させるような仕方で, 同じである, と思った」(VI. S. 279)。しかし現実の日本の中で彼は「ガイジン」である。

「〈ガイジン〉という言葉は，outside person を意味している。しかしまた別の概念,〈他人〉が存在している，それは特別な仕方で私の〈異質性〉を表現できる。他人は，人に対していかなるリアルな関係も持たない存在である。〈…〉現実の関係の不在は，人が，現実には見られないということを意味している」(VI. S. 289)。

その「ガイジン／他人」が日本を理解できるのだろうか。それはまた,「旅行者」の基本的な条件と同じである。「旅行することは常に，残酷なもの，好奇心のあるもの，礼儀に反したものの要素を持っている。〈…〉そしてこの意味で人は侵入者である」(VI. S. 280)。

旅人はそこが異国であるからこそそこに来た。差異を認識するために。そして差異は認識を挑発する。旅人は必然的に謎の前に立つ。ノーテボームは,「日本的な情動」の翻訳を試みている。「〈カナシミ〉(陶酔的，魅了するもの，素晴らしいものと不幸をもたらす壊滅的

なものが並存し，いわば唯一の感情情動の中に包括されている)，〈もののあわれ〉(「物事のパトス」，「移ろいやすいものの特別な美の承認」)。どのように私はそれらの概念の事実的な重さを算定できるのか。〈人情〉(「自発的に生まれる感情」)，〈義理〉(「社会的に取り決められた相互の依存性」)，〈甘え〉(「それが彼の家族，隣人，彼が働いている会社，あるいは結局，日本社会全体であれ，個々人が集団の中で享受する，受動的な愛」)」(VI. S. 281)。あるいは，「1944 年 7 月のサイパンでの日本軍部隊の集団自殺」と特攻隊の遺書。「これらの事柄はまだ滑らかなファサードの後ろの数千の形式や考えの中に存在しているに違いない」(VI. S. 284)。その「謎」を認識することが文化を理解することである。ここではそれは提示されているだけだ。そしてノーテボームの旅はそれに対する回答の試みである。

日光。ノーテボームはロマネスク美術を特に好む。日光の東照宮はいわば日本のバロックであり，彼の趣味に合わない。そのためにではないが，日光の旅は「観光」のそれとしてシニカルに描写される。

「日光の寺院や霊廟の訪問のあと私はそれを知っている。たくさん，そして何も見なかった。残っているものは，私の場合は私が〈日本〉と呼ぶところのものの全体像の中に沈みこんだ印象の狂宴である。そして私は，私が今のように一人の厳しいガイドによって寺院の中に押し込まれ，連れ出されなかったならば，もっと多くのことが残っただろうかと自問する」(VI. S. 287)。

「しかし私が明白に覚えているものは，日本人である。学校，グループ，軍隊，家族，彼らは畏敬に満ちて自分自身の過去の中を散歩し，その際に永遠に互いの写真を撮る。どのグループも鳥の群れのように彼ら自身のガイドに従っている」(VI. S. 288)。

「最後に私たちは古い上品なホテルで降りる。廊下に，1899 年まで遡る古い写真を見る。着物を着た日本の家族, 西洋の服装の日本の猟師, 1922 年, そして 1892 年の宿帳の最初のページ，〈キャプテンとミセス Glubb，香港，ミス Woodbury，USA〉。Woodbury さん，長生きを！テレビで女の子がヨーロッパ的な朝の体操音楽に合わせて体操している。私は玄関のホールの中，竹の障子の前の重い椅子の一つに座っている。そして遠くの手で描かれた丘を見上げている，雨と北方で重いそれを。そしてキャプテン Glubb とミス Woodbury のことを考える，そして自問する，彼らがここで何をしたのか，私は今何をしているのか，と」(VI. S. 289)。

「日本の半分が別の半分のところに旅行するように取り計らっている」(VI. S. 289) ゴールデンウィークに大阪へ。ロイヤル・オオサカ・ホテル。そこから彼は京都へ行く。彼の日本のイメージはたえず現実によって覆される。

「しかし列車はすでに出発していた，サーディンの間のサーディンとして私は，時速300キロで風景の中に投げ出される。私はこの巡礼をまったく違ったふうに想像していた。そして私が望む最後のことが起こる。つまり二人のニキビだらけの18歳のアメリカの〈エホヴァの証人〉が私を慰め，人はすべてに慣れること，私は実際に正しい列車に座っていること，人がここに数ヶ月間いればすべてはおのずから起こると言う。〈…〉私はそこにおずおずと畏敬に満ちた気分で到着したい，地球の半分をまわり私はこの瞬間のために飛んできた，最初のセメスターの学生組合学生のように怯えさせられて，私はためらいながら，躊躇しながら，本当の日本に入りたい，そして苦さをもって私は川端の『美と悲しみ』の素晴らしい導入部を思う。そこでは主人公の，おきとしおが一年の最後の日にまったく一人で京都に旅する。〈その後すぐに冷たく一つの明るい輝きが，黒い雲の中の三日月の形の隙間から現れ，長く消えなかった〉。しかし私は風景も雲も見ない，私はただ速度と人間の魂の私の魂への圧力を感じる，私は柔らかい抵抗のないマッスの中で揺れている，私の毛穴，眼，耳を閉じ，私の脳のかんぬきで閉められた領域の中で，私がすぐに入るであろうその寺院都市のビジョンを追求する。しかしそれは現れてこない，というのは，私を今囲んでいるこの同じ群衆は，私のそば，私の周囲に留まり，私と一緒に大きな駅前広場に流れ出て，バスやタクシーや路面電車の間の，別のすでに波打っている群集の中に移行し，寺院のない歩道の上を，過去のないデパートの脇，お土産店，絵葉書の脇を通りすぎていく。それらの絵葉書は，私が見ない光景を再現している」(VI. S. 291f.)。

ノーテボームは謙虚な礼儀正しい人間である。異なったものを，異なっているがゆえに拒否することはない。しかし好みは存在する。彼が否定的に感じるのは，日本の近代的な姿である。そして彼があいまいな形でもっている「日本」のステレオタイプ的なイメージに適合するものも拒否される。

東本願寺。「私は今この寺を覚えているか。いいえ。この寺の後で私は多くの寺にいた，しかしそれらは，寺院の森の中に混ざってしまった」(VI. S. 293)。そして彼は庭園に逃げ込む。「〈自然〉を私は少なくとも理解できる。木々は，それらが日本の木々であることを少なくとも理解している。木々はそこに人間のモデルのように立っている，好意に満ちて，身なりを整えられて，ツツジは描かれている，シュロは詩作されている，水はコケむした石にそってささやく，ニワトコ，モクレンがその中に身を映している。ここには秘密はない，ここにはエキゾチックに感じるために費用がかからない」(VI. S. 293f.)。

ノーテボームはどの旅行の際にも人間と同様に自然に向かう，あるいは人間によって作られたもの，建物，庭園，植物園や動物園，墓地に向かう。彼は風土の卓越した読解者である。そしてどの旅においても，その土地の名所旧跡よりはむしろ偶然に遭遇した出来事が彼の心

をとらえる。

「にぎやかな主要交通網から離れた，静かな小さな道路を歩いているとき，私はガイドブックに見出さない小さな寺に遭遇する。その雰囲気はかすかに日曜日の午後のフランスの村を思い出させる。一人の子供がネズミ花火で遊び，一人の父親が路上で息子とピンポンをしている，そして突然一つの小さな低い家の中から一人の花嫁。彼女はとても白く化粧しているので，彼女の顔は仮面になってしまった。黒い髪が，膨らみふくれるいくつかの軌道の中のブランクーシ的構造を持つ頭部，この白く粉を振りかけられた頭部から高みに湧き出ている。儀式的な着物が金の緞子の前に硬く立っている，その下の小さな雪のように白いひづめはアスファルトの上に引きずるような歩みをする。〈…〉 一度彼女は，彼女のしわのない白の中の二つのきらめく黒い黒玉で私の方向を眺める，そして彼女の顔は私に，前世紀前半の国貞の肖像画を思い出させる，〈江戸の女〉，その顔，その中で小さな口が唯一の火のように赤い開口部を形成している統一的な平面，鼻は長く，一本の羽のように薄い線で理想化されている，そしてここにもまた，同じマニエリスム的な髪の華麗の下に，黒い，かすかに斜めになっている，宝石のような眼。数秒ですべては過ぎ去り，その後はじめて私は寺を見る。外には魚の入った数枚の皿がある，捧げものだ。中に，大きすぎる椅子の上に小さな木造のブッダが座っている，一本のロープに大きなゴングがかかっている。その建物の右側に又，一人のブッダが座っている，だれも見ることが出来ない，地面のある点に向けられた木の眼。すべてから遠ざけられたものの微笑み，その小さな口は，まるでそこからどの瞬間にも一つの金の泡が湧き出ることが可能であるかのように形作られている。一人の老婆が線香を器に刺す，その中にはすでに何本か別の線香が燃えている。彼女は少しその前に立ち止まり，足を引きずってそこから離れる。一つのささいな場所でのささいな瞬間，しかし忘れられない」(VI. S. 295f.)。

一方，竜安寺の描写はあまり精彩がない。「かつて宗教のドアを自分の後ろで低い音で閉めたものは，たいていはすぐには，自分の投げ捨てられた古い価値を新しい文の神話や神秘と交換する準備ができていない。にもかかわらずこの数メートルの殺風景な空間の中から魔法が，神秘的な挑発が出ている，それから逃れることは難しい」(VI. S. 296)。『儀式』ではフィリップの部屋にあった絵葉書の形で竜安寺が描写されていたが，ここの描写は「禅」のステレオタイプ的説明の域を出ていない。奈良の大仏の描写はどうだろうか。

「ひとは東大寺のおおきなブッダの前に1時間立つ必要がある」(VI. S. 298)。具体的な描写の後で，「そのブッダの足は私の体よりも大きい。どこかであるとき，あらゆるこれらの拡大化の中で，このブロンズのもっとも内的な核の中にこの誰かがいた，ますます大きく異質になる姿ではなく，地上を走り回り，何かをなし，言う人間が，その本質が今この近づ

きがたい彫刻作品のマッスに形を変えた一人の人間がいた。このアジア全体で数百万の形や大きさに固められた像。謎〈…〉。〈私はこの夜，悲しかった，ほとんど不安であった〉とCouperusは『日本探索行』の一つのエピソードの中で鎌倉の大仏について書いている。〈晴れた夏の夜の空のうす暗闇の中で，今もこの地上から立ち上がる不動性，この神の顔に対する驚きが残っていた，その神の顔は，静かな永遠の夢の顔となった，この世界では目覚めることがない夢の。そして私は，決して死後の生を請わなかった哀れな存在や世界についてのカルマの掟を残酷だと思った〉」（VI. S. 298f.）。

「大仏」というオブジェを介してノーテボームは過去のオランダ人作家につながっていく。大仏からブッダの姿を偲び，Couperusの文を想起する。ブッダは追憶の神となる。

「ブッダ」や「禅」をヨーロッパの言語で語る／理解することは可能なのだろうか。可能であるかもしれないが，それは紀行文の形式によらないだろう。紀行文はもっと具体的に細部を通して，イメージとしてそのようなテーマを理解させるジャンルである。紀行文の領域についての反省は，奈良の森を歩く文の中で描写されている。

「奈良の森の中は雨が降っている。私は寺院の地所を後にした，今，当てもなくひとりで歩いている。雨が私の傘の上でぱちぱち音を立てている。とても美しい。私が日本に来て以来はじめて私は本当の森の中を歩いている。高い不動の松の木の下に雨から守るために鹿が立っている。突然，森の道の曲がり角に一つの小さなパゴダが現れる。格子は輝く赤で塗られている。いくつかの石のライオンがまわりに立ち，石の灯篭が立っている。雨がそのかすかに湾曲した屋根の上を流れ，明るい音を立てながら石の噴水に滴り落ちる。それがすべてだ。ガイドブックを取り出す必要はない。私は何も必要としていない，屋根の下に座り，雨の音に耳を傾け，満足したように感じている。透明なプラスチックの傘をもった一人の老人がパゴダのそばを通り過ぎ，帽子を取り，お辞儀をし，歩き続ける。私はずっと前に死んだカトリックの義理の父親のことを考えねばならない，彼はどの教会の前でも帽子を取った，結局のところ神がそこに住んでいるのだから。もし霊たちが自由に動けることが本当ならば，神はひょっとしたら幾人かの日本の霊たちと一緒にこの屋根の上に座り私を見下ろしているのだ，と思う。雨滴がリアルな物体にあたる音にも動ずることなく。ひょっとしたらこの水音は消えてしまった人間の声の再響 reinsonation なのだ」（VI. S. 299）。

私は素晴しい文だと思う。彼は世界に対して等身大で向かい合っている。名所旧跡の場合には，それにあらかじめ与えられている概念がそれをありのままに見ることを妨げる。人はなんとなく構える。それを「法隆寺」の描写が示している。

「私はタクシーに乗り，考えられるあらゆる発音，起こりえるすべての方言の形式で〈ほうりゅうじ〉と言う，高く，深く，長く伸ばして，脅かすように，懇願して，農民風に，デ

ンハーグやアムステルダムなどのアクセントで，しかしその老いた運転手のなめされたインディアンの顔にはいかなる認識のショックも示されない。ともかく彼はトヨタを作動させ，私と一緒に都市から出て行く。すぐにもう私たちは狭い田舎道にいる，両側に田んぼ，身をかがめた木々，緑の木々の帯が地平線に通り過ぎていく，寺は見えない，しかし他の点ではすべてはとてもきれいだ。時々私は低い声で〈ほうりゅうじ〉と繰り返す，しかし反応はない。私は，まったく東洋風に自分の内面に集中しようと試みる，しかしそこには誰もいない。寺の姿は私たちが走っているのと同じ速度で遠ざかっていく。1 時間後に私たちは目的地に着く。私は，今私から要求される高利貸しの金額を覚悟する，しかし運転手は私と同様に大きなパニックにあり，私が彼に与える金額の十倍多くのおつりを返す，それは正しくなかった，だから私はその多すぎるところを返そうとする，しかし彼は受けとろうとしない，彼は，私が滑稽なチップを与えると思っているのだ。それから私たちは友人として別れを告げる，そして彼が行ってしまうと私はすべてが閉ざされていることに気付く。私は一人だ。遠くから優しい薄い光が近づいてくる，門は閉ざされている，私は門番の王が，藤の幹のように奇怪な形で，彼の体のまわりに巻きついている，曲がりくねった花環装飾と戦っているのを見る。私は静かな寺院の中庭を見，そしてそれがだから日本で一番古い寺なのだと思う，そして何も感じない，もっとよく言えば，この寺が古いので，何も感じない。恐怖のように私を襲うのはその場所の厳粛さである。私は苔で覆われた石, 夢の八角形のホール（夢殿), 石段, 木の格子をじっと見る，この寺は 739 年に建てられたので，何かを感じたいと思う。しかしその年齢は，私の認識不足のゆえに，眼に見えてこない，それは 1239 年でも 1739 年でもありえるだろう，残っているものはただ完成，形式と構造の眼に見える美である。聖徳太子は私にとってロレンツォ・メディチになることはできない。私はすべてのこれらの物体の外側に留まることができるだけだ」(VI. S. 301f.)。

これは 1977 年 5，6，7 月の最初の日本旅行の「記録」である。ノーテボームは本などから作られていたイメージで十分に武装して日本を訪れるが, それらのイメージは現実と遭遇し, 解体され, 彼はただ過剰な現実の流れに身を委ねる。これはかなり過酷な作業である。イメージは人間の内面で作られるので，イメージの解体は内面の変化をもたらす。そのイメージの解体・生成は「謎」として現れる。そして『モクセイ !』はその「謎」を表そうとしている。しかし「愛の物語」という設定が，必然的に「芸者」(それも富士を背景に持つ）の強力はトポスを呼び起こし，謎そのものが希薄になっている。あるいは，そもそも「謎」― それは必然的に「謎解き」を要請する ― の設定が短編小説というジャンルには適していないのだ。短編小説は異文化理解の文 ― それは紀行文の本質である ― ではない。奈良の森など

の描写の豊かさを思うと，『モクセイ !』はイメージを形成する力が弱いように見える。『モクセイ !』はノーテボームの意図 ― 日本の理解 ― には小説のジャンルは適さないことを証明した作品である。ノーテボームは常に旅をし，旅の記録（紀行文）を書いている。それは彼が紀行文という文学ジャンル，紀行文の文体を作り出そうとしていたことを意味する。さらに，日本を巡る旅と紀行文の文体の生成を見ていく。

3. 『北のアトリエ，パリの北斎』（1980）

本を読むこと，芸術を見ることもノーテボームの旅である。パリの北斎展。彼は，そこを訪れる人々の姿に驚嘆する。

「私の周囲のこの敬虔な関心，ほとんど恭しい，心を奪われている状態は何を意味しているのか」（VIII. S. 595）。「ここで私と一緒に，北斎のところに入場を許可されるために，一つの巡礼行でのように 1 時間も冬の午後の寒さの中で立っていた人たちは，その中にホンダの名が欠けている一つの寺院の中に入る。私はちょうど日本への旅から戻ってきたばかりだ。日本で私は銅版画家 Sjoerd Bakker と一緒に北部の秋の森の中を彷徨した。それはその国を巡る私の二番目の旅であった。何となく私は最初の訪問の時の幸福感を再び感じることができなかった，そして今ここ，北斎のもとで，私はなぜなのか知っていると，思う。／私が日本で探しているものは，空間の中にではなく，もっぱら時間の中に存在している一つの日本である。最初の時人はとても感激しているので，人は大きな醜さの中にも小さな美を見出す決意をしている。人は美学を楽しむ，人は京都や奈良に運ばれる。〈…〉食事も含めてすべてが，一つのスピリチュアルな隠された響きを持っている。そして人が見ようとしないものを人は見ない。最初の時，それは根本的には一つの幻想である。人は一連の文化的なクリシェ，禅から始まり，『源氏物語』までのそれを，取りまとめた。そして人が今，原理的に望むことは，日本の社会がそれらに適合することである」（VIII. S. 596f.）。

この北斎展は，浮世絵というクリシェの確認を意味していたのか。そうではない。ある一定の文化の中からしか生まれないが，しかしその文化を越えて，空間と時間を越えて人間に話しかける芸術の力の確認である。

「その展覧会は，ヴォルテール河岸の，ある小さなギャラリー（ちょうどルーブルの向かい側の）で行われた，そして一瞬のあいだ，そんなにも神秘的な，消えてしまった日本の巨匠の，64 枚の色彩木版画とデッサンはルーヴル全体に立ち向かっているように見えた」（VIII. S. 262）。

「二つの日本」，「謎」としての日本を解くカギは時間の中にある。ノーテボームの日本は

経済大国となった近代日本ではない。「もう一つの日本」，失われた過去の「日本」である。これはもちろん矛盾した態度である。私たちは近代の人間であり，近代は過去を否定することで生まれてきた。そして近代は，ロマン主義のように中世に憧れる。ノーテボームは，膨大なスペインン紀行文を著しているが，そのスペインはヨーロッパ世界から切り離されていたがゆえに生き延びていた中世のスペインである。ノーテボームはもちろんその歴史のアイロニーを知っている。彼は，もう存在しない，あるいはむしろ存在したこともなかった，どこでもない場所を探し求めている。そしてそれは芸術の世界に他ならない。

4.『女護の島の幻影』（1981）― ロンドンの日本展

ノーテボームは，日本についての矛盾したイメージに当惑する。それを彼は「謎」ということばで表すのだが，そもそも一つの文化を統一したイメージで表すことが無理なのである。多数の矛盾するイメージ群があるだけだ。

この展覧会では，「日本人は彼らの古典的な，貴族主義的な芸術を見せようとした」（VIII. S. 608）。一方，「展覧会の主催者は明白に，徳川将軍の世紀に生まれた民衆芸術が，われわれの世紀において日本をそんなに大きくさせた器用さ，専門的な能力，発明の才能の基礎を形成していることを，見せようとした」（VIII. S. 609）。『源氏物語』の貴族文化と浮世絵の民衆文化は統一的美学でもって認識されない。では「見る」とは何か。

「すべての視覚的な享受の際にも，この展覧会は一つの強く教育的な隠された調子を持っている。つまり自分の見ることを思考によって支えようとするものに，ここに少なくともその扱いにくい秘密の一部が解き明かされるのである」（VIII. S. 609）。

ノーテボームは，彼にとって文化の読解（文化理解）とは何かを，絵の解釈の例で表現している。

「線的な遠近法の不足が不安定にし，心理学の不足が疎外し，寓意，神話学，象徴学，文学についての認識の不在が，経験を乏しくさせ，ほとんど盲目にする。〈…〉私は表現を見，それをそのようなものとして楽しむが，それが何を意味しているのか，常に知っているわけではない」（VIII. S. 610）。

逆に言えば，ここで欠けているとされている事柄，神話学などの知識があれば解読可能となる。「東洋の神秘」と日本を祭り上げることは精神の破産である。ノーテボームは，解読しようとする。一方，日本人は好んで日本を神秘化するのである。

ここで彼は初めて「楽茶碗」を見る。

「私がきっと忘れることができないであろうものは，17 世紀初頭からの〈あずま〉と名付

けられた〈楽茶碗〉である。私は自分の資格を混同することに賛成ではない（案出し，描写する者），しかし私の『儀式』を読んだ人は，ひょっとしたら信じようとしないだろう，私は一つの古典的な〈楽茶碗〉を実物で見たことがなかったことを。よろしい，ここにそれが立っていた。私が想像していたような〈私の〉茶椀が。手の届くところに，しかし触ることができない，黒く，白い灰色の雲で輝きながら。その白い灰色の雲は粗い表面の上に漂いながら降りてきて，沼の誘惑的な，眼に見えない深みの中に沈む」（VIII. S. 613）。

ノーテボームは神話，象徴などの知識をできる限り求め，そしてその知識をカッコ入れし，それからただ見る，そして見たままに描写する。それは彼の紀行文のスタイルとなる。

彼はそのロンドンへの船による旅を次のように終えている。

「私は，到着したように，船で旅立つ。嵐で雨が降っている，陸は見えない，それでまるで私たちが無限の中に入っていくように見える。そして生の中ではすべてが一致しているので，私はこの瞬間に，伊原西鶴（1643-93）の小説の終わりを読んでいる」（VIII. S. 614）。

これは『好色一代男』である。（その女護の島への船出の個所でノーテボームはフェリーニを想起している[2)]）。現実の旅は過去への旅に移行する。空間ばかりでなく時間を越えていく旅がノーテボームの旅である。

5. 『鏡の中の謎 ― Ian Buruma の，ワンダーランドの冒険』（1984）

日本の「謎」は, Buruma の日本論の書評の形で論じられる。「真に魅了されている者は又，その魅了するもののために苦しむ用意がある。そしてその中からもしかして快楽を汲み出す」（VIII. S. 310）。それは，Iam Buruma の『微笑みの後ろの日本』（Frankfurt 1985 年）の書評である。

「Buruma が見たところ彼の人生の数年を中断もなくテレビの前で過ごし，勇敢に私たちのためにその沼の中を徒歩した一方で，私は静かに川端を読むことが許される。〈…〉私はただ数回日本にいただけだ, そしてそのいずれの時にも, 出国の際に謎は到着の時よりももっと大きかった。この本はひょっとしたら，私が日本を通してしたもっとも集中的な旅である。〈…〉私は日本に関して私に理解できないものであったすべてに対してついに謎の回答を見出すために，その本を読まなかった。むしろ謎は，秘密の場合には通常そうであるように，この場合，Buruma が人に手渡す鍵によって，もっと大きくなった。ひょっとしたら本質的に〈他者なるもの〉の観念よりももっと神秘的なものは存在していない」（VIII. S. 311f.）。謎とは「他者」のことである。そして他者は「自己」の対立概念である。「自己」は「他者」を措定することによってのみ存在する。「他者」がなければ「自己」もない。それは,「他者」

は「自己」と同様に理解可能であることを含意している。少なくとも，「自己」と同程度には「他者」も思考されることが出来る。

ノーテボームは Buruma の本の中に「恩」の概念を見る。「Schuld という言葉は経済的な借金と同様に道徳的な罪を意味することが可能である。どの日本人も誕生の時にすでに一つの Schuld を持っている」（VIII. S. 312.）。「この Schuld が〈恩〉である。祖先に対しての〈恩〉。道徳的な罪の西洋的な理念を知らない日本人は普遍的な原理との一致に於いてではなく，社会的な態度の規則に従って振る舞う。この社会的な規則を踏み越えるものは，恥を感じる」（VIII. S. 313）。

「義理，甘えのような一連の概念にとって，簡潔な翻訳は存在しない，ただ書き換えがあるだけだ。しかしこの書き換えが可能である事実は，概念が理解できるものにされることが可能であること，それでもって本質的に他者なるものの観念がより少なく全体的になることを意味している。本質的に異なった，人はそう言うことができるのか」（VIII. S. 313）。

「他者」と「自己」は相補的な概念である。「異なっている」と措定されることは，すでに理解可能性を含んでいる。「そして私たちに異質と思われるもののもとに，一つの共通の〈人間的条件〉があり，それが私たちがこれらの小説の主人公たちと自己同一化することを可能にするということを把握するために，人はただ川端や，大江健三郎あるいはもっと以前の西鶴，あるいは紫式部を読むだけで良い。同じであり，同じでない，と人は哲学者と一緒に結論することができるだろう。そして Buruma には，再度逆説的に，まさに彼がその非-同をそんなに詳細に記録することによって，私たちに〈それでも同じ〉の理念をより深く理解させることが成功している」（VIII. S. 313f.）。

文化人類学が他者に対してしたように，ノーテボームは理解しようとする。神秘化するのではなく，コミュニケーションを試みる。自然科学的な方法でないとすれば，それは純粋な描写，記録のスタイルとなるだろう。そして再び「紀行文」のスタイルに戻る。

6. 『随筆』（1986-1987）― 紀行文の文体

ノーテボームは『随筆』を次のように始める。「田舎や古いものを訪れ，まだ幻像のように私の記憶の中をさまよっているいくつかのものを再び見たい。〈…〉庭園を見たい。庭園と風景を。私は放浪したい。そして日本語とドイツ語で〈枕の本 Kopfkissenbuch〉と呼ばれている本を読みたい。『枕草子』。〈…〉私は私の随筆を書く」（VI. S. 307）。

この「紀行文」は「随筆」を書く試みである。旅が「随筆」のスタイルの発見を可能にし，そして旅の文体，「随筆」を可能にした。『枕草子』について考え，日本の風物を見，異人と

して文化を理解しようとする志向，それらが「随筆」の文体を産み出す。そしてその試みがここに記されていて, それが即「随筆」となる。エッセーとは「試すこと」である。エッセーの形式を反復，反省することで，新しい形式が生まれる。これは日本を舞台にした，「文学」を巡る方法論の物語である。文学の方法の探求が，そのまま記述される。それが「随筆」である。

最初は，日本の近代への違和感の表現である。それは「随筆」的世界のネガである。

「ひょっとしたら彼らは一人の女を手仕事で組み立てたのだ，その女は話すことができ，テープで日本中のためにメッセージを話すのである。マイクロチップの唇と透明なセルロイドの血管をもった，柔らかいアルミニウムの女。その声は滝とペパーミントの響きがする，それは呪うことも年を取ることもできない声だ」（VI. S. 308）。私は現代日本のアニメの少女たちの姿を予見している文のように見える。「私たちは皇居のそばを通り過ぎていく。〈…〉清少納言は千年後もまだ天皇が存在していることを知れば喜ぶだろう，たとえ彼がもう神でなくとも」（VI. S. 308）。はたして日本人の誰かこんな想像をするだろうか。ノーテボームの随筆の文体の反省は，清少納言が今生きていれば現代日本をどう見るだろうかを意味している。その時，彼女はノーテボームと同程度に異人であるだろう，そして日本という謎について考えこむだろう，ノーテボームがしているように。

20 年前から日本にいる NRC ／ Handelblad の特派員の住宅で彼は『枕草子』の冒頭を読む。「何も古臭くなっていない。私はそれについて考える十分の機会を持つ。畳の上に横になりながら。寒い，それを私は感じる。障子の後ろに私は庭の木々の影を見る。そのように深く横になっているものは，毎朝世界を下から構築しなければならない，それは有利な点である。日本人にとって自然は霊化されている，とりわけ言葉通りに。木々，丘，小川の中に神々，霊，魂が住んでいる。〈…〉私たちは自然を征服されなければならない敵として取り扱った，その自然 = 敵は自分の従属を閲兵に現れた連隊のように，完全な非常に見晴らしの良いシンメトリーの中に証明している。その対称性は屋外階段から最もよく知覚され得るのである」（VI. S. 310f.）。「宮廷の庭の中の単純なクローバーが，まったく単独で季節の変化を表現している。私たちが庭を〈一杯にする〉一方で，日本人はそれをもっと空っぽにし，物の本質が目に見えるようになる。芸術として空っぽにすること」（VI. S. 312）。

「随筆」は現代流に言えば「意識の流れ」のスタイルである。思索，体験，感情が流れるがままに記述される。

松坂屋デパートへ行き，随筆のためにペンと紙を買う。

「雑踏。どこも空っぽではない，至るところ一杯だ，道路，地下鉄，デパート，至るところで私は人間に，そしてまた彼らの言語に囲まれる。しかしそれは容易に説明されないにも

かかわらず，ここでは異なっている。それは私が翻訳で読んだすべてのものを通して来る，清少納言，芭蕉，川端，谷崎，三島を。それは合理的には解明されない，しかし読まれたものは私に，私は私の周囲の人間たちが話していることを知っているという感情を伝える」(VI. S. 314)。ここで，ノーテボームは鈴木大拙を引用する。「われわれがしなければならないことは，日本語から一つの宗教を作り出すことである」(VI. S. 314)。ノーテボームがあくまで理解の可能性を信じているのと比べると（もちろん時代が違うのだが）鈴木の言葉には韜晦 Mystification が感じられる。日本人は明治期，西洋の圧倒的な「物質文明」を前にして，「日本」を神秘化することによって抵抗したのである。

「デパート自体は 6 つのハロッズと 5 つの Boomingdale ほど大きい，その豪華さ，商品の提供は圧倒的である。まさにここで人は，この国の巨大な豊かさに対する感情を得る。〈…〉それは欲望される価値のあるオブジェの宇宙である」(VI. S. 315)。そこで彼は，「探しているものを見つける。私の随筆のためのとても美しい雑記帳。私はすぐに出発できる。すべてにおいて目に付くのは，包装，極端に洗練された呈示の仕方である。この国では余りに頻繁に美が小さなものの中にある，すべては宝物となる，細い指がそこから芸術をつくりだす，人は，人が入ってきたときよりも，もっと審美的になって店を離れる」(VI. S. 315f.)。

最後は，歌舞伎の稽古の見学である。

「思い出は奇妙な仕方で機能する，ときどきそれは個別のものに掛かっている。私が東京の歌舞伎座にはじめて行った時，通用門の前に閉ざされた車が止まっている，一人の人間の運搬に適した車。そのイメージは欺き，揺れる。というのは私はその間に，それが輿であったか二輪車であったか，分からないからだ。私が思い出すのは，この一人乗りの馬車 carrozza の閉ざされていることである，それはほとんど衣服のように人の周りで閉ざされなければならなかった，それはとても狭かったのである。〈…〉後に私は清少納言でそのような乗り物でのドライブについてのさまざまな節を読んだ，人が森の道に沿っていくと，ときどき枝が鞭のように打ってくる，その枝をつかもうとするが，いつも無駄である，あるいはそのような枝の匂いがいつまでも掛かったままである，あるいは通行人としてそのような馬車がそばを通り過ぎるのを見ると，円盤状のものの幻像以上に何も認識されない，あるいは稀なことだが，その中の未知の人の，香水のほのかな匂いが鼻の中に吹いてくるなど」(VI. S. 316f.)。

ノーテボームの文では現在と過去が交錯する。現実とフィクションが交錯する。そしてそれが「随筆」のスタイルなのである。

7.『寒い山』(1987)— 寒山詩

随筆を読む，そしてそれを「随筆」の形式で記す。「随筆」を「随筆」というジャンルを試みることによって考える。そして生まれた文体が「紀行文」である。紀行文は移動と停止から構成される。旅行者は「異人 Stranger」となる, 見知らぬ土地でその土地の人たちにとって異人であり，また離れてきた故郷から見ての「異人」となる。だから「迷う」こと，方向を失うことは，旅人・異人にとって本質的な様態である。ノーテボームの紀行文はその「異人性」の様々な様態を具体的に記述している。

木曾の妻籠への旅を「随筆」の形式で書くとは，具体的に，手帖，机や椅子のない空間，その書く行為の空間的な形式である「書」を記述することである。日本で書くことをかつて規定していた条件が考察され，実践されることによって，「随筆」形式が反省される。そして「随筆」の形式は，「寒山詩」，禅のテーマと同期する。「書」について。「付加価値，何かの美的眺め，その下で記されたものは記す行為によって意義とともに付加的にさらに何かを意味し，主張し，呼び起こす，書，書道 Kalligraphie」(VI. S. 322)。表音文字ではなく，表意文字，さらにグラフィックなイメージを持つ文字の力。

妻籠の部屋。「部屋の中に椅子がない，寒い，私は膝の中で私のハイグレードノートブックの中に書いている。その冊子は明るい茶色で，ペーパーバックに似ている。それは線を提示しているが，私はそこに何を書いたらいいのか知らない。だから何も書かない。その雑記帳は内部に別の線を持っている，それは，書なしに書かねばならない人，今椅子も机も持っていないので，いくらか滑稽な眺めを呈している人にとって，軽蔑すべき補助手段である。しかし私を見ているものはいない。線は言葉を欲する，たとえこのまだ存在していない言葉の書き手がそのために深く身を屈めなければならないにしても。私は過ぎ去った日をじっと考える」(VI. S. 322)。

そうして妻籠の民宿での出来事が記述される。「異人」を迎える民宿の老夫婦の姿には，もう最初の旅の際の東京での「異人」性のよそよそしさはない。「異人」であることに変わりないが，異なった文化の人間と等身大で，互いに向かい合っている。構えがない。

「民宿の主人が現れ，お辞儀をし，そして突然無から現れたように，一人のお辞儀をする女が彼の隣に立っている。彼らは笑い，お辞儀をし，私はお辞儀をし，笑う，〈オランダ〉と彼らは言う，そうである。私は上に導かれる，女は私に靴を床板のところで脱ぐように指示する，数組のとても大きなスリッパがすでに準備されている，オランダからの人間は信じられないほど大きいのだ」(VI. S. 323)。

散歩。それは「迷う」技術である。

「どのようにそれが起こるかを知るまえに，私は迷っていた，しかしそれはなんでもない，今目標を持たないことは，もっと良かった。雨は低く私の小さすぎる傘にかちかちと鳴り落ちる。昔の絵から私はそれを知っている，〈唐傘〉，雨の中，油紙の古風な傘の下で身をかがめた男たち，ビルマの仏教の僧が太陽に対して持つものに似たそれ。その硬い羊皮紙のような紙の上で雨はなんと異なって聞こえるのだろうか。雨は太鼓のように鳴り，鞭打ち，私は仲間を持つだろう。道はゆっくりとしたカーヴで山の上に続いている。大抵の木々はまだ葉がない，雨のヴェールの中でたいそうきゃしゃで細い」（VI. S. 225）。そして，彼が昨日はじめて東京の国立博物館で見た長谷川等伯の屏風が想起される。

廃屋に風鈴がある。

「風がそれに触れると，それは動く。いや，私はここで，後に，私がそれを書き上げている今，この鐘の音を模倣する必要はない。私はこの瞬間のために一つの言葉を探している，そして提供された言葉は，poignancy〈痛切さ〉であった，まるですべてが，その旅行全体がこの瞬間の中に凝縮されようとしているかのように。人が不動のまま立ち止まり，それが永遠に続いて欲しいと願うほどに。その鐘は〈風鈴〉と言う，そして突然私は私がそれを最後にどこで聞いたのか知る。ニューメキシコの砂漠でワゴンの中に暮らしている画家のところで。Bruce Lowney[3)]。彼はそこで一人で生きており，彼がそう言うように，彼の風鈴を持っている，静寂を強調するために。〈痛切さ〉，もののあわれ，物事のパトス」（VI. S. 327）。ノーテボームは，ニューメキシコの風鈴を持ってくることで，日本的情緒のステレオタイプを無効にしている。彼はものごとをいわば「永遠の相のもとで」考え，地球上の人類の普遍的な条件下で見るので，差異を絶対化しない。そのような視点のもとでのみ初めて，文化の多元性を語ることができるのだ。

ノーテボームは俳句の試みをしている。

「山の中の見捨てられた家 —
その葦を切ったのが私であるならば，
私はそこに住んでいる男なのか
そしてすぐに夜が答える，というのはノスリが家の後ろの木の中から飛び上がるからだ。
梢が翼を伸ばし，
飛び去る —
馬篭の丘の中のノスリ」（VI. S. 328）。

自然の観察は俳句のエッセンスである。ノーテボームの観察は山の中で出会った日本人の登山者にも向けられる。

「暗い糸杉の前の黄色のプラスチックの斑点。彼らの装備は模範的だ，彼らは獰猛に見える，

登山靴，杖，プラスチックの中の地図，短いズボン，リュック。日本人はすべてをプロフェッショナルにする，そしてハイキングにはハイキングの装備が属している。彼らは私のまったく普通な外観に驚き，しかし立ち止まり，彼らは妻籠への途中であると言う，私は馬篭に向かっているのか」（VI. S. 332）。

「中津川，人がその存在を予感もしなかった場所において人はもっとも幸福である。それは私の目的地ではなかった，にもかかわらず私はここにいる。駅前広場で二人のタクシー運転手がドラム缶の中に火を起こしている，交通信号機が緑色の時，ツグミのように笛を吹き，赤色の際にカッコーと叫ぶ。すべての側面にぼやけた山々，長い青いスカートの女生徒たち。〈…〉それから私は突然，一つの不条理を見る，それがあるがままに，デンハーグの Geemente 博物館のガラスケースの中にあることもできるであろう，二つのお菓子屋のショーウィンドー。それは人がスィートでもって行うことのできるものの神格化であるに違いない。溶ける芸術の移ろいやすい博物館，中津川の〈しょうげつどう〉，ここのために一つのカタログをまとめ上げなければならない者は，ここにするべきことを持っている。人はこの物体をどう名づけるのか。モノクローム，あるいは大理石模様をつけられたオブジェ，あるいは突然良きものに向きを変えた恐ろしい病気，人はそれの何も食べることができるとは思わないだろう，その完全性がそれを禁じるのである」（VI. 334f.）。

そして夜，彼は寒山詩から五篇を翻訳する。寒山は中国唐の時代に天文山に隠遁した風狂の士である。

「彼らは私に寒い山への道を尋ねる／寒い山，そこにはどの道も続いていない／夏に氷は解けないだろう／昇る太陽は数千の霧の中にかすむ／どのように私はそこに行ったのか／私の心は君のそれと同じではない／もし君の心が私の心のようであるならば／君はそれを理解するだろうが，そのときには君はすでにここにいるだろう」。

「君が寒い山へ登っていくならば／寒い山への跡はもっと遠くに，遠くに続く／アザミと岩によってふさがれた，長い峡谷／幅の広い川の流れ，霧のヴェールをかけられた草／苔は，雨が降らなかったのに，ぬれている／松は歌う，しかし風はない／誰が世界との結びつきを断ち切ることができるのか／そして白い雲の間の私のところに座るのか」。

「寒い山はひとつの家／梁も壁もない／左右の六つの扉は開かれている／床は青い空／部屋はみんな空っぽで，形がない／東の壁は西の壁に接し／真ん中にはなにもない」

「私が寒い山の上に隠れるならば／山の植物とイチゴで生きるならば／一生の間，どうして君は心配するのか／誰もが自分の運命に最後まで従うのだ／日と月は水のように滑り去る／時はただ，火打石から打たれて出た一つの火花／君はただ回転する世界の中を歩め／私はここで幸福に一人，石の上に座っている」（VI. S. 316）

「初めから寒い山は私の住居だった／丘の間をさまよいながら，やかましい音から遠くはなれて／離れよ，そうすれば数千のものは跡を残さない／さあ行け，そうすれば万象は無限に多くの星のそばを流れていく／一つのものもない，しかし万象は私の前にある／今私は仏性の真珠を知っている／そしてそれの使い方を知っている，際限なく完成され，丸い／ゼロのように」(VI. S. 317)。

「寒山詩」は禅の表現とされている。私はこれを，最初の日本旅行の際にノーテボームが竜安寺を訪れたとき以来の「禅」― 宗教としてではなく，そこに現れた精神の日本的な形の意味で ― に対する一つの回答を見る。それはしかし，「悟り」という曖昧な用語で語られる「超越的瞑想」のことではなく，この『寒い山』の「随筆」が暗示しているような，世界をあるがままに，純粋に見る心的態度のことである。「寒山詩」は紀行文＝随筆を構成するスタイルである。

『儀式』の中でフィリップの部屋は「寒山」を想起させた。フィリップの父，アルノルトはロッキー山脈の山小屋で冬の間，火事の見張りの仕事をしていた。ノーテボームが訪れた修道院も過酷な自然の中にある。瞑想を旨とする宗教精神は「寒山」を求めるのだろう。だがノーテボームは俗世界からの超越を，自分の心の安寧を求めるのではない。ノーテボームの最初に発表された文は，ハンガリー動乱のルポルタージュである（『意図的な殺人』1956[4)]）。自由を求める市民の「動乱」は，ソ連の侵攻によって無残に押しつぶされた。西側も何の行動も起こさなかった。市民の声を伝えようとする彼の言葉は役にたたなかった。その無力感はトラウマのようにノーテボームの紀行文に付き添っている。そしてそれは，現実から目をそらさない，現実をありのままに描くという倫理的な要請として常に彼にある。彼は時代や世界を縦横に旅するが，その時に出会う文明の野蛮な姿から目を離さない。『儀式』の中でイニの友人の「作家」が言うように，「私の修道院は世界です」(II. S. 506)。世界に，現実に開かれている修道院。文の終わりに置かれた寒山詩は，予定調和的にノーテボームが「悟り」に達したかのような感を起こさせるが，そこにはアイロニーがある。「寒い」山なのである。

馬篭の山の中の風鈴が，ニューメキシコの砂漠の風景の中のそれにつながっていくように，ノーテボームを読んでいると突然予期せぬ世界が開かれる。この稿に取りかかる前だったが，ゲーリー・スナイダーの『リップラップと寒山詩』（原成吉訳，思潮社 2011 年）が出版された[5)]。スナイダーは，300 篇余りの寒山詩から 24 篇を選び翻訳した。スナイダーもカルフォルニアの山の中に住んでいる（いわゆる「ビート禅」の系譜）。ノーテボームの訳した 5 篇をスナイダーも訳しているが，ノーテボームはスナイダーに言及していない。私はノーテボームの「寒山詩」をドイツ語訳で読んだ。そしてスナイダーの英訳とその日本語訳を読み，岩波文庫版『寒山詩』のオリジナルと日本語の書き下し文を読んだ。ノーテボームが『枕草子』

のドイツ語訳を読み，少しも古くないと感じたように，それらの「寒山詩」はどの訳でも強烈なイメージを放っている。そこでは日本や中国文学，あるいはその言語的媒体とは異なった次元の「文学」が問題となっている。世界の様々な文学の共通分母的なものではなく，すべてを貫き,同時に越えているような「文学」が。この「寒山詩」はその「文学」のメタファーとしてある。

8. 『赤いプラムの花，ネギの新芽の金 — ベルギーの日本展覧会』(1989)

「ここで一つの国がその古代から今日までの自分をプレゼンテーションしようとしている。そしてここで見られるものは，ただ崇高として表わされることができる，それは，ある国の，精神化された，美的な，神秘的な，神話的な顔である。人がここで見る日本は，神聖である。そして神聖な国はもう存在していない。神聖さはそれでもって今日人がそんなに進むことはない，そのような言葉である。それは儀式的なあるいは瞑想的な連想によって神聖なもののアウラを呼び起こす。そのための一つの例は，展示〈たかくら〉，天皇の衣服である」(VIII. S. 438f.)。

この「神聖さ」は，「竜安寺」がそうであるように，日本人が好んで抱き，そして提示するイメージである。ノーテボームはそのような日本人の自己イメージを相対化する。彼はそのイメージを好んでいるが，しかし絶対的なものと考えない。美は，だから文化的に相対的なテクニックの観点で見られる。例えば「見立て」の手法。

「春信の版画は1765年のものだが，高倉天皇（1169-1180）の詩の現代的な改訂である。その天皇の詩は，唐の時代のBai Juri（722-849）の有名な詩を踏まえている。〈…〉一人の芸術家が600年前に生きていた天皇を思い出している，その天皇は3世紀前に生まれた詩を思い出している」(VIII. S. 442f.)。

「ただすべてがここでは二義的，あるいは三重の意味をもっているという警告。そしてそれはまなざしを鋭くし，謎めいた性格を高める。そこには人が見るより以上のものがある，この〈より多く〉の一部はおそらく決して明らかにされないだろう，という推測は私の興奮に貢献している」(VIII. S. 442)。

これはクリステヴァの「間テクスト性」が示している事情である。『源氏物語』が『万葉集』や『古今和歌集』を引用，参照指示することで書かれたように，「つまり紫式部は女性的なプルーストであったに違いない」(VIII. S. 443)。

9. 『終わりのない円』（1992）― 世界文学としての『源氏物語』

ノーテボームの小説の一つの特徴はある状況の中に人物を投げこみ，そして事件・物語が起こるのを記述することであった。「紀行文」のスタイルは，自分を異文化の中に投げこむ形で，その文化を記述する試みである。「紀行文」のモデルとして「随筆」があると論じてきた。それに，今まで書かれたもの，今まで見られたもの，浮世絵，庭園，風景が合流する。世界は「作品」となる。

次にノーテボームは『源氏物語』，小説という形式を「随筆」の形で考える。

『終わりのない円 endlose Kreise』は，「旅」の形式で始められる。

「遠い旅行においては拒みがたく，つねに第二の到着がある，つまり人が本当に到着したときの，それだ。第一の本来の到着は，すでにもう数に入らない，それはまだ，人が今もう自分であると主張しない者，人があの別の地球の部分に残しておきたいと思った者，飛行機やホテルへのタクシーの中で人にぶら下がっていた者，不快なことに人から退こうとしない者に属している。一方で人はあの夢見られた瞬間への途上にあった，旅行者が彼の憧れのイメージと一つになる瞬間への途上にあった。そのイメージのために彼は旅に赴いたのだ。これがどのようなイメージであるかは，前もって正確には言われない。しかしその時が来れば，人はそれを疑いもなく認識する，これがそれだ，と」（VI. S. 338）。

それは京都，嵐山である。

「これがそれだ。川，少女，漁師，橋，向こう岸の日本の丘。すでにそれで始まる。なぜ人は日本の丘を日本の丘と名づけるのか。それはフィクションではないか。ひょっとしたら。しかし私はそれを〈かけもの〉や屏風の上の表現から再認識する，それらは何か突然なもの自体を持っている，まるでそれらが，人がそれらを見る前に生まれたばかりであるかのように。平らな平面の上の奇妙な高い湾曲した盛り上がり，数百の赤や緑の調子を持ったさまざまな木で覆われて。そのような丘は他のどこにもない」（VI. S. 338）。

彼が嵐山を訪れたのは偶然である。

「嵐山，この言葉は気に入った，（旅行者は偶然を信じる），私はその言葉をなぞって発話し，京阪三条からそこへ行くバスを見つけた。〈…〉しかし私が橋の上に最初の一歩をしたとき，何か奇妙なことが起こった。私は自分を多数化し，もう一人で歩いてはいなかった，私の周りに突然群集が形成され，それは膨れ上がり，私に注意を払うことなく，私を真ん中に受け入れ，火のところに押していった。〈…〉しかし今，私は雲の中の一つの雨粒となった，一つの愉快な，おしゃべりし，縮小し再び膨張する雲の中の雨滴に。〈…〉私は一人の少女に，ここでは何が起こっているのか尋ねた。彼女はくすくす笑い，顔を手で隠した。それから彼

女は白装束の男たちと川を示し，〈first fish〉と言った。この瞬間，私が北斎や広重の絵で見たような，葦の尖った帽子を被った一人の老いた漁師が一匹の魚の閃光を水の中から振り上げた」(VI. S. 339f.)。

鮎漁の解禁の儀式に彼は遭遇した。最初の旅の際に彼に強い奇異の感を与えた群衆，その中に彼は受け入れられている。外人であり，彼自身であることをやめることなく。この経験の後で，『源氏物語』が論じられる。「日本」文学ではなく，「文学」そのものとして。

「私の日本は本たちの日本である。私が，もう一度読むためにこの旅に持ってきた本は二冊ある。一つは清少納言の『枕草子』，もう一つは紫式部の『源氏物語』。私たちが今日〈典型的に日本的な〉と見なしている多くのものが，当時まだ存在していなかった，禅も侍も，芸者も刺身も，俳句も歌舞伎もなかった。宮廷生活は平安文化の頂点において，儀式の，一つの無限に洗練された，当惑させる礼儀作法によって統治された，季節の変化によって規定された継起であった。位階と位置の階層的な編み物であった〈…〉衣服や登場における，それらに相応するニュアンスと一緒になって。読むときでさえも人は，隠された記号，秘密の象徴学で一杯の，一つの漂っている惑星の中の草の上を歩いているという感情を持つ。ニュアンス，別名と照合の中のほのめかし。民衆は存在していない。〈…〉その天皇の宮廷は宇宙である，その外部での生は価値がない。廷臣たちは詩の形式で互いに伝達する，どの花，どの身振りも一定の意味を持っている，〈…〉しかし翻訳と年数の二重の層にもかかわらず，人はあの過ぎ去った世界の中に引き込まれる，生の魅力の中に閉じ込められる。その存在を人が11世紀の過ぎ去った現実の中にほとんど可能と見なさなかった生の魅力の中に。一つの本のページの上以外には，そこへの帰還が可能ではない，時間の中の一つの島」(VI. S. 342f.)。

それ自体として完結した，言語の力だけで成立する文学世界。それはモダニズムの芸術観念である。フローベールは言う。「私に美しく思われ，私がぜひ書きたい作品は，何も主題のない書物，外的な支えが何もなくて文体の内面的な力だけで，一人立ちしている作品である」[6)]。

ノーテボームは『源氏物語』を「世界文学」の視点から読む。同時代の中世ヨーロッパの物語と比較する。

「人が『源氏物語』で出会う人間たち，情熱，不安，嫉妬を持っている，固有の種の存在たち — 彼らは，私たちの中世の英雄の歌のエンブレム的な人物よりももっと認識可能である。私たちの中世の英雄歌においては彼らの一次元的な魂の外的な名札以上に見ることはない。決して魂の謎の動きを見ることはない。〈…〉しかし紀元1000年のときの一人の女性が，今日私の心に触れ，感動させる何かを書くならば，それは，著者，彼女の人物たちと読者の

間に一つの心理的な緊張が生まれ，その緊張が，彼らを分け隔てている千年をないものにしてしまうことから来ている。〈…〉ただ芸術だけがそれを引き起こすことができる。そしてここでは人は神秘的な仕方で謎に触れている。つまりどのように人はフィクションの助けで現実の中から一つのフィクションを作り出すのか。〈…〉紫式部はプルーストのように彼女のフィクションのために彼女を囲んでいる現実を利用する。つまり10世紀の平安の宮廷生活。それによって彼女は，千年後に生きている私たちのために，とても考えられないものとなってしまったので，それ自体がフィクションのように見える，そのような現実を保管するのである。私には，この二つの現実が，互いのことを知ることなく，並んで存在していたという考えはいつも奇妙に，そして同時に素晴らしく思われた。つまり，黙示論的な終末ファンタジーのヨーロッパ，闇と破局の時代，粗野で危険な。それと平安期の，世界に背を向けた，ほとんど日常の現実と結びついていない宮廷，それはただ自分自身のために存在しているように見える。極端なまでにコード化された世界で，その中では，一つの役割を演じる誰もが古典の中国や日本のポエジーの汲みつくせない宝を所有していた。人が常に手元に持っていた，暗記しており，いつでも投入できた兵器庫。それは極端な洗練に導いたばかりでなく，一つの直接的でない表現方法に導いた。その表現方法は非現実の感情を倍化し，その結果，現代の読者は彼の無知と卑俗な性急さの中でときどき糸を完全に失ってしまう。それは根本的に源氏の姿においてもっとも明瞭になる。彼は無数の性愛の冒険ととても異なった女性との情事を体験する，そして実際には，7か8世紀の短い詩の交換によって伴われ，高められ，ヴェールをかけられていないであろうような，これらの接近，誘惑，征服，別れの場面の一つも存在していない。感情のコード化はその際にとても強く，一者は常に他者が何を言っているのか知っている。いくつかの言葉，一つのイメージ，場所の記述で十分である，引用が叙述あるいは説明に取って代わる，それは願望を表現している，怒り，苦い思い，無力，悲哀，好色を ― そしてそれはヴェールであると同時に遮蔽物であり，人はゆっくりとした音のないバレエがここで上演されているという印象を持つ。話されないならば，手紙が行き来する，そしてここでもコード化が規定している，どのような紙か，どのような色と色のニュアンスか，どのような引用で，どのように返事されるか，どのような香りか（ああ，男においても）。そのすべては今日の読者に独自の結果を持つことができる。〈…〉二つの古典的なアンソロジー，8世紀からの『万葉集』と10世紀からの111の詩を掲載している『古今集』である。ここに私たちにとって解釈不能な参照指示，迷路的な暗示，層と意味の位置の移動のための例がある」（VI. S. 343ff.）。

千年前の，それも異なった文明／文化の一つの文学作品がどうして人の心を動かすのか，その芸術の力に対する賛嘆の声である。

後に，ノーテボームは『墓 ― 詩人や思想家たちの墓』[7] を出した。それは，写真家である夫人の写真を伴った世界の作家，詩人，思想家の墓の訪問記であるが，それらの作家たちの私的文学論でもある。世界のすべての大陸に及ぶその旅の距離，時間を考えるだけでも，この上なく贅沢な本である。そこで，彼は日本では川端と紫式部の墓を訪れている。紫式部の場合，ノーテボームは，二度の西国巡礼の際に石山寺を訪問した。

「西国巡礼の一つは，749年に瀬田川の上流の高台に建てられた石山寺である。そこで紫式部は『源氏物語』の大部分を著した。私は秋が盛りである日に来る。〈…〉本堂の隣の一つの壁の空洞の中で彼女は日本式に床に座り，書いている。彼女は私に背中を向けているが，私が側面から見ることができる彼女の顔は，白く化粧されている。〈…〉彼女は細い筆を手にしており，ひざまずいて書いている。バルザックは座った，ナボコフは立った，プルーストは横たわった，紫式部はひざまずいた，一度，誰かがこの様々な書く姿勢の様式的な結果を探求しなければならないだろう。何年も前に私は彼女の墓を訪れた。〈…〉しかし私がそこに見出したものは，彼女になんらかの関係のあるものとははるかに遠く離れたものだった ― 私は，それが，伝統を意識した国がそのもっとも偉大な女性作家を埋葬した場所であることを殆ど信じることができない。しかし墓石はそこに立っている，そしてこの日々からの私の覚え書きは十分に明瞭である。〈剥がれ落ちた人工の塗料の工場空間の間に縦長の苔で覆われた丘の下に，小さな青紫色の葉，小さな葉をもった4本の切り詰められた木々，二個の石の花瓶，灰色の砂利，数本の花，Ono Tokamuraの同席，記念碑の隣に短く切りこまれたセイヨウキョウチクトウ，私は三本のろうそくをつけるが，それはすぐに消える，工場のすりガラスの後ろにボール紙〉。人は，第一側室，第三皇女，左大臣，中間の大尉，第一位の侍従を死者の王国から呼び戻したい，彼らがこの不名誉が起こらなかったことにするように」（IX. S. 336ff.）。

ノーテボームが旅でよく訪れるところは，墓地，植物園と動物園である。それは自然と過去のテクストである。それらをノーテボームは本のように「読む」。それは過去の神話，象徴体系を再構成する作業である。彼は天皇の服の色について考える。

「私はそのすべてを知りたいのか。私は記号論者ではなかったか。永遠に失われてしまった時代の狂気のより高い形式が私に何の関係があろうか。私は私の下を流れる川を見る，幾人かの人が乗っている細い船を見る，船首に立ち，船を操っている，長い竿を持った一人の男。それはここだった。ここにかつてその世界があった，丘，山，川，それらは消えなかった，ただ人間だけがもう存在しない。彼らはそのコードを一緒に持っていき，ただ言葉の中にだけ残した。そして私がその言葉を読むと，この遊戯の規則の無限に多義的な体系，それがかつて実際に存在したがゆえに，理解されようとするこれらの記号のちらちらと光る様子に対

して抗しがたい肉欲的な好奇心を感じる。運動と傾向，意味，色彩，ニュアンス，声，ここで把握可能で，同時に時間の中で完全に近づくことのできない，私たちが決して着地できないであろう一つの惑星，しかし二つの本がこのイメージを伝えている惑星。すでに千年の途上にある，女たちでもって名付けられた宇宙」（VI. S. 349）。

この文はむしろエッセーの形式 ― 認識を目的とする文体 ― に近い。だが清少納言の知的な観察力が論じられた後なので，ここでもまた「随筆」の形式に近づく。あるいは，「随筆」はそれ自体，融通無碍な形式なのである。

10. 『静寂の中への旅』（1885）― 西国巡礼

ノーテボームはカトリックの寄宿舎学校で少年期を過ごした。彼はしかしキリスト教徒にはならなかった。『儀式』の中のイニは，宗教の儀式を記憶した。儀式は信仰自体ではなく，信仰の形式である。ノーテボームは信仰を見出さなかったが，信仰の形式の美を見出した。それは広大なスペイン紀行文の中では，ロマネスク様式の教会の訪問に示されている。それはかつての信仰に由来する美の探求であるが，しかしその信仰の形式は，信仰の心をも生み出させる，あるいは少なくとも志向させる。信仰の形の美をめぐる旅は，信仰を求める旅に似てくる。つまり巡礼に。ノーテボームの広大な旅の記録は，その意味で巡礼の旅である。それは日本の旅でも同様である。ノーテボームの「神」はキリスト教に限定されない。すでに私たちは，さまざまな形で日本における信仰の形をノーテボームが触れたのを見てきた。竜安寺の描写はしかし観念的なものだった。その観念性は，疎遠で，事柄に触れていないように見える。ノーテボームは何度か旅をすることで，信仰の形への「巡礼」を純化させてきた。そしてそれは西国巡礼の旅にもっとも明白に表現されている。

近代が過去への旅をもたらすように，巡礼は必然的に世俗を対立として持つ。

「それより世俗的になることはない。天上的なものへ行く途上で私はKinki Area Rail Systemの中にからまってしまった。それは大阪と京都の周りの制御しがたい鉄道線路の網を持った，印刷された両面である。その網は，まるで泥酔したクモ，自分の仕事を終えることがなかったクモによって編まれたかのように見える」（VI. S. 358）。

しかしこの混沌とした鉄道網は，日常／世俗から離脱するための「儀式」となる。旅人は日常性から離脱する。迷わねばならない。

「幾つかの旅のひそかな無意識の目標は，旅行者を完全な混乱に墜落させること，彼を彼の出身からとても疎外させ，まるでそれ自身の現在の存在が人がただ苦労して戻る道を見出すであろう幻像的な事柄になるかのように見えるほどにすることにある。そのときはじめて

人は実際に離れていったのである，人がひょっとしたら別人になってしまったほどに，どこか別のところに」(VI. S. 358)。

その離脱はしかし何か口実を，きっかけを必要とする。あるいは離脱の思いがそのようなきっかけを見出すのである。それは「巡礼」の理論である。

彼はチューリヒの旅行書書店で日本の巡礼路についての本を見つけた。そして彼は1933年に生まれたので,「三十三寺院巡礼をすることを決心した，奇跡の巡礼行，西国観音ルート」(VI. S. 359)。

「なぜ私は巡礼をしたか。私は観音を知らなかった。〈…〉自分の制限の中に行くように指示されなければならない肉体に対する永遠の不信を私は告解の椅子から知っていた。そして私が読んだ奴隷化と禁欲の優越した諸形式，それに属しているやせこけた男たちの図像は私を魅了しなかった。しかし，見たところ何も欠けてはいない肉体，しかしまるで彼らが液体状の骨格を意のままにできるかのように，見たところ支配できた肉体のブッダたち，そしてその肉体の上に，世界から遠ざけられた，完全な静寂の中にあるこの顔，すべてを見，考えた，しかし今，永遠自体のようにすべての上を漂っている顔」(VI. S. 360)。

ノーテボームは宗教を図像的，感覚的に評価している。肉体，肉体的な生を否定し，殉教や征服の血なまぐさい教義を持つキリスト教への反感をノーテボームは何度も述べている。しかし，彼はまた，キリスト教の，苛酷な戒律を持つ修道院を何度も訪れ，簡素で禁欲的なロマネスク様式を特に好んでいる。いずれにせよ彼は精神が現代において取ることのできる形を求めている。

「それは1998年の4月だった。〈…〉私は本来何を望んでいたのか。私は日本語も話せない，私はすでに7度も日本にいたが，私の日本は根本的に文学の日本に留まった，加茂川を私は川端から知った，大阪を谷崎から，東京を村上から，比叡山を千年前に書かれた『源氏物語』から知ったように」(VI. S. 361)。

西国巡礼の本を書いていた西洋人がいたことに私は驚くのだが，チューリヒで見つけたその本からノーテボームは読み，考える[8)]。

「多くの日本の巡礼者たちはこの放浪をまさに静けさと平穏のために企てた。静けさを彼らは，人がつねに数百万の人間によって囲まれていると感じる，彼らのぎっしり詰め込まれた国においてはほかに見出すことができなかった。私が毎日，静けさを体験するために，数百万の人々の間を通り抜けて戦わねばならないということを，私はこの時点ではまだ知らなかった」(VI. S. 361)。この「静と騒」の指摘は興味深い。日本の都市は騒々しい空間だが，一方で日本人は床の間や茶室のように静寂に美を求めてきた。静と騒は相補的な概念なのである。

そしてヨーロッパ人としてノーテボームは「巡礼」について考える。

「私はカトリシズムから，人間がより高いものとのコンタクトを求めるとき，日常生活とは別の声を用いなければならないこと，そのために特別な衣服を身につけ，何世紀かの流れの中で儀式を考え出したこと，その儀式は根本的に，僧侶階級によって支配された，複雑にされた，管理された超越性との交際形式であることを知っている。私はまた，そのより高いものが人間の観念の中では頻繁に禁断の仕方に，特にもっと高いところにある場所にあること，人間の精神が聖なるものの姿の仲介者を必要としていること，それゆえに寺院の中にはこれらの聖人，教師，隠者の像があり，それらはそこで崇拝されることを知っている。私が，一群の巡礼者たちが寺院の一つに到着し，お辞儀をし，大きな呼び鈴を引っ張り，一本のロープについた長めの木片を大きな身振りで大きなブロンズの鐘に当て音をとどろかせ，お金を賽銭箱に投げ入れ，手を叩き，いつも流れている泉で世界の汚れを洗い落とすのを見れば，私は，私がシチリア，Estremadura，バイエルン，あるいはフランドルで見たものの多くをそこに認めた。それらの行為はなるほど異なっているが，その核において同一である。人間はまったく言葉通りにもっと高くあろうとし，そのためにさまざまな戦術を発展させたのだ」(VI. S. 362)。

彼は西国観音巡礼を，1997年に最初の17寺院，残りを2000年の春にした。「私はほとんどすべてを京都から企てた。駅（23番のホーム）の近くにJapan Tourist Information Officeがある，そこでYokoとMiyoは，私の計画に対する彼女たちの当初の当惑が退いた後で，列車，鈍行列車，バス，ロープウェイ，船を，私がそのつどの寺院に到着できるように，互いに結び合わせることを試みた」(VI. S. 363)。

その具体的な巡礼行をノーテボームは次のように描写する。

「その道しるべの一つの記号の上には5.7キロと，別の記号には3.8キロと書かれている。それに比べると数時間，雨や突然の暑さの中を歩くこと，山道をよじ登る行程，めまいを引き起こすような階段（寺の一つは888階段を持っている）はむしろひとつの安堵だった。そのために私は来たのだった，人が都市や満員の列車から救済されるとすぐに，別の日本が始まった，村と森，小さな宿屋，田舎のバス路線，制服姿の生徒たちで一杯の1両だけの鈍行列車の日本が。そして何度も，人が二体の仁王のいる門を通り寺の境内に入るその瞬間。仁王は，怒りながらにらみつける寺の門番である，それらは根本では同じ人物で，金剛力士である。左右に，一つは口を開け，一つは閉じている，両者とも超人的に大きく，賞金ボクサーのように筋肉質だが，幸運にも格子の後ろにいる。彼らのところに巡礼者たちはサンダルを掛けるのである。門を過ぎると通常，静かに広々となる，私を観察するものは誰もいない。時々私は巡礼の一団が一緒にお経あるいは祈りを唱えるのを聞く，あるいは一人の僧の声が

スピーカーを通して人気のない境内に響くのを聞く，いつか別の折には一人の僧がほら貝の笛を吹き，別の谷の側からの返答を待っていた。沈めることのできないメランコリーの響き。時々，私はまた炎と大きな歌の謎めいた儀式に遭遇した。私はすべてを私の内的なアーカイヴの中に蓄え，11の頭と千の腕を持つ観音から読みとり，この巡礼行は観音の33の顕現に捧げられていることを理解した，そして個別の寺のスタイルを互いに引き離そうと試み，そのためには第二の人生が必要であろうことを悟った」（VI. S. 363f.）。

文は，出来事と同時進行的に書かれるのではない。出来事が終わった後で，その「内面のアーカイヴ」から浮びあがるイメージが構成されるのである。それには「紀行文」は極めて適した形式である。そのとき，紀行文のジャンルが問題となるのではなく，ただ文字による美しい文学表現があるだけだ。

「そして今？　今，私は再びアムステルダムにいる，YokoとMiyoが完璧に書いた，列車の乗継のページをじっと見ている，途中の写真，素晴らしい〈書〉のある巡礼帳を見ている。私のメモは野戦の準備のように見える。JR京都綾部8時58分，舞鶴で下車，東舞鶴行きの列車，10時57分着，11時53分発，まつのでら12時着，そこから1時間歩き，寺まで山を登る。そして突然，私はすべてを私の前に見る，舞鶴のぞっとするように青い路面電車，屋台以上のものではない，人気のない小さな駅，見渡す限り誰もいない，寺院の記号のある標識もない。しかし旅行ガイドブックによれば私は道路に従い，それから川に沿う道を行かねばならない，寺を表す赤い記号は地図の右上端に記されている。そこで観音は，すべての33の寺院におけるように，崇拝されている，ここではしかし馬の姿で。観音とは誰か。大抵の寺では私は観音を女性の姿で見る，そのとき彼女はマリアに一番似ている。あるときは11の頭を持ち，あるときは，すべての方向に向かうように見える腕を持っているが，でもいつも女神，聖女あるいは慈愛のBodhisattvaである。かつてインドで観音はまだ男であった，そしてAvalokitesvaraという名前だった，そして彼は中国へ行き，Kuan-Yinとなり，日本に来て，かんぜおん，あるいは観音となった。Bodhisattvaは啓示を与えられた存在であるが，啓示にまだ達しなかったものを助けるためにNirwanaの享受を諦めた。この巡礼行はまず第一に観音に向けられている，ここでもまた。穏やかに雨が降っている，しかし私が上にいるとき，私は雨のヴェールを通して日本海を見る。かつて荒れ狂う嵐のとき一人の水夫が大きな苦難にあった。彼は観音に祈ると，彼の船が自分の力で嵐の中を陸地に運ばれていくのに気付いた，陸で彼は馬のひづめの跡を見つけた，それをたどって行くと彼は，馬の頭の観音の像のある寺院に達した。まだ海の水でびしょぬれの観音像の。／私がその高い階段を上ったとき，とても静かだった。雪がいくらかそこにあった。私は，聖女であるその馬のそばを過ぎ，本堂へ行く，私を観察する者は誰もいないので，私もまた手を叩き，赤い編まれたロー

プを引っ張り，その大きな金属の鐘をがらがら鳴らす，上の世界の存在が，私がいることを知るように。それから私は私の折り畳み可能な巡礼帳を取り出し，nokyo，寺院の事務所に行く，そこに一人の僧が窓ガラスの後ろで本を読んでいる。私はガラスを叩く。彼が驚く場合でさえ，彼は何も気付かせない。私は300円を皿の上に置き，彼は寺の三つの灼熱のスタンプを私のnokyochoに押し，その上に長い筆で彼の書を黒い墨で描く。私は彼のゆっくりした優美な動きを追跡する。私はそれらの寺院を正しい順序で訪問しなかった（日本人もまたそれをしない），私は今彼がその帳面をめくり，私がすでに33番目の寺院，華厳寺，公的には最後の寺院にいたことを心に留めるのを見る。華厳寺では一度に3つの書をもらうのである。それから彼は笑い，その中にすべてが含まれている一つの身振りを描く。観音の姿，赤いよだれかけをつけた地蔵の姿，本堂の祭壇の上のミカン，山と長い下り道，海，私がすでに訪れた31の寺院，同様に私がこれから訪れるであろう2つの寺院，そしてすべての思い出，花，列車，聖像，僧，香，果てしない階段のすべての思い出，それを私は世界の別の果ての私の家に持ち帰るだろう」（VI. S. 364ff.）。

美しい文である。この文に私はノーテボームの「紀行文」の到達点を見る。文化理解，記録，生きられた時間，記憶が緩やかに統合されている。馬の姿の観音の伝説も『黄金伝説』を想起させ，世界文学の概念と符合している。ここでは文化が，ありのままに肯定され受け入れられている。日本文化のクリシェ的理解もない。寺院からの眺望が暗示するような，世界／宇宙に開かれた感がある。それはひょっとしてノーテボームが果てしない旅の中で探していたものであるかもしれない。しかしそれは後から振り返り，描かれるヴィジョンである。巡礼は，昔から数知れぬ人たちが歩いてきた道をたどる。サンティアゴ・デ・コンポステラ大聖堂のような「目的地」は存在しているが，それは巡礼のためのとりあえずの口実である。巡礼のエッセンスは「途上」にある。道の上にいること，それをノーテボームは語ろうとしている。それは空間ばかりでなく，時間の途上にあることである。その旅は決して終わることがない。「ゼロのように丸い」。

使用テクスト

Cees Nooteboom : Gesammelte Werke Band 2 Romane und Erzählungen I.（Aus dem Niederländischen von Helga van Beuningen und Hans Herrfurth）. Frankfurt am Main（Suhrkamp）2003

Band 6 Auf Reisen 3（Aus dem Niederländischen von Helga van Beuningen, Andreas Ecke）. 2004

Band 7 Auf Reisen 4（Aus dem Niederländischen von Helga van Beuningen, Andreas Ecke und Rosemarie Still）. 2005

Band 8 Essays und Feuilletons.（Aus dem Niederländischen von Helga van Beuningen u.a.）. 2006

Band 9 Poesie und Prosa 2005-2007,（Aus dem Niederländischen von Helga van Beuningen, Andreas Ecke und Ard Posthuma）. 2008

これらのテクストからの引用は論文の中にローマ数字による巻数と，ページ数を記す。

注

1）飯沢耕太郎：日本の写真家　歴史と現在。In : 日本写真史概説。日本の写真家　別巻。（岩波書店）1999年。16-17 p.

2）西鶴とフェリーニの比較は面白い。ノーテボームはフェリーニにインタヴューをしている。「フェリーニとカサノヴァ。ローマでの対話」In : Band 8. S.330-344.

3）Bruce Lowneyの絵と彼のワゴンの訪問は，『死んだ男の旅 Die Reise des Toten Mannes』（1983）を参照。In : Band 6. S.709-730.

4）Vgl. : Vorsätzlicher Mord. In : Band 7. S.9-13.

5）ゲーリー・スナイダー（原成吉訳）：リップラップと寒山詩。（思潮社）2011年。
Gary Snyder : Riprap and Cold Mountain Poems.（Counterpoint）Berkley. 2009/1959.
寒山詩（大田悌蔵訳注）。（岩波文庫）2012年。
ノーテボームが翻訳した最後の「寒山詩」はスナイダー／原成吉訳では以下のとおりである。
「はじめからおれの家は，寒山にあった／煩いごとを遠く離れ，山をぶらついた／万象は跡形もなく消え去り／解き放たれ，そして銀河を流れ／光の泉となり，心にふりそそぐ　―／ものではない，しかしおれの目の前に現れる／仏性の真珠がわかった／完璧な果てしない球体，その使い道が」（日本語訳では112 p，Snyderの本では61 p，岩波文庫では230 p）。

6）フローベール（生島遼一訳）：ボヴァリー夫人。（新潮文庫）。後書き。456 p.

7）Nooteboom, Cees : Tumbas. Gräber von Dichtern und Denkern. Photographien von Simone Sassen. München（Schirmer/Mosel Verlag）2006.　あるいは In : Gesammelte Werke. Band 9. S.331-338.

8）Readicker-Henderson, Ed : Japanese Pilgrimages. Tokio 1994.

Das Japan-Bild bei Nooteboom

Nooteboom schreibt eine Erzählung, die in Japan spielt, und einige Reiseberichte über Japan. Die Erzählung „Mokusei !“ ist eine Liebesgeschichte mit einer Japanerin, die viel eher als eine Chiffre für das Land Japan als für eine lebendige Frau konzipiert ist. Und die Chiffre ist ein unlösbares Rätsel, woran die Liebe scheitert.

Die Reiseberichte über Japan sind Versuche, das Rätsel zu lösen. Das Rätsel erscheint in Form von verschiedenen Gegensätzen : der Gegensatz von Tradition und Moderne, die sich als die allgemeine Form der Zivilisation zeigt. Nooteboom kann das moderne Japan verstehen, aber nicht das alte Japan. Der Gegensatz von Westen und Osten. Und die Dialektik des Reisenden. Der Reisende konstruiert sich als einen Fremden. Der Reisende wird sich selbst entfremdet,

was das Rätsel entstehen läßt.　Oder der Reisende sucht eigentlich das Fremde, das Rätsel in der Welt, die total modernisiert ist.　Schließlich findet sich das Fremde nur in der Vergangenheit. Andererseits enthält die Setzung des Rätsels die Möglichkeit, es zu entziffern.　Die fremde Kultur kann entziffert werden.　Das Rätsel so wie es ist zu beschreiben, ist das, was Nootebooms Reiseberichte ausmachen : Eine Methode des reinen Dokumentierens, um die fremde Kultur zu verstehen.

Der Reisebericht ist aus zwei Methoden von „Zuihitsu“（japanische Essayform）und Pilgerfahrt konstituiert.　Das Fremde heißt für Nooteboom die vergangene Welt, die durch die Kunst und Literatur vermittelt ist.　Es gibt die Genji-Erzählungen und das “Kopfkissenbuch”, welches zur Bildung des Reiseberichtstils bei Nooteboom beiträgt.　Die Genji-Erzählungen bieten das Modell einer nur durch Sprache gebildeten, höchst kodierten Literatur-Welt.　Das wiederum ist ganz nah bei dem Programm der literarischen Moderne.　Nun wird die Literatur（Genj-Erzählungen in diesem Fall）Weltliteratur, die über die Grenze der jeweils eigenen Literatur hinausgeht.　Die Welt ist Text.　Und es ist der Reisebericht Nootebooms, der die Reise durch Raum und Zeit beschreibt.　Die Reise in die Welt des Rätsels ist eine Pilgerfahrt. Die Figur der Reisenden ist in „Kanzanshi“ abgebildet.　Der Pilger beschreitet den Weg, den unzählige Leute vor ihm schon gegangen sind.　Diesem Weg folgt auch Nooteboom. Nooteboom liest und übersetzt das “Kanzanshi”.　Er will nicht Transzendenz, sondern das Auf-dem-Weg-Sein.　Die Reise hat kein Ende.　Die Reise ist eine Reise nicht nur durch den Raum, sondern auch durch die Zeit.　Das ist „rund wie Zero“, zitiert nach dem “Kanzanshi”.

【翻　　訳】

沢山のアプローチがあるが，成果は少ない

―― マートンとコロンビア学派の理論構築モデル ――

ステフェン・ターナー　著

久　慈　利　武　訳

【梗概】中範囲の理論に関するロバート･マートンのエッセーと機能的説明，構造的アプローチに関する彼のエッセーは社会学史で最も影響力を持つものに属する。しかしそれらの輸入は謎である。彼は明確に最も極端な科学的公式主義者やその貢献者の幾人かにみずからを結びつけ，コロンビア学派の理論構築モデルを支持している。しかしマートンは彼の議論に対するネーゲルの批判に答えず，ラザースフェルドとハーバート・サイモンのライバル関係を認めないし，哲学的文献，方法論の文献をめったに引用せず，批判者に曖昧な情報で応答し，そのことがマートンの遺産に深い曖昧さを残している。

> 概念は多くあっても証明された理論は少なく，見解は多くあっても，定理は少なく，アプローチは多くあっても，成果は少ない。力点を変えてみることが万事よくするのだろう。
>
> Robert K. Merton（quoted in Zetterberg［1954］1963：v）

序論

　ロバート・マートンは，説明の性質，理論の性質，理論の経験的な証明の妥当性，今後の理論的発展の展望に関係する基本的な疑問を扱った社会学の一般的方法論に関する沢山の論文を執筆した。これらの論文はマートンにとって，デュルケムにとっての『方法的基準』，ウェーバーにとっての『学問論集』の所収論文に当たる。古典としてのマートンの地位は，部分的には「上記の古典と同様，彼が首尾一貫した独自の社会学的認識のビジョンを持っていたかどうか」にかかっている。フェルデナンド・テンニエス，アレックス・ド・トクヴィルは，そのようなビジョンを持たなかった，いや，古典的テストでそれを結晶化させなかったのでその栄誉に浴さない。カール・マンハイムはパースペクティブ問題についての彼の解決案は致命的欠陥を帯びていて，結局ウェーバーによって元々仕上げられた立場に堕してい

るので，やはりその栄誉に浴さない。マンハイムについての最も破壊的な方法論批判はマートン自身によって書かれた（1968e：543-62)。『構造』の序章と同じテキストのデュルケム，ウェーバー論に示されている彼の方法論のビジョンは今では中身を何も生じていないように思われるので，パーソンズは尖端にいる。約束された土地は一度到達してみると，約束されたものとはあまりにも似つかわしくないので系統的な社会理論の約束自体が不信を買う。対照的に，マートンはその著作が社会学が実際に達成し得たものとうまく合致していたので，ベターな予言者であったように思われた。彼は本稿のエピグラフが示しているように，結果を手に入れる問題にはきわめて慎重であった。社会学がアプローチ，パースペクティブを超えて成果, 経験的事実に進む必要があるという考えは彼の方法論のビジョンの核心にあった。社会学がそのような知識を産出した限りで，マートンのビジョンは立証された。しかしそのビジョンを理解することは我々がこれから見るように容易い事柄ではない。

マートンの論文，特に中範囲の理論に関する論文（1968d：39-72）は，社会学者を古典としてランクづける幾分ばかばかしいゲームと別に，社会学史においても興味をそそる。マートンが曖昧ながら密接な関係を持った「コロンビア学派の理論構築モデル」は，アメリカ社会学において理論が経験的リサーチとどのように関係したかの問いに，いっとき最も影響力を持った解答であった。20 世紀半ばの多くの社会学者はそのモデルを支持し，自分のスカラーシップを中範囲理論を展開することによって社会学に貢献することと見なした。一種のコンベンショナル・ウィズダムとしてマートンのエセーは，コロンビア大学の体験を持ったものでなくとも，数十年の間，社会学でなされてきたものの形式と内容であった。中範囲の理論というタームは依然として社会学者，一層応用社会科学者によって呼称されている。そしてこの概念は現在でも通用すると述べる堅い支持者を持っている（e.g. Pawson 2000)。Barney Glaser のような方法論思想家，理論家は彼らのコロンビア体験から自分の見解を生み出し，コロンビアモデルは多くのコロンビア大学院生にスカラーシップのテンプレートを提供している（Price 2003)。

しかしながら，方法論史のドキュメントと解すると，マートンの論文はやや神秘性を持っている。それらは方法論の歴史家が通常行っている類の歴史分析に抵抗している。その中には，受容史を眺めたり，源泉や教師を同定したり，所与の領域での思想の大きな発展のなかに作品を位置づけるような思想史の標準的なアプローチ，次のような方法論に特にレリバントなアプローチも含まれる[1]。デュルケム，ウェーバーに関する際限のないとまではいわないが広範な文献が物語るように，デュルケム，ウェーバーの方法論的著作に関して上記の分析

[1] その作品が言及している特に今日的な科学的内容，著者の密接な科学的同志，その思想家の特に哲学のリーデングと個人的なコンテキストを眺める。

はきわめて成功裡に行われている。

以下で，私は方法論史における標準的分析方法の適用と通常の問いを尋ねることが上記のエセーのケースで何を生じているかを明らかにする。何かを時としてきわめて興味を惹くものを生み出している。しかしそれらは方法論的著作の探求によって特徴的に生み出される類の明晰さ，究極的には哲学的著作の一形態である方法論的著作のコンベンションがかれらの著者からの力を持つということを生み出さない。代わりに，通常の問いを尋ねることはテキスト，その主張，意味をもっと謎にした。この領域のマートンの著作を納得のいく解読をすることの難しさはよく知られている。科学に関する著作のなかでのマートンの「機能」のタームの用法を理解しようとし，そのタームが帰結以外の何かを意味しているかどうかを確定しようと試みた後で，エルスターは降参した。

> 私は何度も読み, 読み直した後で依然知らないことを告白せざるを得ない。たぶんマートンは自分の首を実際に突き出したり，それを明確に抱きしめることなしに，強い主張を述べるという最も旧式のゲームを演じているのだろう（Elster 1990 : 135)。

我々はこれから知るようにテキスト中にこれと同じ問題に出会うだろう。しかし曖昧さはあるパタンをとっており，彼の方法論的著作のコアの曖昧さを同定できる。

知的コンテキストから見たマートン：概念スキームの発想

方法論的著作に通常尋ねられる一種の問いは「いやしくもそのテキストがなぜ執筆されたのか」「それは誰に敵対して書かれたのか」というコンテキスト的なものである。通常の回答は，そのテキストは，（通常は議論のパートナーを挙げた上で）進行中のある議論に適用する試みである，というものである。偉大なテキストは議論の用語を変え，テキストの偉大さは, そのテキストが書かれたコンテキストの用語と慣例にそれらを対比することによって, 理解されうる。コンテキスト主義は歴史へのアプローチとして盛んである。というのは，あとからふりかえって偉大なものと見なされたテキストのコンテキストは忘れ去られてしまっているので，その観点からかそれに対抗してテキストが執筆された慣例が忘れ去られているので，少しも新奇でない思想家に新奇性が帰せられるのである（Jones 1977 ; Skinner 1969, 1970, 1972, 1974)。

マートンの場合，我々はこのコンテキスト問題に特に直截な回答を持つように思われる。ターゲットはパーソンズである。テキストはあからさまに論争的なものではないが, ターゲットは明らかに概念スキームの構築と理解された分析的社会学理論のアイデアである。パーソ

ンズにぶつけられる事例はポウル・ラザースフェルドと一緒の経験的リサーチの体験であり，大半は応用社会調査研究所（BASR）系譜の事例を使用している。しかし，BASR系譜の調査成果を有用で理論に関係すること――パーソンズ自身それを否定していない――をプロモートする以外に，この事例は何を主張するのか。

「経験的リサーチの社会理論に対する意義（1948）」は経験的リサーチが我々の社会学的理解を変更し，我々の理論的考えをトップダウンのパーソンズのそれや仮説検証モデル以外のものに見直すことを支持する，やり方の一類型を提示する。マートンが述べるには，リサーチはさらなる機能を持っている。掘り出しパタンは問題が定式化される仕方がどこか間違っていることを物語る異例な結果の登場を伴う。リサーチはまた再定式化される。その語によってマートンは概念スキームの精密化の圧力がかかっていることを意味している。リサーチはまた偏向させられる。その語によってマートンは新たな方法の使用を通じて新しい種類のデータを生み出すことによって理論的関心を方向付けし直すことを意味する。リサーチは明確化する。その語によって，理論家にリサーチ可能なプロジェクトに転換されうる仕方で自ら説明することを強いることを意味する（Merton［1948］1968a：157-58）。

テキストはマートンの典型的な知的戦略を物語っている。彼は主題について標準的な見解を採用していて，それを拒絶していないが，標準的見解に反するか種類が異なって見える諸要素――経験的リサーチのさらなる4つの機能――を導入することによって付帯条件を付けている。しかしその付加は標準的見解を過激化するものでもなければ，置き換わるものでもないし，拒絶するものでもない。マートンはのちにこの戦略のいくつかの事例を曖昧と呼称している。一つの簡単な例は，我々がエキスパートの医療の忠告に依存するという事実である。このコア事実の皮肉な付帯条件は，我々がその忠告に憤ることがあるという二次的な事実である。Donald Levine（2006）は「マートンは自律的な理論の考えにアンビバレントであった」と述べている。この戦略，あるいは実際のアンビバレンスは，彼の方法論の著述を特に謎めいたものにしている。標準的見解を改訂するよりもむしろ，付帯条件に照らしてそれを是正したり，付帯条件をカバーするようにそれを拡張するために，彼は標準的見解と付帯条件の双方を手つかずに残している。

この戦略が生み出す混乱はパーソンズによって用いられているターム「概念スキーム」[2]との関連で眺めることができる。本稿では，「新しいデータは概念スキームの精密化の圧力をかける（［1948］1968a：162）」というアイデアとの関連で登場する。その根拠は単純である。それは一組の事例に基づいている。「新鮮な経験的事実はマリノフスキーを魔術の理論に新

[2] マートン自身そのタームを使用していて，拒絶していないが付帯条件を付けている。

しい要素を編入するように導いた（[1948］1968a：162)」。ケイト・スミスの戦争債券キャンペーンについてのBASRによる研究は，「人々はセールスマンシップ，偽りの愛想尽くし等を好かないのに，なぜケイトを好いたのか」を明らかにした。インタビューは，人々がケイトがまじめであると信じたことを明らかにした。自己犠牲的で自己の声を抑制した彼女の行為が彼女の真剣さと任務への献身を証明したから。各々のケースで，リサーチは限定的理論に編入されるべき新しい変数を示唆した（[1948］1968a：165)。これは表向きは無害であるように見えた。概念スキームの意味するものについて何の議論もなかった。その上オープニングの文章に見るような論文の動機づけの声明「仮説演繹的モデルはリサーチの現実味を歪める傾向がある（[1948］1968a：157)」とはこの中心的問題に偶発的なものである。しかしその論文はこれについてはほとんど語っていない。彼自身の追加はこのモデルが誇張したり極小化するものを単に是正するだけである（[1948］1968a：157)。

上記の文章を理解することは上記のテキストを理解する困難さの例証である。マートンが十分に知っていたように，概念スキームというタームはマートンが学生であった時期の科学についてのハーバードの議論（特にL. J. HendersonとAlfred North Whiteheadによる議論）ではごく当たり前のものであった。それはマートン自身が教わったハーバードの影響力のあった総長James Bryant Conantの論文（1947～1957）でも広汎に使用され続けた。クーンはコナンの子分(被保護者)であり，概念スキームに置き換わったパラダイムの語以外は，クーンの『科学革命の構造』に見いだされるものすべてをコナンのテキストが含んでいる。概念スキームの語は元々はヘンダーソンによって用いられ，ホワイトヘッド によって精密化されたように，この語はある時期の科学理論によって想定された仮定や概念を指したが，単なる理論よりもはるかにゆっくりしたペースで変化し，経験的データとはるか遠いものになった。例えば，ヘンダーソンは医学の概念スキームを数世紀にわたって保持されるものと見なした。概念スキームの改訂は革命的なことであり，革命はまれなことである。マートンがAlexander Koyre, Pierre Duhemという科学史家の通読から非常に熟知していたように，この概念のルーツは新カント派のものであった。

概念スキームとデータの関係は二通りのやり方で眺められる。コナンは連続線上の観点からこれを見ている。経験的一般化と仮説から理論と概念スキームが上昇するにつれて，経験的な中身が次第に減退する。しかしもっとラデカルな解釈は，データ自体が上記の非経験的な仮定によって構成され，かくしてそれらを直接に浸食できないというものである。これはクーンがコナンをラデカル化し，ラデカルな概念変更を有名にするために，究極的に用いたオプションであった。しかしマートンが提示しているデュエムのパラフレーズにも存在する。「科学において獲得された用具や実験結果は実質的種類の限定的仮定と理論を通じても射止

められる（1945：463n2)。」

パーソンズは1930年代にヘンダーソンから別な教訓を引いている。「科学であるには，その学問が概念スキームを持つことが要求される。それを欠くと，理論や経験的一般化は大きな全体に集合することはできず，進歩もかなわない」。彼はその過去の思想家のなかに社会学の概念スキームを同定し，他の概念スキーム（特に経済学のそれ）との関連でその位置を理解するという孤高の任務を自らに課した。当時のコンテキストでは，これは理解できる。新カント派の科学モデル「科学を事実のドメインを論理的に統合する階統的に誂えられた概念スキームと見なした」によって直接影響を受けたドイツの社会学者たちはそのようなスキームを際限なく作り出した。ゲオルク・ジンメル，レオポルド・フォン・ウィーゼ，アルフレッド・フィアカントはそうした。パーソンズは，それが究極的にどんなに過度に楽観的であることが判明しても，その分野の歴史の分析から引き出されうるユニボーカルな（単一義な）共通スキームはスキームのこの簇生への分かりやすい反応であると考えた。

上記のすべてに対するマートンの反応はどうだったか。彼は，社会学見解市場のなかに教義体系を調達したり，その敵陣との公開の学術戦争に従事する，当時の競い合う社会学理論学派は十分に値する終結となってきているというパーソンズの見解（Parsons 1948：164）に強く同意している。そこで，単一の概念スキームの必要に関して彼がパーソンズに同意しているように見えるだろう。しかし彼は続けて「力点のシフトが万事を丸く収めるだろう」と述べている。力点のシフトとは，スキームにだけ集中することから離れて，「スペシャル理論を相互に矛盾しない命題の（より一般的な）集合に総合する関心の流布が存在する（Parsons 1948：166)」を前提としてスペシャル理論に向かうことを指す。マートンはこれを，多くのアプローチを少数の成果で置き換え，多くの見解を少数の定理で置き換えることを容易にする社会学理論を実践する人物の希少資源配分の方針（Parsons 1948：166）と呼称する。これは彼がのちに結実させる中範囲理論のコアである。しかしそれは概念スキームの問題とどう関連するのか。

その答えは「経験的リサーチの社会学理論に対する意義」のなかに見いだされる。我々が見てきたように，概念スキームの用語はマリノフスキーの呪術論についてのマートンの議論（[1948] 1968a：162）に，一般的志向の用語はスミス女史の戦争債券キャンペーンの議論（[1948] 1968a：163）に登場するが，彼の用いる用語は既存の用法とごく緩やかにしか関係しない。マリノフスキーの呪術論もBASRによる戦争債券キャンペーン研究を動機づけた大衆説得という曖昧なアイデアもハーバードの伝統が念頭に置いていた概念スキームではない。その上，概念スキームの変更を強制する際のデータの持つ特別な役割は大して特別のものには思えない。マートンが再考察しているように，マリノフスキーは，トロブリアンド島

民が彼らの漁法が信頼できる沼池のなかでは呪術を使わず，漁法が当てにならない状況でのみ使用していたことに気づいていた。マートンはまたこの手がかりを呪術と偶然で制御不能なものの関係に関する理論に一般化した（[1948] 1968a：163)。先に構築された概念スキームが予測できなかった何かが存在することを暗示する限りで，その議論は曖昧な仕方であるが，概念スキームを構築するプロジェクトに対する疑念を立証している。しかし少しでも厳密に述べるなら，上記の事例はコアの意味での，またパーソンズの意味での概念スキームと関係がない。

用語の中途半端な用法の多くの事例が存在する。公式化（formalization）と導出（derivation）の用語は，のちに見るようにその本来の意味を喪失している。これはマートンの見解を同定することを難しくする。概念スキームについてのハーバードの考えについての彼の見解はどんなものか。彼はそれを拒絶しているのか。我々がスペシャル理論を構築するとき概念スキームの役割は消滅するとマートンが考えているなら，デュエムからの引用にも拘わらず，マートンは拒絶していると人は考えるだろう。しかし，各々の科学は開発された概念スキームを必要としているというパーソンズの考えを拒絶しているのか。その議論は社会学を科学としてどうやって前進させるかという方針の主張に過ぎないのではないか。もしそうなら，その方針はどれだけ正確にワークすると信じられているのか。スペシャル理論に集中することは複数のアプローチの問題から解放される成果と定理を産み出すというのは本当なのか。この議論は彼が1975年に放棄した議論であるから，以下にとって重要である。同様に，社会調査の標準的仮説検証モデルは調査で実際に起こっていることを誤って表示するという彼の議論は，このモデルとの方法上の不一致を指すのか，それとも単なる実際的な注釈なのか。abduction[3] に対する彼の言及との関連で見るように，彼は別なモデルを持っているのか。もっと一般的には，マートンは社会学の発展のロードマップを提示するために上記の論文を使用しているのか，社会学にとってどんな種類の認識が可能かというモデルを描いているのか。つまり受け取られている見解の代わりに別な方法観がインストールされるというのか。

アブダクション（abduction）と編纂（codification）

コンテキスト主義者は定式化ないし理論で目新しいものは何かと尋ね，パーソンズが裏書きしたものと方針レベルよりも方法論のレベルで異なるものをマートンが裏書きしているな

3 ［訳注］語源は後述のように，チャールズ・パースであるが，定訳はなくアブダクションと音読みでそのまま表現することが一般的だそうである（本学言語文化学科　伊藤春樹氏の教示による)。マートンの訳書では，中嶋竜太郎氏はマートンの次の記述から意訳して「外転」という訳語を与えている（96頁下段)。「既成理論に矛盾するか，確証されている事実に矛盾するか，いずれかの理由で変則的観察物が研究者の好奇心をかき立て，より広い知識の枠組みに組み入れさせ，実りある研究方向（新しい理論を生み出したり，既存の理論が拡充されること）にぶつかることがある」。

らば，パーソンズ批判を理解することははるかに容易であろう。ここで我々は何らかの結果を手に入れているように思われる。仮説検証，仮説生成の標準的見解に加えて，コロンビア学派のアプローチと関連した理論的実践群。マートンがそれを独自の方法として扱うことを意図すると否とに関わらず，彼はそれに関して codification（編纂）という用語を充てている。そのうえ，編纂という活動はコロンビアモデルならびにコロンビアモデルに影響を受けた人々の思考に大きな役割を果たしている。ラザースフェルドと協力者の実践では，transfer という用語はあるコンテキストで開発された説明を新たなセッテングに広げたり応用する仕方を系統的に探求する実践を描くために用いられている[4]。

diversity（分岐）のコンテキストと justification（承認）のコンテキストの区別のなかで信奉されている標準的見解は，説明仮説を発明する方法は一切存在しないが，そうすることは科学的発見の本質であるというものである。狭い射程の経験的結果からもっと一般理論的主張に一般化するという考えは，仮説検証の標準的モデルの外に位置する。ここに方法が存在するなら，標準的な教科書方法論への真に独自の追加であろう。そのアイデアをラザースフェルドにクレジットを与えるマートンは，編纂が入手できる経験的一般化を明らかに異なる行動領域で系統化しようとする（1949：155）と述べるとき，それを transfer（転移）のアイデアと結びつけている。マートンは，それが Charles S. Pierce の概念であるアブダクションの要素を含むことを示唆するとき，珍しくそのアイデアの哲学的源泉を同定している。マートンはアブダクションを，新しい事例を単に収集するよりもむしろ推論の一ステップとして，仮説の創出と保持と理解している。そしてパースはずっと以前から，意外な事実の戦略的役割に気づいていた（［1948］1968a：158n5）と指摘している。

アブダクションはわかりにくい発想である。今日ではアブダクションは観察を説明する新しいルール創出を含んでいるというパース自身の考えに従って，最良の説明における推論の一形態と見なされている。しかし，マートンが意図していることはパースの用法ほど明白ではない。我々がコロンビアの理論構築の立会人で参加者の一人 Hans Zetterberg によって与えられるもっと明確な説明を考察するときに，曖昧さが一層明確になる[5]。マートン同様，

---

[4] transfer という用語は Lazarsfeld/Sewell/Wilensky 1967 の *Use of Sociology* に関する Ernst Nagel のメモのなかで a term of art として登場した。これが独自なものと見なされた理由は，William F. Ogburn によって代表される系譜にある相関社会学が分割され順序づけられるのが適切な相関関係をそれのみで説明的なものとして扱い，さらなる理論的裏付けが必要と考えず，その結果の他のコンテキストへの適用が本来の分析に価値ないし説明力を与えると考えず，（もっと一般的には）理論的解釈を non-objective として扱ったからである。Ogburn は scattergram（スキャターグラム）の解釈を an editorial cartoon（社説の風刺画）の解釈に例えたことで知られている。これはそれ以降の文献で重要な区別である。ある限定されたセッテングを超えた一般化がセッテング内で因果推論を行うのにふさわしくないという考えの今日の用語に関しては，Glymour 1983.

[5]［訳注］ゼッターバーグは abduction を「少数の高い情報価値の命題に，多数の低い情報価値の命題を包摂する」と述べている。

ゼッターバーグは理論的説明よりもむしろ一例を与えている。彼は「スクールの価値ある代表に選出されたベニングトン・カレッジの大学生は他の者よりもカレッジ・コミュニティのリベラルな価値に同意している」という事実から出発する。それを少し乱暴にいうと，一連のステップを通じてその知見をより高次の抽象水準に高めるなら，「ある集団で平の成員が好意的評価を受け取るほど，彼らの考えは他の集団成員のそれと収斂してくる（Zetterberg 1954 : 24)」。この事例は，パースともっとうまく合致し，アブダクション（abduction）が演繹（deduction），帰納（induction）と違って新奇の概念要素を追加するという発想をつかんでいる。しかし新しい概念スキームの追加と別に，ゼッターバーグが描いているすべては，さほど広くない一般化をより広い一般化に包摂するおなじみのパタン，つまり演繹的説明そのものである。新しいもっと一般的な概念要素の追加は，理論の仕事である。しかしこれをする手続きは一切存在せず，理論家の創造的活動を要求する。たがマートンは掘り出しパタン（serendipity pattern）のようなものを論じる際に，標準的姿に何かを付加したと考えているように思われる。質問はそれは何か。これは科学の標準的テキストと対照的に，社会調査で実際に起こっていることに関する社会学的種類の単なる観察か。それとも，社会学的知識の性質についての我々の理解を変えるものか。

この問いへのひとつの回答は，観察上の知見の説明がより高次の抽象水準に同様に上昇させることが周知の Glaser の grounded theory（データ対話型理論）のコアであることに気づくことから得られるだろう。それは「概念はデータから発生する」という混乱したアイデアを追加している[6]。

もしデータが当然の与件（the naturally given）であって，社会調査が入り込むすでに概念化された社会的世界であるならば，さもなければ判読しかねるこのフレーズも判読できるだろう。この解釈は，社会データに基づいて統計的仮説ないし民族誌的仮説を構築し検証しようと努めている調査者の経験を描いている，マートンの事例にうまく合致する。調査者はし

---

[6] これが由来するパースからの引用文はこの見解を曖昧な仕方で述べている。

わたしがアブダクションを始めて一つの推論として分類するずっと以前に，アブダクションもちょうどそれに当たる説明仮説を採用するという操作は一定の条件に従うことが論理学者によって認識されていた。つまり，事実ないし事実の一部を説明するだろうと仮定されないなら，仮説は仮説としてすら承認されることはできない。推論の形式は次の通りである。

C というビックリする事実が観察された。

しかし A が真実なら，C は当然の事柄であろう。

したがって，A が真実かどうか疑う理由がある。

かくして，「A が真実なら，C は当然の事柄であろう」という前提のなかにその内容のすべてがすでに存在するまでは，A は abductively には推論され得ない（Pierce [1934] 1960b : 117)。

この指摘は，A の内容は C から手に入れることはできないが，C を含む C 以上の何かを必要であるというものである。これは，概念がデータから生まれることができるという考えとは正反対である。その代わり，新しい概念はそれらを説明する事実に持ち込まれねばならない。

ばしば仮説が働かない場面に出くわし，新しい仮説を発明したり理論をネガティブな結果に合致するように修正するだけでなく，そのために社会的世界に戻ることによって仮説が働かない理由を見いだす。争点をフレーム化するこのやり方は，仮説検証モデルのようにデータは我々のために構成されているのではなく，時折ビックリする仕方で口答えすることを示唆する。もし我々が我々の仮説を述べられているように検証するだけなら，我々は次の事実を見逃す。つまり，我々の調査の被験者が我々の本来の仮説に含まれない彼らの行動の理由を伝えるさらなるインタビューにかけられるという事実。マートンはそのようなケースを掘り出しパタンの見出しの下に描写している。彼はその街でこれまで入手できたよりも，新たな郊外のホームで，ベビーシッターの入手が容易だと誤信している親たちの事例を挙げている。その過ちは郊外の方がより多くの人々を親密な知り合いになり，それゆえ彼らのためにより多くのベビーシッター候補の若者がいるという事実に由来した（[1948] 1968a：159）。

しかしこれはマートンの見解に混乱の拍車をかける。社会調査のこの口答え特徴の一つの理由は，次のものであろう。遡るべき理由付けし解釈するエージェントの真のアクセスできる間主観的世界が存在することを認めることは，社会学的説明におけるこの世界と上記の間主観的実在の存在論的，理論的プライマシーを認めることにつながる。この世界を質問紙調査者のインタビュー・スケジュール上の尺度化しうる回答を持った質問集合に方法論的に構築することは基底にある間主観的実在への賦課，必然的に歪曲，たいていは戯画化である。しかしマートンはそのような結論を下していないし，この種の問題があることを認めてすらいないように思われる。にもかかわらず，理論と経験的調査の関係の考察全体はそのような結論に向かっている。上記の争点は社会学の方法論では周知のことであり，その存在をマートンが全く知らなかった人口に膾炙した現象学者 Alfred Schutz の関心事であった[7]。それらは，「中世の世界観のようなものは，多様な世界観を持つ諸個人からなる中世の実在と本来的に問題を孕んだ関係を持つ理念型である」というウェーバーの「客観性論文」の主張に中心的なものである。

マートンは「彼ら（エスノメソドロジスト）が提起した問題は質問紙調査者には周知のものであり，彼らはその知識に基づいてそれらの問題を処理している」とみなす，ラザースフェルドによるエスノメソドロジストの質問紙調査批判の棄却に荷担している。しかし質問紙の作成のような実際的なことを所与とすれば，この応答は「我々の結果が基底にある実在近似物と誤表示であることを我々は知っているが，実は我々は基底にある実在に本当は気にかけない」と述べるものである。これは，有益な近似物を得ることができる応用調査者にとって

[7] 唯一の箇所は，マートンが「シュッツと Peter McHugh は，多元的発見に関する論文で Dorothy Swaine Thomas を共著者の一人に挙げ損ねている」ことを指摘しているものである（1973：447n19）。

はすばらしいことである。ケイト・スミスの戦争債券キャンペーン調査のように，質問紙が十分に深く掘り下げていないという事実を指摘したマートンのようなおよそ科学者にほど遠い者（much less scientist）にとって，最小限のことを述べることはふさわしくない。同様に，マートンは「この究極的な実在に執着すること自体が行き止まり（a dead end）であり，前進の途は必然的に近似物である理論を提案し洗練することを通じてである，と全く正当にも述べている。人は中範囲理論戦略への彼の引き続きのコミットメントをこの主張の事実上の是認と受け取ることが出来る。しかしそうすると，我々は別な曖昧さに直面する。上記の近似物の地位はどんなものか。近似物でない理論の捨て石なのか。そうとすればいかに。あるいは，それらが我々が社会学に期待できる最良のものなのか。あるいは，BASR 調査によって提示されたこの種の近似物が我々が望みうるすべてなのか。

古典学者の間で

もし我々が上記のテキストを（社会学史の実際の古典的人物の立場や議論と比較する）もう一つの標準的方法でアプローチするならば，謎は明らかになる。ここでもまた，マートンが何を読んでいたかは謎である。彼がそのアイデアを広汎に利用しているウェーバー，デュルケム，特にジンメルの著作についての彼の知識は例外であったことは明白である。その上，彼が用いたアイデアの先史についての彼の知識はビックリするほど広汎であった。意図されざる結果に関する彼の初期の論文（1936）はこの精通を示している。彼は決して果たされることはないだろうが，このアイデアの全史を書きたいという願望を表明している。このケースでさえ，これらのトピックに関する哲学的文献と古典学者間での哲学的議論の双方をビックリするくらい無視している。

にもかかわらず，彼が言っていないことが現れている。方法論的著作でウェーバーは見地の問題の卓越した理論家である。ウェーバーにとって，社会科学の内容そのものがまずその科学自体によってでなく，変化する文化によって構成されており，したがって社会科学の内容を変化させている。文化的見地へのコミットは社会科学の先行条件である。何ら自動的な科学的見地は一切存在せず，我々が社会科学に回答を要求する問いは文化に起源を有し，特別の社会科学がこれらの関心事の下位集合を省察する。要するに，ウェーバーにとって，「沢山のアプローチ」は社会科学の状態であり，社会科学は途方もなく若く，文化的に所与の予備的に設定された多様な出発点の範囲内でのみ結論に到達しうる。科学であるためには全領域を統合する独自に通用する概念の整序を必要とするという，新カント派の科学哲学の考えに執着するジンメルさえ，階級利害と他の政治的違いによって動機づけられた見地は，すでに総合の試みがかなえられない多様なアプローチを生み出したが故に，社会科学においては

これは不可能であることに気づいていた。

マートンは沢山のアプローチスローガンでもって，上記の関心事に反響しているように思われる。彼はマンハイムについての議論のなかで，ウェーバーに現出したような視点の問題を自覚していたことを示している。マートンはそこではマンハイムは後期になって，その主題のウェーバー的見地に後戻りしていると述べている（1968e：560n25）。マートンはその主題に関してウェーバーにもジンメルにも語りかけることはなかった。ジンメルの主要な方法論論文（[1917]1950）は引用されることはなかった。ウェーバーの方法論的著作は1930年代に科学に関する争点のコンテキストで直接引用されている。そこで我々はこれらの論文に関するマートンの省察を持たないばかりでなく，彼の反応の記録も一切持たない。ドイツの社会学大系の構築――ウイーゼ，フィアカント等によって提出された縮減できないほど多様な枠組み――は彼には回避される運命であるように見えた。彼はジンメルがしたように，なぜそれが起こったか尋ねたり，この問いへのウェーバーの入念な回答に語りかけることもしなかった。

方法論的問題に関する古典学者との対話は，要するにマートンのスタイルではなかった。おそらく社会学が新しいスタートを切ったという考えの1940年代の興奮とともに，「その創設者を忘れることを躊躇する科学は滅びる」というホワイトヘッドのスローガンがこれらの問題に適用されたのであろう。しかし，これらの問題に関する古典学者との対話の不在には例外があった。マートンはコロンビア学派一般と同様に，デュルケムの『自殺論（[1930]1951)』に魅了された。ジェームズ・コールマンは，マートンの社会学教育の高得点の一つとして大学院ゼミでのこのテキストについてのマートンによる詳細な尋問の強さと為になったことを思い起こしている（Coleman 1990：29）[8]。疑いもなく，マートンはデュルケム同様，アプローチの多様性の問題は確実な経験的結果に集中することによって解決されうると考えた。本稿のエピグラフとしてマートンの引用文のなかに，「アプローチ」と「成果」が併記されている。しかしここでもまた謎が存在する。デュルケムが自分のしていることを自分自身で考察している，彼の方法論的テキスト『社会学的方法の規準（1895)』がコロンビア学派の主要関心事となることが決してなかった。彼らがそれに代わると考えたものが何か決して明確ではない。

デュルケムの扱いはそれ自身の魅力的なサブプロット（脚本の脇筋）を提供する。テキストはコロンビア大学で長く吟味された。理論家によってだけでなく，学部のサーベイ統計家達によっても洗練された仕方で議論された。Rennis Likert，Samuel A. Stoufferとともに経歴

8 ［訳注］ターナーは原文ではMerton/Coleman/Rossi（eds.）の序文でColemanが語ったものと勘違いした。リプライ（2009：485）で訂正している。訳文ではその訂正に倣って直してある。

をスタートさせたが，1950 年代のコロンビア大学の中心人物となった Herbert Hyman は，『自殺論』の分析を解釈する問題に彼の『サーベイ設計と分析（1955）』の 2 つの章を充てている。ハイマンはその書物の主要な特徴を理解した。「デュルケムは全く同じ種類の証拠で一見したところ根拠づけられているように見える「社会的」仮説群に好意を寄せて，自殺と十分に相関のある気候や緯度に関する仮説を排除していること」。もし我々が当時および現在の社会学に一般的な基準を用いれば，デュルケムは一貫していない（矛盾している）という結論を下すだろう。彼の仮説は彼が拒絶する仮説と同様確証されていない。ハイマンは問題を指摘し，その含意を回避しようとする。

> 学生はデュルケムによってフォローされた設計のなかに一つの奇妙な特徴に気づいたかも知れない。その唯一のねらいが社会的原因以外のすべての可能な説明の否認にある「間接的」テストのすべてを完了した後で，彼は社会的要因の影響の直接的テストに進んでいる。人はこの事実を思案する（Hyman 1955：230-31）。

「間接的」「直接的」という用語はハイマンにデュルケムを矛盾でなく一貫している，ただしほんの部分的にだが，可能にする。ハイマンは Cohen/Nagel（1934）の標準的教科書に述べられたミルとゼッターバーグの『社会学における理論と検証（1954）』を引いている[9]。その方法は質問紙調査では知られていないことを彼は認めている。彼が引くことができた唯一の例は，スコットランド移民の研究であった。スコットランド内部に効果の一貫した差異が一切存在しないことを明らかにすることによって，原因となりうる諸要因を排除して，残りの効果はスコットランドの農村生活に関係したグローバルな社会運動の結果であるという結論に導いた。デュルケムは我々に唯一の代替肢，社会的原因の彼のリストを強いる，非社会的原因を排除する間接的テストを使用した。

この説明は二つの理由でそれ自体が奇妙である。一つには，それは非対称であるから。ハイマンのロジックによれば，デュルケムが社会的原因から出発していたならば，彼は容易くそれを除外でき，他の説明の一つを直接の証拠に基づいて受け入れられる必要のある残る説明とすることができよう。その直接の証拠は，言明が統計的相関と見なされるなら，どの点から見てもデュルケムが好む主張の証拠と同じくらい好ましいものであるから。第二に，デュルケムは，社会的世界の複雑さが残余法の使用を不可能にし，共変法（concomitant variation）という別な方法を適切なものとすることを理由に，残余法ならびに間接的証明を

[9] 間接的テストのリファレンスはおそらく残余法を指すだろうが，彼は他の排除法，差異法ならびに一致と差異法の組み合わせを念頭に置いていたかも知れない。

伴う他のすべての方法を論難している。しかしそれが単なる統計的相関への適用と見なされるなら，この方法を彼が使用する気持ちが理解できない。彼の議論が次の通りの場合にのみ理解できる。つまり，自殺率に関して非社会的変数が不完全にしか相関しない（つまり因果的でない)。ある社会的変数が完全に相関する，つまり真の原因である。正しい回答は，デュルケムの基準は社会学に一般的な基準と違う。彼にとって，問題は次の点である。彼の考える相関は完全な法則である。不完全な場合にもほぼ完全に近い法則である。説明する度合いを一段階上げることは自殺率を一段階上げる。人は実際の例外に対するデュルケムの取り扱いに異議を唱えるものの，例外（少なくとも反証例）は一切存在しない。要するに，デュルケムにとっては，ハイマンにとってとは違って，これらが科学の実際の法則（real law, true generalization）なのである。

コロンビア学派社会学がかれらのアイコン的古典研究の寄せ集めを作った事実は，彼らの作業方法に特に現れている。デュルケムがミルと自分の違いを説明している『社会学的方法の規準（1895)』をハイマンは読むことを決して厭わなかったことに納得がいくだろう。しかし一連の同じく誤謬を含んだ解釈を刊行した（1958, 1965, 1975, 1985）コロンビア大学で博士号取得したHannan Selvin もまた上記の主要な文章を見落としているように思われる。マートンは自分から『社会学的方法の規準（1895)』に取り組んだことはないし，コロンビア大学学生に教えられている説明は間違っていることに気づいていた。しかし実際の方法論テキスト――ミルに言及しないでも，デュルケム，ウェーバー，ジンメル ――へのこの無頓着は彼らがどのように進めたかの理解にとっては重要である。コロンビアの社会学は上記の古典的方法論問題に自家製の回答，正しい，今日的，現代社会学に関連した回答を行おうとし，旧来の困難な問題と格闘する必要を認めなかった。

ゼッターバーグ：コロンビア・モデルのスポークスマンか？

それでは自家製版とはどんなものか。それを歴史的に独特のものにしたのは何か。これらは明確な回答を手に入れるのは厄介なことが判明している。ハイマンがゼッターバーグに言及しているのは，方法史へのもう一つの標準的なアプローチを指している。「主要な人物の教え子と追随者によって与えられた方法の解明と適用を見よ」。そしてこのアプローチは翻って，方法史を理解するためのもう一つの標準的な方法を指している。「その方法論者によって使用されている公式構造を見よ」。公式構造の問題は不可解にみえるかもしれないが，依然としてそれは問題の核心である。マートンは「系統的な」社会学理論を要求した。「系統的」は一見して，理論の諸要素間に何らかの種類の論理的関係を含意するように思われる。我々はこの用法は標準的でなく，曖昧な用法に含まれることにすぐに気づくが，「公式化」とい

う用語すら使用している。パーソンズにとって，論理的関係とは網羅的分類の公式構造のそれであり，論理はタイプ分けの論理であり，構築は過渡的（暫定的）的と見なされた。パーソンズは社会学者が彼らの理論を微分方程式で述べる将来の希望を抱いていた。マートンは類型，概念スキーム構築アプローチを拒絶したが，彼の拒絶は何らかの種類の方法原理があるのかどうか不明な仕方で述べられている。これはマートンの方法論の著述ではよく起こることである。ここや別な箇所で，マートンは経験的調査の実情に訴え，彼が批判的方法的戦略を糾弾する傾向があるが，彼が気に入っている類の調査の大まかな点は何で，それがどこに導くかは触れない。これは彼の批判者, 特に『社会学的想像力（1959)』でこの点を指摘し，60 年代世代の精神にそれを固着させた C. Wright Mills の急所である。

この時期のコロンビア社会学によって是認された類の調査の実際の状態は，ベレルソン / スタイナーによって産出された経験的知見の著名な目録によって最もうまく代表されるだろう。これは『人間行動 : 科学的知見の目録（1964)』として出版された。この書物は，多少堅固な行動科学の統計的知見の集合であった。それは多くの人々にとって，「行動科学」の名称の下に社会科学（the social discipline）を戦後方向付けし直す革新の約束の失敗を提示した。もちろんマートン自身はこの革新の提唱者の一人であり，新たに設立されたフォード財団に対する重要なレポート（1949）のなかでそれを擁護した。落胆した者と批判者の見地からは，その革新は無関係で理論的に無意味な研究の束にすぎなかった。そこに欠けていたのは，目録の中身の間の何らかの論理的ないし系統的なつながりであった。

中範囲の理論は戦後初期のこの状況への応答，そして少なくともある種の理論へのその将来の効用の観点から見たこのリサーチの価値の擁護であった。しかしそれを一つの応答と理解するには，それが約束する知見間の論理的関係ないし系統性はどんな種類のものかという問いに回答することを要求する。もし我々がその問題が論理的形式のものとみなすならば，コロンビアモデルは理論がとるべきはどんな形式かという問いに対する回答を持っていた。「x の値が大きくなるほど，y の値が大きくなる」という形式の言明。これはマートンがデュルケムを解説するためにある事例で用いた形式である。しかしそれは彼がこの形式を用いた唯一の場所である。彼の弟子はもっと頻繁にそれを用いた。例えば，Lewis Coser は『社会的闘争の機能（1956)』のなかで，ジンメルの翻訳の章から始めて，注釈し，それをコロンビア大学で用いられている用語で公式化するサマリーで締めくくっている。上記のサマリーの多くは，「x の値が大きくなるほど，y の値が大きくなる」の言明に似ている。

> 集団への参与が大きいほど，成員の人格包絡が大きいほど，激しい紛争行動に従事する機会を多く提供し，従って不忠に対するますます激しい反応をみせる（Coser

1956：72)。

この言明はコロンビア大学の隠語に伴う問題を例証している。この形の言明は経験的テストを引き出すには有用であるかもしれないが――タームの操作的定義を与え，データを集め，そのような関係があるかどうかを見るためにクロス表ないし相関表を作るだけでよい――，もしこれが理論的言明間に論理的関係が含まれていると想定するなら，系統化の目的には役立たない。

マートン―ラザースフェルドの用法と区別された公式化の標準的意味は次のものである。公式化された理論の論理的関係は，（言明の意味の何らかの特徴によってよりもむしろ）理論のなかの言明の形式の効能virtueによってのみ保持されるものである。コーザーの言明は，形式に基づいて，我々に他の言明――例えば首尾一貫性――についての推論を引き出すことを可能にする形式ではない。一部は「xの値が大きくなるほど，yの値が大きくなる」に似ているが，他――「紛争は集団の境界とアイデンティティを設定し維持する働きがある(Coser 1956：38)」は似ていない。これは単純なケースであるが，標準的な表示にどのようにして公式化されるか不明である。他の言明はもっと複雑である。

反目は通常は親密な関係の要素として含まれる。収斂の動機付けと離散の動機付けは実際の関係で混合しているので，関係はスイゲネリスという統一的性質を有しながら，動機付けは分類ないし分析のためにのみ区別されうる（Coser 1956：64)。

我々はそのような言明が互いにどのように関連するかリーズナブルな推論をする用語の巧妙さに何らかの複雑な直感の感情を持つ必要がある。

しかしそのような関心事に対する用意周到で，理にかなったマートン的反応が存在する。マートンは，科学的理論の論理的先行要件を提示する方法についての議論は沢山存在するが，それらはあまりに抽象水準が高いので，これらの格言を現行の社会学的調査に翻訳する見込みは望外のもののように思われる（1949：140)，と述べている。しかしながら，上記の基準の近似物は全く不在なわけではない（1949：150）と述べ，正確さと論理的一貫性への圧力は非生産的な活動に導くことがあると警告しながら，そのような基準の正当性はその間違った使用によって無効にされることはないと結論している（1949：153)。彼はまた今日ないし19世紀の自然科学にふさわしい基準を社会科学に適用するのが間違っているのは，その基準が間違っているためでなく，今日の社会科学が近代初期の科学の発達段階と似た段階にあるからである，と述べている。

しかしマートンのこの形式の使用は潜在的混乱を警告する赤旗を揚げている。我々が見てきたように，「x の値が大きくなるほど，y の値が大きくなる」は，それを統計的関連を指すものと解読したハイマンよりも，それを確定的なものと見なしたデュルケムとは幾分異なったものを意味した。それはマートンに，あるいはコロンビア大学の社会学者達の間に，どんなものに受け取られたのか。時には x が y と相関することを意味し，時にはもっと強い何かを意味したのか。あるいはその言明が意味するものは何かの問いに一貫した回答が一切存在しないのか。人はマートンのなかにこの問いに対する回答を一切見いだせない。しかしマートン自身が Berger/Zeldich/Anderson のテキスト（1966）と並んで肯定的に引いているテキスト，ゼッターバーグの『社会学の理論と検証』のなかに回答が見いだされる（1968d：60-61）。ゼッターバーグのテキストは当時最も読まれ酷評されたテキストの一つであった。それは 1954 年の初版以来いくつか版を重ねた。それはコロンビア大学の社会学者達によって引用され，ゼッターバーグは彼のアメリカのキャリアのほぼすべての期間にわたって（1953～1964）[10] コロンビア大学に雇用された。このテキストとマートンの関係はマートンの見解とコロンビア学派の理論構築モデルとの関係同様はっきりしないが，このテキストを考察することは少なくとも問題点がどこにあるかを明らかにする。

ゼッターバーグの本は社会学への論理実証主義の適用ではない。彼は当時の哲学文献に一度だけ言及しているものの，哲学とは距離を置いている。それはむしろコロンビアモデルを自らの用語で要約しようとする試みである。ゼッターバーグは George Lundberg，F. Stuart Chapin によってインスパイヤされた社会学の厳格な方法を学習した者として自らのストーリーを語っているが，このタイプの大半の社会学的リサーチを意義の欠けているものとみなした。コロンビア大学では，彼は社会科学を前進させる仕方をめぐるラザースフェルドとマートンの議論のマートンサイドとして彼が特徴づけたものを発見した。要するに，その本は改宗者の著作である。この本は私が本稿のエピグラフとして使用した，マートンからの同じ引用文で始まっている。中範囲理論の地位と意味の問題はゼッターバーグの営みを定義している。中範囲理論は部分理論である。しかし，社会学的思考の地平はこれらの理論をもっと包括的な全体に統合する問題のように見える（1954：2）。すなわちこれはマートンが総合（consolidation）と呼んだ問題である。

我々は「x の値が大きくなるほど, y の値も大きくなる」という言明の意味の問いへのゼッ

[10] 1953～1954 年一般教育の講師として，1954～1957 年専門学部の助教授として，1957～1964 年准教授として雇用された。ゼッターバーグはオハイオ大学社会学部長在職 2 年間に，大半は若手，若干の終身社会学者のパージと排斥を開始したので，人物として広く酷評されている。

ターバーグの回答から始める。ゼッターバーグは社会学は確定論的に恒常的な説明をほとんど持っていないことを認めている。そこで彼は相関的ないし次第に度合いを増すカテゴリー分析を伴う結果を確率が増すことに関する言明に翻訳する。彼があたえる事例はStouferの『アメリカの兵士（1949）』から引いたものである。軍の規律に関して低い同調者グループに分類される兵士は，同調に関して次に高いグループの兵士よりも昇進率が低く，後者は最も高い同調グループよりも昇進率が低かった（1954：37-38）。このケースでは，方法はデュルケムから直接のもので，関係は完全であるが3つのカテゴリーしか含まない。「昇進率は同調率とともに高くなる」という命題の厳密な検証ではなかった。命題が蓋然的なものとしてまじめに意図されたなら，昇進確率の事実は同調の測定事実（欠損値を含む）によって厳密に指し示され，両者を関連づける計量的法則が存在するだろう。そしてこの場合，何かがそれらから引き出されるように，それが他の理論命題と関連づけられるように公式化されるだろう。生憎なことに，個人の同調は個人の昇進確率の正確な指標ではなく，せいぜいのところ，同調テストで同じ点数をとった兵士群の成員が昇進する確率の指標である。すなわち確かに，相関である。対照的にデュルケムはこの結果を法則と呼ぶ根拠を持っていた。デュルケムは自殺率を考察したときに，集合体の属性を測定していると考えた。そこで，彼の規則性は真であり，真実であった。

ゼッターバーグのこの問題の解決はデュルケムとハイマンの間に位置した。彼は「xの値が大きくなるほど，yの値も大きくなる」という言明を確率の増加に関する言明として扱い，そのような言明は帰無仮説の通常の統計的テストによって弱く検証されうると理由づけた[11]。彼が提示している証拠は帰無仮説のカイ二乗検定の結果であるという事実にもかかわらず，これは彼に同調－昇進の結びつきをうまく検証された命題として扱うことを可能にした。彼はそれから一つの重要なステップを追加した。お互いに論理的に関連づけられる似たような命題群は，あるユニットのなかに命題を加えた結果全体として一層高く検証されると述べている。彼の理由付けは，演繹される命題はもとの命題と同じ確率を持つので，仮説のもつ含意が検証されるときにはいつでも，結果は実質的に統計的検定の再現である。10個の関係命題を検証することは最初の命題を10度検証することと同じ程度に善である（1954：75）。

[11] 「xの値が大きくなるほど，yの値も大きくなる」のこの確率論的構成物の文字通りの意味は，確率のパタンが，その経験的一般化がそれに関してなされる集団のすべての下位集合に関して当てはまるだろうというものである。統計的テストは実際のデータがそれから抽出されるものである母集団というアイデアを伴い，確率の立言を宇宙に関する主張にし，サンプルがこの母集団からのものかどうかに関するテストである。なぜこれが大切か。説明は一般的主張の含意を伴うからである。しかし任意の職位ないしは実際の職位者群に関する限定的な何も母集団に関する主張によって直接に含意されない。そこでこれらの主張は厳密な意味で説明していないし，任意の実際のデータ集合は母集団に関する無限に大きな主張群と矛盾しない傾向がある。

> これは単一命題を検証することが比較的難しく，理論（複数の命題の体系）を検証することが比較的簡単である理由の説明である。我々は命題の任意のものにささやかな経験的支持をあたえることができるが，単独でとりあげられた任意のものに多大の信頼を寄せるにはこれでは通常は十分でない。しかし理論はこれらのささやかな支持を整理統合してその公準の高い支持に変えることができる（1954：76；1963：163；邦訳：178）。

この説明の問題点は，命題が（演繹的に関連づけられるのに必要な文字通りの意味で）実は真ではないという点である。同調の各々の増加が昇進の確率を産み出すという趣旨の命題の文字通りの真理のテストは，帰無仮説をカイ二乗に基づいて棄却するよりはるかに厳しいものである。もしその命題が真理であるなら，同調の増加にいかなる例外も許さない，同調と昇進の関係の普遍的な一般化であろう。従って，それらがカイ二乗から得る最もささやかな支持は最もささやかというよりむしろ無関係（不支持）である。x と y の関連に関する帰無仮説をテストし，x と y の関連に関する普遍的な形式の理論的言明は，「x が上昇するときに，y が上昇しない」という無差別の仮説と「x が上昇するときに，常に y が上昇するという両者以外の何らの関連が存在しない」という普遍的主張のあいだに逆接（disjunction）という論理的関係が存在する場合にのみ機能する，という結論を引き出す。しかしもちろんこれは正しくない。実は，この時代の行動科学を特徴づける，帰無仮説をテストし，それから理論的結論を引き出す手続きは，Kurt Danziger のいうような，「科学的方法の軌跡」（1990：154）を代表するものである。

しかし基礎論理学を無視する以外にこの問題からの脱出法が存在する。我々は上記の全く弱い種類の検証は大いに初歩的なものであり，非常に荒削りの材料からかつてはリファインされたかも知れない類の法則を単に述べているに過ぎない，と主張できる。この像は思わず引き込まれるそれである。それは社会学がベレルソン / スタイナータイプの非常にささやかな知見を理論的に統合することによって，前進することができ，かくしてそれらを構成する命題よりもうまく検証されている理論を生み出すことを述べている。我々は，その理論の欠点はその未熟さの所産であり，道を下ると，それらは未熟さが減じられたものに，文字通りの真理に近づき，次第に他の理論で固められると，いうこともできる。これはマートンの戦略であった。しかし彼が実際にこの戦略が機能すると信じていたかどうかは，疑問である。

マートンが実際に何を信じていたかを確定する問題の一部は，公式主義，公式化の全作業に彼の謎の関係を考察することによって眺めることができる。謎の関係というのは，公式化を構築する中範囲理論に関する彼のアイデアを応用した人物を褒め称える一方で，公式化に個人的に距離をおきつづけているように見えるからである。『社会理論と社会構造のポーラ

ンド版（1982）』の序文で，彼は哲学の訓練を受けた公式論理学者でその主要な著作がマルクス主義の功利的個人主義者版を提供しようとしたポーランドの社会学者 Andrzej Malewski を褒め称えている[12]。この賞賛はポーランド読者へのこびへつらいではなかった。1975年の論文「社会学の構造分析」のなかで，当時亡くなって久しかったマレウスキーを再び引いている（1975：33）。しかし同じ論文で，彼は経済学と心理学を除く社会科学が「堅く編み込まれた理論体系」の理想を洗練したことを語っている（1975：42）[13]。

もう一つの証拠は我々が最後の審判問題と呼ぶものについてのマートンの注釈に由来する。系統的な理論の提唱者は最後の審判の日を遠い未来に追いやることができるが，システム化が何を意味するかを永遠に曖昧にすることはオプションではない。公理化の理想は通常のオプションであり，マートンにおいては顕著ではなくとも明らかに存在していた。公然と拒絶してはいない。マレウスキーを褒めたのは他ならないそのためであり，この方向でのブラウの努力を拒絶しなかった。ゼッターバーグ自身を含む理論構築のコロンビアモデルの豊富な追随者達を勘当したりはしなかった。その上，マートンのなかに系統的な社会理論の最後の審判として何らかの種類の公理的体系化の代替肢が存在していたなら，それは決して結晶化しなかった。

最後の審判問題への回答を要求せず，系統的な中範囲理論をもっと明るい未来への助走としてのそのような理論の価値とは別に，単なる経験的一般化に認知的価値を加えたものと理解する解釈も存在する。類似のアプローチは，公式化ないし演繹理論について忘却して，「x の価値が大きくなるほど，y の価値も大きくなる」という言明を上記の社会学者達が扱う事実の類と合致する仕方で扱う，つまりそれらをカテゴリーがある程度の予測力を持つ相関，統計的関連，表に関する単なる言明として扱う。上記の関連は変数間の他の関係についてのいかなるものをも強く正当化せず，相関が非常に高いケースを除いて，演繹を許さない。これは Costner/Leik の非常に影響力のあった論文「公理理論からの演繹」の見地である。そ

12〔訳注〕このように表現したのは，Der empirische Gehalt der Theorie des historischen Materialismus（1957）の論文執筆者であることが念頭にあるのだろう。1982年と1975年の時期後先が逆になっている。

Andrzej Malewski の著作に *Verhalten und Interaktion. Die Theorie des Verhaltens und das sozialwissenschaftlichen Integration.*（Ubersetzung aus dem Polnischen von Wolfgang Wehrstedt）J.C.B. Mohr 1967 がある。

Hans Zetterberg の前掲書に Malewski の下記の英語論文が言及されている。

1965 “Levels of Generality in Sociological Theory” in Hans L. Zetterberg/ Gerda Lorentz（eds.）*A Symposium on Theory and Theory Construction in Sociology.*　Totowa, N.J.：The Bedminster Press.

1962 “Two Models of Sociology” *The Polish Sociological Bulletin.* 1：（H. Albert（H.g.）*Theorie und Realitat.* Mohr：Tubingen 1964, S.103-115.）

13 Merton が Clark Hull をお手本として繰り返し言及しているのは，一層それを物語っている。哲学者 Kenneth Spence の影響下で，Hull は構造と機能の発想を伴う公準の体系を構想している。ところで我々がのちに知るように，マートン自身の哲学の対話者 Ernest Nagel と同様，Spence は Hull の公理化の試みをナンセンスとして退けている。

れは「A と C」の関係記号を保証するために「A と B」「B と C」の相関がどれだけ高いことが必要かを図で示した。

統計的関連の事実はほとんど演繹的意義を持たないが，それは何かを正当化する。概念的に互いに関連したそのような関係の集合は単一の表や単独で取り上げられた相関よりも認識上の重みをもつ。この意味でゼッターバーグは正しい。その上，「A と B」「B と C」の相関が存在することは，それらの相関が弱いものだとしても，「A と C」が相関する可能性を高める[14]。もし社会学の状況が弱い関連を扱う事柄である場合，諸部分の結びつきを正当化するために上記の弱い関連を使用する理論構築は，その関連がそれに帰属される因果的実在の類を持つことを証明する方法として，ベレルソン / スタイナー流の弱い関連を棚卸しするものよりベターである。たとえささやかなものであっても，関連した経験的主張が個別の主張に相関の証拠の弱い経験的な支持に加えて，お互いにあたえ合うある程度の支持が存在する。ゼッターバーグはなぜこの支持が必要かを理解していた。交絡は排除することが厄介な代替仮説が常に存在することを意味した。これはマートンの著作では表面化しないがラザースフェルドにとっては，実はコロンビア・プロジェクト全体にとって中心的な，重要な争点である。それは交絡の問題に代替的アプローチを提供する。当該の命題を弱く正当化する若干の弱く確証された命題を持つ理論の観点から理解されうる関連は，交絡因子のケースである潜在的な因果的作用の事実によってのみ支持されるものよりもベターに支持されている。我々がそれをマートンがたまたまの当事者にすぎず，ラザースフェルドが関与した主要な方法論論争のコンテキストに位置づける時にのみ，これのレリバンスが明白になる。

ラザースフェルドのサイモン問題

社会科学の偉大な方法的著作[15]は，これらの著者が社会科学の主要著作を産出するのと同時に執筆されたり，改訂された。これらのテキストに共通のアプローチは，方法的著作を例証するために，また反証をするために実質的著作を利用している点である。方法論に関するエッセーの期間中，マートンはもちろん経験的リサーチに強く関わりを持ったり，経験的リサーチに協力したり，自分からつながりを持った。彼の著述はコロンビア大学に就任し，ラザースフェルドと共同したのちの彼の体験を反映している。両者の関係は複雑である。マートンはしばしばラザースフェルドの授業を代行した。教えるという観点からは両者は多少と

14 ［訳注］ゼッターバーグのこの命題導出に対して，「A と C」の相関は必ずしも引き出せない，とコストナー／ライク（1964），ブレーラック（1969）は指摘する。むしろ今ではこちらの方が定説だそうである（本学人間科学科　神林氏教示）。

15 Mill［1843］*System of Logic* VI , William Jevons［1874］*Principles of Sciene*, Weber［1922］*Wissenschaftlehre,* Durkheim［1895］*Regle*.

も uinfied front を提示した。この点で両者は理論構築のコロンビアモデルに記憶される。しかしラザースフェルドに特有の関心事と彼自身の知的貢献はマートンのそれとは異なっていた。

ラザースフェルドの経歴の一つの特徴は我々がたった今触れたばかりの問題に特に関わっている。交絡の問題と中範囲理論は何の代替肢かという問い。ラザースフェルドは自分の方法的著作を Herbert Simon とのライバル関係の観点から理解している。サイモンの論文「因果関係の定義に関して（1952）」はそれが言及している「因果序列と同定可能性（1963）」との関連で読むと初めてわかるが，前者はラザースフェルドが Ernest Nagel とともに教えた合同授業で，1953 年に早くも教えられた。サイモンの「疑似相関：因果的解釈（1954）」はラザースフェルドを承認し，ラザースフェルドの代替肢である「エラボレーション・モデル」に言及している。ラザースフェルドとサイモンのこの重要なライバル関係は，中範囲理論の議論ならびに続くアメリカ社会学史の双方に大いに関係する。しかしそれとマートンとの関係は少なくとも活字で入手できる資料からは謎である。マートンは組織論のコンテキストを除いてサイモンに言及することはないし，サイモンの風穴をあけた論文後に成長した方法群を無視し，交絡の問題，原因の正真正銘さ，関連する問題に関してほとんど述べていない。

ラザースフェルド・プロジェクトとマートンの関係はどうだったか，両者の関係は当時の他者にはどのように映ったか。彼は何を理解したのか。彼は何に帰依したのか。理論と方法が大学院プログラムに提示された仕方の故に，院生はコロンビアのやり方を多少とも首尾一貫した全体と見なす傾向があった。ラザースフェルド陣営の人々は貢献者よりもむしろラザースフェルド・プログラムの提唱者と見る傾向があった。ハイマンは次のようにコメントしている。

> マートンは説得的ではあるものの，個別の応用調査プロジェクトもまた科学的価値を持つことができることだけを証明しながら，個別の研究から科学的副産物を引き出した。しかしながら，1948 年に社会学理論の発展における応用リサーチの価値に賛成する雄弁な一般的議論を行い，それを官庁のプロジェクトの事例，その他の博学な索引で記録した。『社会理論と社会構造』の改訂版が登場し，メッセージは英語版および他国言語版のなかで数年にわたって普及した（Hyman 1991：204）。

ラザースフェルドは理論に何ら関心を示さず，その語の通常の意味での公式化に興味も理解も示さなかった。コロンビアで訓練を受けた若き科学哲学者 Patrick Suppes は，ラザースフェルドと慎ましい関係を持ち，公理的測定理論の彼の書いた草稿をラザースフェルドに

送った。ラザースフェルドはこの草稿に応答しなかった。おそらく読まなかったものと思われる。ラザースフェルドが1959年の世界社会学会議で彼が理論と呼ぶ数理モデルを提示したとき，それは用語の通常受け入れられている意味での理論ではないと，スッペスから叱責を受けた（ISA 1961 : 350-51）。しかしこの関心の欠如は，ネーゲルと一緒に数年間持った授業と彼がスポンサーになった，方法論という大きな問題を検討する，教員のための討論集団によって裏切られた。彼と彼の協力者がプロデュースしたテキスト『社会調査の言語（1955）』はこれを反映した。言語というタームは社会調査の領域のタームを定義するという論理実証主義に近い野心を意味した。

マートンは上記の試みの主要な参加者ではなかった。しかしそれらに欠席したわけでもなかった。彼はネーゲルとラザースフェルドの合同授業に担当が記載された参加者の一人であり，ある思い出されるケースで，ネーゲルがちんぷんかんぷんと批判したパーソンズから文章を引用したネーゲルに刃向かった。マートンはパーソンズをエレガントに擁護と解明を与えることによって応じた[16]。ラザースフェルドはこんなことをしなかっただろう，いやしようと思えば出来たかも知れない。ここではまだ謎である。彼の口述史のなかで，ラザースフェルドは，マートンは中範囲理論を超えた何かがあると信じていなかったので，中範囲理論はミスリーデングなタームであると注釈している。ラザースフェルドは確かに中範囲理論を超えた何かがあると信じていなかった。マートンも同じ見解を持っていた，それともパーソンズに対する彼の丁重な譲歩は本物だったのか。もっと大事なのは，マートン自身がラザースフェルドが関わった問題に関してどう理解し，どう思っていたのか。彼らのパートナーシップの分業は理論と方法の問題に関する彼らが見解を共有していたことを反映するのか，それとも関心がほとんど重複せずにお互いが有用だった事柄なのか。彼らのいずれかがコロンビア大学に就任する前の，彼らの初期の接触はサーベイ測定の客観性に対する関心の共有であった。しかし彼らの後半の交流パタンは彼らが見解を交わし共通の見解を練り上げるという関心事というより，彼らのアイデンティティと焦点は別であるが故に，対立しないで仲良くするという different concerns であった。

しかしながら，ラザースフェルドは重要な点で中範囲理論のアイデアとその最終的運命に関わっていた。中範囲理論家たちが作業をするための材料のモデルは，ラザースフェルドによってなされた研究の類のものであった。状況の重要な側面を表現するものと考えられた概念にマッチする尺度や分類を開発した単一のサーベイ・プロジェクトの類，それは通常2×2表で表現され，コロンビア大学ではエラボレーションと呼ばれたモデルの観点から理由付

[16] この出来事は，その授業の学生であったコロンビア大学の科学哲学専攻の Howard Smoker が私に書いて寄こしたものである。

けがなされた。エラボレーションは，現出した関連が消滅するか逆転するかどうかを見るために，ある一変数関連に交絡因子による分類を付加することである。その推論はのちにシンプソン逆説として知られるようになったものに基づいている。統計学の事柄としては新奇性はない。コアの推論は20世紀前半の標準的統計学テキストからとったもので，著者の名，Yule/Kendallによってよく知られるものである。そこでは分割（partialling）と呼称された（Yule/Kendall 1937）。このタイプの推論の因果状況への複雑な適用は1920年代に社会学に起こったが，推論自体は社会学においても目新しいものではなかった。エラボレーションモデルのポイントは，交絡因子が疑われるコントロール変数が導入されたとき，当初の0次相関が保持されるか消滅するかを確定することにあった。コントロール変数は他の変数の因果的先行物であると見なされるなら，それは関連を説明する。観察された関連が，今や疑似的と見なされる関連の結果である。コントロール変数が当初の2変数の媒介変数と想定されるとき，インタープリテーション（媒介）という用語が用いられる。

キイタームは「想定する」である。この種の分析の聖盃は，実際の因果構造がどうなっているかを確定するために，何が何を引き起こすかについての我々の先有する観念よりも，統計学を手に入れることである[17]。ラザースフェルドのモデルは実験であり，彼はサーベイは実験に等しい，つまり関係する変数が含まれ，すべての可能な因果関係が理解される，と想定しなければならなかった。しかしコントロールされないサーベイ状況をコントロールされた実験と似ているとする想定は致命的弱点である。ハイマンは認めている。

> 読者は「発展の連鎖や形象を疑似の事例から区別する系統的な基準が何ら存在しない」この議論で数度にわたって指摘したジレンマの故に，幾分心落ちつかなさを感じるだろう。我々はこのときまで公式の基準を設定できずに来た。著者とゼッターバーグは究極的に結実すれば文献で報じられることになる一つのアプローチに目下取り組んできている（1955：263n25）。

---

[17] ここでの因果アイデアの基底にあるコアは，デュルケムによってすら認識されていた長い歴史を持つ純効果のアイデアである（Turner 1997：29）。私は社会学における因果モデルの起源についてのAndrew Abbotの興味深い考察（1998）に同意しない。なぜなら彼は，力等についての社会学の方法論者の様々な言い回しは批判の価値がある初期の形而上学の様相を呈しているから。Judea Pearlが*Causality*（2000：139n）のなかで指摘しているように，「影響を受けない」因果関係は統計学のテキストで位置を見いだした唯一のcausal notionである。私がここで述べてきたように，サイモンを動機づけたコアアイデアは，因果性，あるいは非疑似性を確定するのは統計学だけであるという考えである。これが可能かどうか，あるいは何らかの最小限の因果情報が付加されるかどうか，はサイモンのブレーク・スルー論文以来これまで文献を動機づけてきた。パールは交絡confoundingのための統計テストを生み出そうとする多くの試みでテクニカルな問題を描写した。この問題への純粋に統計的な解決は成功に近づいたものの結局は失敗に終わった（2000：182-89）。皮肉なことに，パールの解決はギディングスによって与えられた解決策に逆戻りしている（Turner 2007：17）。

その結果は日の目を見なかった。問題はラザースフェルドの鞍の下の厄介者のままで残っている[18]。

ラザースフェルドはサイモンがこの問題を解決する大きなブレークスルーを行っていることを非常によく知っていた。因果的順序 causal ordering の主題に関するサイモンの論文は，彼がネーゲルとともに教授した講義のリーデングリストに含まれ，2 週にわたる宿題の主題であった。ネーゲルもラザースフェルドもその作品を別々の日に提示した。サイモンが行ったのは，変数間の関係を想定することでなく，関係の順序をいかに導出するかに考察を与えることであった。もちろんこれらの導出は仮定を必要とした。しかし仮定はさほど煩わしくなく，仮定される必要のさほどないものであった。サイモンの戦略は最小限の因果的知識，何かが他の何かの原因たり得ないという知識（例えばそれが時間的に先行しているが故に）に依拠していた。これは基本的にラザースフェルドのものとは異なっていた。それはあたかもそれが社会学で用いられた非公式な意味での「理論」に依拠していない。それが必要とした仮定は，誰も異議を申し立てない陳腐な背景知識に限定された。方法は仮説を検証するために考えられた発明された尺度が使用されたものの，他の目的のために集められた普通のデータで確定的な結果を生み出すためにも用いられることができた。

ラザースフェルドはサイモンを脅威と見た。ハイマンの『サーベイ設計と分析（1955)』の刊行に続くエピソードのなかで明らかにされたように，ラザースフェルドはサイモンを恐れていた。ハイマンはスタウファーの『アメリカの兵士（1949)』から引いた事例の観点からエラボレーション法を提示した。この本が登場したとき，BASR の見解の言明としてプロジェクトに一体化していたラザースフェルドは，一般性の高い事実をアプリオリなものとして扱うことによって，時間順序に並べられない原因を順序づける手続きの奇妙さについてハイマンによってなされたコメントに動転した。これはラザースフェルドのアイデアであった。それはエラボレーションの実践の恣意性を減じる一つの方法であった。ハイマンがこのアイデアを奇妙と提示したことをラザースフェルドは驚天動地と考え，なぜかを説明し，未発表の訂正稿は，そのような議論をたどる意思がありたどることのできる 2, 30 人に貸し出しされるべきとのべる長いメモを書いた。ラザースフェルドが気づかないことを欲した人物はサイモンであった。「私はその本が登場してから，ハーバート・サイモンのような人物が座って仕事を始めるといらいらした。これは実に当惑することだった[19]」。ラザースフェルドの

[18] 1963 年になってラザースフェルドは，ハイマンの疑似性に関する 2 つの章の問題点，対立点，不十分さに関する term paper を assign している。Terry N. Clark, A Terminological and Conceptual Analysis of the Central Elements of Ch. VI, VII in *Survey Design and Analysis,* Lazarsfeld Papers, Columbia University.

[19] Lazarsfeld から Hyman と Zetterberg 宛のメモ書き。1956, 5, 14（コロンビア大学所蔵，希少本と草稿，ボックス 20, Nagel Collected Papers（1930-1988）

サイモンへの強迫観念は数年間続いた。ラザースフェルドは Terry Clark に，ラザースフェルドのアプローチの方が優れたことをしていると主張することの出来るものを同定するねらいの下に，社会学に登場し始めていたサイモンに由来する構造方程式とエラボレーションモデルを比較する論文執筆を依頼した[20]。サイモンは，疑似性は因果的順序の問題の一部であるみなされ，かくして仮定によってではなく，データで決着がつけられうる問題に作り替えられることを示すことによってこの議論に勝利した（Simon 1954）。しかし，すくなくとも若干のケースでは仮定されねばならないよりもむしろ，因果的順序が引き出されることができるという事実は劇的変化であった。サイモンが仮定を立てることを要求し続けた事実は，ラザースフェルドに因果分析のこの特徴を強調するようにし向けた。

ハイマンの本でこの問題を理解しようとした人物 2, 30 人に対するラザースフェルドの言及が明言しているように，当時は方法論をめぐるこの闘争のより大きな意義は小さな集団を超えて明確にならなかった。マートンはおそらく知っているものの数に含まれないだろう。しかし余塵が治まった 1975 年に，マートンの弟子，コーザーは ASA 会長演説で，エスノメソドロジーとウィスコンシンモデル（それは地位達成にサイモン方法の展開形を適用したものだった）を攻撃した。地位達成の問題点は農村の人口流出問題に対する 19 世紀末の世界的関心事に起源を持つ。19 世紀の都市への大挙の移動の結果として，農村に残った人口の質の問題。この問題の研究は，どんな特性が残った人物から去った人物を区別する問題の研究に，どんな特性が人々を上昇移動させたかの問題に変容した。コーザーは正しくも用いられている方法は，コロンビアモデルにとって大きな脅威であることを理解した。彼らは同じ仕方で理論に依拠していない。仮定を正当化するには基礎的背景知識で十分である。彼らは中範囲理論に集積されうるベレルソン・スタイナータイプの知見目録を生成するために実験アナロジーを用いないし，測定する新しい概念を発明もしなかった。

機能主義の問題

マートンは上記の方法論上の問題自体には関与しなかった。しかし彼は 1960 年代によって提起された最もドラマチックな問題, 機能主義の消滅を取り上げることを余儀なくされた。これは個人的な要素を持った。ミルズの『社会学的想像力（1959）』とパーソンズの語句注

---

[20] Terry N. Clark Method File Part 1；シリーズ III　追加ファイル，コロンビア大学所蔵，希少本と草稿，ボックス 1960-74.　Simon Method, Lazarsfeld Papers.
　ラザースフェルドもまた自分の遺産がここで危機に瀕していることに気づいた。クラークがこの問題の他の究極的には勝者の側の歴史的背景を考察する博士論文の 1 章を提出したとき，ラザースフェルドは「お前は私の歴史を書いているのだ，Phil Hauser のではない」と注釈してそれが取り除かれることを要求した（Clark 1998：304）。ハウザーはギディングスとピアソンに，計量経済学サイドを通じてサイモンのブレークスルーに通じるオグバーンの相関の系譜の申し子である。

解礼賛主義（panglossianism）と無味乾燥への反動によってインスパイヤされた1960年代の学生たちは機能主義と実証主義を悪魔扱いした[21]。マートン自身，彼の弟子 Alvin Gouldner の変節を含む潮の変化に十分気づいていた。彼は1975年に刊行された論文「社会学の構造分析」でそれに応答した。そこでは彼は，通常糾弾される機能主義から自らを区別するように，自分自身のコミットメントを回顧的に再解釈している。この論考は見解は特有の遠回しであるものの，科学哲学とそれの社会学との関係についての彼の明確な議論を含んでいる。

この論考を理解するには，それが再解釈している先行する二つの論文を理解することが肝要である。第一のものは，「意図的社会行為の予期せざる結果（1936）」で，これはウェーバーに傑出したアイデアだが，多くの追随者，信奉者を見いだしたアイデアを取り上げた知性史の傑作である。第二のものは，「顕在的機能と潜在的機能（1949）」で，ポリテカルマシンの機能性の彼の有名な分析を始めて紹介したものである[22]。論理実証主義者はこの時期社会学の機能的説明に興味を示し，彼らの分析を社会学，特にマートンに適用する一連のこの主題の論考を生産した。その成果は現れている。

コロンビアの社会学に最も密着した科学哲学者は，Ernest Nagel であった。彼の世代の科学哲学者のなかでは最も知られた人物である。我々はすでに見てきたように，多年にわたって彼はラザースフェルドと授業を共同で担当してきた。マートンは『社会理論と社会構造』の後期の版（1968）で，機能分析に関するネーゲルの論文（1956）を引き合いに出し，「ネーゲルはマートンのパラダイムを，その様々な部分が生物学の機能的アプローチの諸要素といかに関係するかを明示することが意図された抽象的な名辞の集合の観点から公式化した（Merton 1949：138）」と説明している。しかし注意深く読むと，ネーゲルの論文はマートンの考えを肯定しているものではない。そのかわり，それはマートンの考えが実行に移せないことを明らかにしている。ネーゲルの見解は，機能主義者がルーチンに行っている主張を行う資格を得るには，法則の形をした沢山の理論を必要とする，というものであった。完璧な説明は，理論的考察を要求し，所与のシステムにとっての機能的という発想を充足していると見なされる均衡状態の集合を記述する法則を確定する。このいずれもマートンのなかに見いだされないし，そのような理論がどのようなものに行き着くか，人はそれらをどうやって手に入れるかに関する議論は一切ない。またネーゲルは潜在的—顕在的の区分に印象づけら

21〔訳注〕ターナーは，リジョインダーのなかで，ミルズの『社会学的想像力（1959）』ではマートンを名指しせず，理論学派と調査学派の間を忙しく立ち回ったステーツマンと述べていること（Mills 1959：110-111）に触れている。

22 ポリテカルマシンの事例のインスピレーションは，ラザースフェルドを魅了した一冊の本，政治的ボスの自叙伝で弁明書，「あなたはボス（Flynn 1947）」という題から得たように思われる。コロンビア大学蔵，希少本と草稿，Public Opinion Series 4, Box 1, Bryce, James, Lazarsfeld Papers.

れていない。彼は，主観的ねらいが彼にとって何ら特別の説明上の地位を持たないなら，潜在的-顕在的機能のマートンの区別は無意味であり，機能のすべてが潜在的機能の題目に属する，と指摘する（Nagel 1956：271)。機能主義的説明を完了するには，均衡状態の規定因子のようなものを特定する a full theory を必要とするという彼の議論と符合するように，マートンはそのような探求の完結した帰結よりもむしろ，予備段階の機能分析に主として興味を持っていることをネーゲルは観察している（Nagel 1956：263)。

上記の批判のポイントは「目的論的説明には halfway house（途中の休み屋）は一切存在せず，他の目的の観点から説明される目的の機構全体にコミットされることなしには，それらの利用法は一切存在しない」という点である。これは Nagel-Lazarsfeld の授業クラスで読まれた論文の一つでなされた指摘である。ヘンペルの類型に関する論文（1952）は，合理的行為の経済学理論の目的論的抽象ですら，説明的である行為の一般理論に根ざすことができないなら，説明的でない」と指摘している。マートンの場合，争点は完結であった。例えば，市政におけるボス・システムを機能的と語るには，ボス・システムは何にとって機能的であるか，どんなフィードバックメカニズムがボス・システムの機能性を保証するかに関する問い，これらのメカニズムが可能な機能的解決の最適ないし最大均衡のために上記のメカニズムがどのように選択されるかに関する問いにコミットする。Elster がのちに繰り返すように，これらはまさにマートンが答えていない問いである。それらはネーゲルがマートンの関心が主として説明の予備段階にあると彼が見誤った理由である。マートンが分析を完結するまで進めていたなら，ボス・システムが埋め込まれているより大きなシステムの理論を構築する必要があっただろう。これは満開の機能教義ないしシステム教義に導く途 the path である。要するに，中範囲理論が説明の終点と見なされる場合，機能主義と中範囲理論は論理的に両立しがたいプロジェクトである。

1975年の論文は1960年代の猛攻撃によって提起された上記の問題やその他の問題へのマートンの間接的な応答である。その中で，マートンは自分自身の見解を60年代の暴動とポスト実証主義科学哲学の勃興に照らして再解釈し，自らの立場を構造機能主義と区別するために，構造分析と呼ばれるパラダイムもどきのパースペクティブとフレーム化し直している。独自のアプローチとしてのこのパースペクテイブの擁護はその論文が集録された本のテーマであり，最近になってのマートン擁護（cf. Clark/Modgil/Modgil 1990）のテーマであった。方法史の観点からは，これは注目に値する降伏である。中範囲理論の約束は，アプローチが多過ぎ，到達した成果がほとんどないという問題から我々を解放することであった。BASR タイプのサーベイ結果に基づく経験的な一般化に集中し，それらからのアブダクションとそれらについての我々の理論的理解を他のコンテキストへの転移（transfer)，それから

これらの結果を理論的に系統化し，ある理論を他の理論と統合することによって，我々は多様な準拠枠を構築しようという社会学者の野心に由来する様々なアプローチの専横から解放された結論を手に入れることができるだろう。我々は今や，構造分析自体はアプローチのなかの一つであること，このアプローチの開発はマートンの主張する機能主義との決定的な違い，独自性のコアであること，彼が 1948 年末に自信たっぷりに宣言した理論的多元主義は，主観主義と無政府主義に堕しないなら良きことであると教えられる。

この譲歩を行うことは，社会学のあらゆる主要な実質的領域で吹き出してきたことが現実に傅くことに他ならなかった。各々の領域は首尾一貫した中範囲結果によって特徴づけられるのではなく，複数の競合するアプローチによって特徴づけられた。例えば，マートン自身が中範囲理論の有望さと包括理論の無意味さの a poster child として扱った逸脱は，アノミーに関する彼自身の影響力のあるアイデアのほかに，ラベリング理論，分化接触理論，権力理論等の十分に確立された見方を持っている。従って一つのアプローチを持つというアイデアに後退することは中範囲理論のコア・モチベーションに降参することであった。だがその議論は主要な曖昧さを抱えている。理論の多元主義はある範囲ではいいことであることを知っているが，構造分析のアイデアを他のパラダイムの補完的なアイデアと結びつけることは，「究極的だがまだ遠い理想である統一された包括理論に向かう謙虚な理論的地固めを行い続ける（1975 : 52）」ことを助けるであろうことを知っている。その到来は依然として究極目標に見えるが，それはもっと先のゴールである。

しかしマートンアプローチの上に書き下ろされたバージョンは，説明の見地から見ると独自の問題を孕んでいることが判明している。マートンは機能主義を特徴づけるコンセプトに対する多くのアッピール——逆機能概念の使用，アンビバレンスの発想，マタイ効果の議論——を，構造的アプローチに彼がコミットしている証拠として上げることができる。そして彼は自分の言語とマルクス主義のそれ，矛盾の発想との類似を証明することができた。しかしマルクス主義は，矛盾の将来の革命として見なされるもののアイデアを有するが故に，明らかに，矛盾の発想に権利を与える歴史的目的論の一形態である。マートンに彼の用法の権利を与えたものは何か。そしてその用法とは何か。彼は「生成する」という用語を，社会構造がいかにして異なった逸脱率を生み出すか，社会構造が自らのなかに変化をいかに生成するかを特徴づけるために用いている（1975 : 35）。社会構造が変化を生み出す一つのやり方は，逆機能を増幅する緊張，対立，矛盾を通じてである（1975 : 36）。対立自体は，社会構造が（自分自身の利害と価値を持つ，従って潜在的に対立するそれや共有するそれを持つ）地位，階層，組織等に分化する事実の結果として構造によって生成される（1975 : 35）。

ここには識別可能な説明パタンが存在する。社会構造がそれが生み出す主要結果と部分的

に対立する副産物を産む何かをする。しかしそのパタンは機能主義的である。doing は機能的発想としてのみ理解でき，我々が機能的発想から出発するときに限って，逆機能的結果は了解できる。しかし，ネーゲル，ヘンペルが1950年代の Nagel-Lazarsfeld 授業のリーデングスで指摘したような（そしてエルスターがのちに指摘したような），機能の発想を用いることは，物語の残り（目的の全開の考察と目的に方向性のある関係を生み出すメカニズム）にユーザーをコミットさせることである。構造的アプローチはそれが手放した機能主義に寄生していた。

後悔するものは何もないか？

マートンは機能主義の内部破裂，論理実証主義の終焉，中範囲の理論のコンセプトが依拠する統計分析モデルの代替え，彼が戦後期にプロモートした行動科学モデルの失敗をくぐり抜けてきた。彼の反応はどうであったか。彼の同時代人はどう反応したか。一人の親密な同時代人は Edward Shils であった。彼の経歴はビックリするほどマートンと多くのパラレルを持っている。ともに，教育と専門職への抱負が規範であるフィラデルフィアのユダヤ出身であること，ともにマンハイム，パーソンズと形成期の学問的，ある程度は個人的な交流を持ったこと，ともに古典的社会理論を強迫的に読んだこと，ともに科学を学んだこと，ともに戦後期の行動科学の盛んなときの熱心な参加者であったこと。

シルズは同時期にパラレルであるがマートンに比べてはるかに知名度が低いエセー（1949）を書いている。しかしながら，彼は自分のかつての執心を放棄した。彼は1980年に次のように語っている。

> 私がこの時期の当初に私の書いたものを読み返すとき，私は今では青二才として登場するものと信じる意思によって穴があったら入りたい心境である。第二次世界大戦終結後少なくとも5年間は，社会科学の方法と理論を通じて獲得された知識は，民衆の知恵，西洋社会の統治に貢献するほど十分に発達したと思っていた（［1980］1997：21）。

マートンは決してそのような言明を公けにしなかった。1975年の「社会学の構造分析」でなされた譲歩は真摯であったが，決して恥ずかしがってはいない。

その代わり，マートンは統一された理論の夢の実現を遠い将来に追いやる工夫によって，オリジナルバージョンから救済できるものを救済しようと努めた。このときまで，マートンはネーゲルの批判に応答することなく，その内容を認めることなく20年間過ごしてきていた。彼は説明力を提供する機能主義の語彙と彼の考えるものに乗っかることなく，もっと素

朴な形の機能主義と自分との違いを強調した。彼はラザースフェルドを隅に追いやった統計分析の革新に気がつかなかった。もし彼が方法論的著作を社会学の発展にとって戦略上の暗黙の賭けを促進するものと解していたなら，彼は賭けが暗転することに気づいただろう。しかし彼はそれを放棄しなかったし，そのかわりにそれはいつかペイ・アウトするだろうという希望的観測まで漏らしている。

方法論思想家としてのマートンの評価は，賭けが依然として大丈夫なのか，それともいままでは大丈夫だったがもはやそうでないのいずれなのかの質問にダウンする。しかし常にそうであるように，曖昧さが存在する。マートンは 1950 年代半ばまで，Lazarsfeld-Nagel クラスで議論されたネーゲル，サイモンの論文から，「彼が『社会理論と社会構造』で自分のとった立場が支持しがたいものであること，ラザースフェルドモデルの因果性の扱いは取って代わられたこと，（逆機能，ストレインを含む）機能概念を用いた中範囲の理論は遅かれ，早かれ返済されるという仮定の下に，借金をテークアウトする試みに過ぎないこと（Fodor 2007：4)」に気づいていたはずである。換言すれば，彼はごく初期の段階からこれが a bad bet（悪い賭け）であることを知っていたはずである。どんな理由で，マートンは問題点の何れも彼は認めなかったのか。マートンは，上記のすべてにも拘わらず，コロンビアモデルの所産が納得でき，価値があると単に信じていただけなのか。しかしながら，一つのことは明白である。この何れも 60 年代，反乱学生とは関係がないこと。マートンの立場に反する事例を提供した人物は 1920 年代 30 年代に遡る経歴を持つ既存のアカデミーの成員であった。どんな理由でマートンは応答に失敗したのか。それは謎である。おそらく，その答えは，自己の立場の正しさは究極的に証明されるという彼の信念であろう。しかし，彼が実際に信じていたなら，なぜ信じたのかは依然謎である。

文献一覧

Berelson, Bernard/ Gary Steiner 1964　*Human Behavior：An Inventory of Scientific Findings.* New York：Harcourt Brace. 南博・社会行動研究所訳『行動科学事典』1966 誠信書房

Berger, Joseph/M.Zelditch, Jr/B. Anderson 1966　*Sociological Theories in Progress. Boston：Houghton-Mifflin.*

Clark, John/ Celia Modgil/ Sohan Modgil（eds.）*Robert K. Merton：Consensus and Controversy.* London：Falmer Press.

Coleman, James 1990　“Robert K.Merton as teacher.”　In：John Clark/ Celia Modgil/ Sohan Modgil（eds.）*Robert K. Merton：Consensus and Controversy.* pp. 25-32.　London：Falmer Press.

Conant, James B. 1947　*On Understanding Science：A Historical Approach.*　New Haven, CT：Yale University Press.

――――― 1951　*Science and Common Sense.*　New Haven, CT：Yale University Press.

———— 1952　*Modern Science and Modern Man.*　New York : Columbia Univ. Press.
———— ed. 1957　*Harvard Case Histories in Experimental Science.*　Cambridge, MA : Harvard Univ. Press
Coser, Lewis 1956　*The Functions of Social Conflict.* Glencoe, IL : Free Press. 新睦人訳『社会的闘争の機能』1978 新曜社
———— 1975　“Presidential address : Two method in search of a substance.”　*American Sociological Review* 40(6) : 691-700.
Costner, Herbert/ Robert K. Leik 1964　“Deductions from axiomatic theory.”　*American Sociological Review* 29(6) : 819-35.
Elster, Jon 1990　“Merton’s functionalism and the unintended consequences of action.”　In : Jon Clark/ Celia Modgil/ Sohan Modgil (eds.) *Robert K. Merton : Consensus and Controversy.* pp. 129-35. London : Falmer.
Fodor, Jerry 2007　“Why pigs don't have wings.”　*London Review of Books.* 29 October, 4.
Glaser, Banny/ Anserm Strauss 1967　*The Discovery of Grounded Theory : Strategies for Quantitative Research.*　Chicago : Aldine Publishing. 後藤隆，大出春江，水野節夫訳『データ対話型理論の発見』1996 新曜社
Hyman, Herbert 1955　*Survey Design and Analysis : Prnciples, Cases, and Procedures.* Glencoe, IL : Free Press.
———— 1991　*Taking Society's Measure.*　New York : Russell Sage.
Kuhn, Thomas 1962　*The Structure of Scientific Revolution.*　Chicago : Chicago Press.　中山茂訳『科学革命の構造』1971 みすず書房
Lazarsfeld, Paul/ Morris Rosenberg (eds.) 1955　*Language of Social Research : A Reader in the Methodology of Socual Research.* Glencoe, IL : Free Press.
Merton, Robert 1936　“The unanticipated consequences of purposive social action.”　*American Sociological Review* 1 : 894-904.
———— 1945　“Sociological theory.”　*American Journal of Sociology* 50 : 462-73.
———— 1948　“The bearing of empirical research on the developement of social theory.”　*American Sociological Review* 13(5) : 505-15.
———— 1949　*Social Theory and Social Structure.*　New York : Free Press.
———— 1957　*Social Theory and Social Structure.*　Revised, ed. New York : Free Press.『社会理論と社会構造』1961 みすず書房
————［1948］1968a　“The bearing of empirical research on sociological theory.”　In : *Social Theory and Social Structure.* enlarged ed. pp. 156-71.　New York : Free Press.「経験的調査の社会学理論に対する意義」(中嶋竜太郎訳) 1961 所収
————［1949］1968b　“The bearing of sociological theory on empirical research.”　In : *Social Theory and Social Structure.* enlarged ed. pp. 139-55.　New York : Free Press.「社会学理論の経験的調査に対する意義」(森好夫訳) 1961 所収
————［1949］1968c　“Manifest and latent function.”　In : *Social Theory and Social Structure.* enlarged ed. pp. 73-138.　New York : Free Press.「顕在的機能と潜在的機能」(金沢実訳) 1961 所収
———— 1968d　“On sociological theories of the middle range.”　In : *Social Theory and Social Structure.* enlarged ed. pp. 39-72. New York : Free Press.「中範囲の社会学理論」(森好夫訳)『社会理論と機能分析』1969 青木書店
———— 1968e　“Karl Manheim and the Sociology of Knowledge.”　In : *Social Theory and Social Structure.* enlarged ed.　New York : Free Press.「カール・マンハイムと知識社会学」(森好夫訳) 1961 所収
———— 1973　“The Matthew effect in science.”　In *The Sociology of Science : Theoretical and Empirical Investigations.* pp. 439-59.　Chicago : Univ. of Chicago Press.

——— 1975 “Structural analysis in sociology.” In Peter Blau（ed.）*Approaches to the Study of Social Structure.* pp. 21-52. New York : Free Press.「社会学における構造分析」（寺田篤弘訳）斎藤正二監訳『社会構造へのアプローチ』1982 八千代出版

——— 1982 *Teoria sociologiczna i struktura spolezuna.* Polish ed. Warsaw : Wydawnictwo Naukowe PWN.

Merton, Robert K./ James S. Coleman/ Peter H. Rossi（eds.）1979 *Qualitative and Quantative Research : Papers in honor of Paul F. Lazarsfeld.* New York : Free Press.

Mills, C. Wright 1959 *The Sociological Imagination.* Oxford, UK : Oxford Univ/Press. 鈴木広訳『社会学的想像力』1965 紀伊國屋書店

Nagel, Ernest 1956 “A formalization of functionalism.” In *Logic without Physics : And other essays in the philosophy of science.* pp. 247-83. Glencoe, IL : Free Press.

Parsons, Talcott 1948 “The position of sociological theory.” *American Sociological Review*13（2）: 156-71.

———［1937］1949 *The Structure of Social Action.* 2nd ed. New York : Free Press. 稲上毅，厚東洋輔，溝部明男訳『社会的行為の構造（1～5）』1977～89. 木鐸社

Pawson, Ray 2000 “Middle range realism.” *Archieves europeennes de sociologie.* 41（2）: 283-325.

Price, James L. 2003 “Strategies of theory construction at Columbia during the 1950s.” http://www.uiowa.edu/～soc/docs/tw/pricetw2003

Shils, Edward 1949 “Social science and social policy.” *Philosophy of Science* 16（3）: 219-42.

Simon, Herbert 1952 “On the definition of the causal relation.” *Journal of Philosophy* 49（16）: 517-28.

——— 1953 “Causal ordering and identifiability.” In William C. Hood/ Tjalling C. Koopman（eds.）*Studies in Econometric Method.* Cowles Commission Monograph 14. New York : John Wiley.

——— 1954 “Spurious correlation : A causal interpretation.” *Journal of the American Statistical Association* 49 : 467-79.

——— 1979 “The meaning of causal ordering.” In Merton, Robert K./ James S. Coleman/ Peter H. Rossi（eds.）1979 *Qualitative and Quantative Research : Papers in honor of Paul F. Lazarsfeld.* pp. 65-81. New York : Free Press.

Stoufer, Samuel A. et al. 1949 *The American Soldier.* Princeton, NJ : Princeton Univ. Press.

Zetterberg, Hans［1954］1963 *On Theory and Verification in Sociology.* Stockholm : Amquist & Wicksell, Totowa, NJ : The Bedminster Press. 安積仰也・金丸由雄訳『社会学的思考法』1973 ミネルヴァ書房

あとがき関係

Aggassi, Joseph 2009 “Turner on Merton.” *Philosophy of the Social Sciences.* 39（3）: 284-93.

Crothers, Charles 2009 “Merton’s flawed and incomplete methodological program : Response to Stephen Turner. ” *Philosophy of the Social Sciences.* 39（3）: 272-83.

Kincaid, Harold 2009 “A more sophisticated Merton.” *Philosophy of the Social Sciences.* 39（3）266-71.

Sztompka, Piotr 2009 “The assault badly misses the mark” *Philosophy of the Social Sciences.* 39（3）: 260-65.

Turner, Stephen 2009 “Shrinking Merton.” *Philosophy of the Social Sciences.* 39（3）: 481-489.

——— 2005 “High on insubordination.” In : Alan Sica/ Stephen Turner（eds.）*The Disobedient Genaration. Social Theorist in the Sixties.* pp. 285-308. Chicago : The Univ. of Chicago Press.

Turner, Stephen P./ Jonathan H. Turner 1990 *The Impossible Science : An Institutional Analysis*

of American Sociology.　Newbury Park : Cal : SAGE Pub.
Turner, Stephen 1994　"The origins of mainstream sociology and other issues in the history of American sociology."　*Social Epistemology*. 8(1) : 41-67.
Price, James L. 2003　"Strategies of theory construction at Columbia during the 1950s."　http://www.uiowa.edu/～soc/docs/tw/pricetw2003

訳者あとがき

訳出した論文は Philosophy of the Social Sciences 39巻2号（2009）174-211所収，Stephen Turner 著 Many Approaches, but Few Arrivals.　Merton and the Columbia Model of Theory Construction. である。

ステフェン・ターナーの名は，1990年刊行のジョナサン・ターナーとの共著『不可能な科学：アメリカ社会学の制度的分析』セイジ出版で，アメリカ社会学を戦前のシカゴ学派，戦後のハーバード学派（パーソンズ学派）を中心にとなえるオーソドキシーに異を唱え，ギデングズ→オグバーン→ダンカン→クロッグ（統計学，相関分析，パス解析の系譜）ギデングズ→チェイピン→セウェル→ウィスコンシン・地位達成派（測定の系譜），チェイピン→スタウファー，ラザースフェルド（応用心理学・カテゴリー分析の系譜）をアメリカ社会学の主流と見なす新しいアメリカ社会学史家として印象に残っていた。パーソンズ，マートンの機能主義に対しては批判者の目で見る学者である。

訳出した論文でも，マートンが提唱した中範囲の理論が曖昧だ，ネーゲルによる機能分析への論理的批判に答えていない不誠実，1975年の論文で機能主義から転向しているのに素直に認めず弁明し，名称を機能主義（構造・機能分析）から構造分析にこっそり入れ替えていることを指摘している。ステフェンのこの論文の持ち味は，マートンだけでなく，ゼッターバーグ，ラザースフェルド，ネーゲル，サイモンの50年代コロンビア大学の社会学部，それに協力した非社会学者（哲学者，経営学者）の研究者集団（コロンビア理論構築モデル）をも考察の対象に入れていることである。ラザースフェルドをサイモンに劣等感を抱いていたと見て，両者を比較している。

訳者がステフェンのこの論文に惹きつけられたもう一つの理由は，スウェーデン人のゼッターバーグをコロンビア理論構築モデルの重要人物として位置づけていることにある。ゼッターバーグの『理論と検証』は50年代のアメリカで社会学の理論構築法のバイブルとして読まれたものである。中範囲の理論と命題理論，公理演繹法とどんな関係にあるか，ゼッターバーグの命題理論，公理演繹法はホーマンズの『人間集団』『社会行動』に影響をあたえ，ステフェンのこの論文でも触れられているポーランドの社会学者マレウスキー『行動と相互行為』はホーマンズの社会行動論とフェスチンガーの認知不協和理論を高く評価し，それの

問題点を指摘して前進を図ったものである。ゼッターバーグの命題理論，公理演繹法の方針に忠実に，人間行動，社会集団の研究知見の目録棚卸しを行ったベレルソン／スタイナーの成果は，フンメル／オプが心理学命題への還元の被還元命題である社会学命題として使っている。

ステフェンがコロンビアの理論構築モデルに着目するのに力を貸したのはプライスの「1950 年代コロンビア（大学社会学部）理論構築戦略」(2003 ウェブ公開論文で雑誌，著書には未掲載）である。ピーター・ブラウ，ジェームズ・コールマン，ルイス・コーザー，アルビン・グールドナー，ジェラルド・ヘイグ，エリウ・カッツ，セイモア・リプセット，ピーター・ロッシら 1950 年代コロンビア大学社会学部に学んだマートン・ラザースフェルドの弟子達の緩やかな共通点（確固たる共通のパラダイムとまではいかない）を 10 項目（公式化，一般理論志向，中位の抽象水準，理論と方法の双方の重視，機能分析，例外ケースを取り込む分析志向（ミヘルスの寡頭制の鉄則の例外としてアメリカの印刷組合の分析），戦略的な場所の選択（社会化を研究するのに厄介な家族でなく医学部の修習生を選ぶ），類型作成の際の属性空間の利用，継続（アメリカ兵士，権威主義的性格の分析の継続），エピデモロジー（経験的一般化による理論の開発の促進＝帰納法による抽象水準の一段上昇）を抽出している。ステフェンのコロンビア理論構築サークルが，マートン，ラザースフェルドの同輩との学問的交流を指すとすれば，プライスのそれは，マートン，ラザースフェルドの直弟子の研究手法の緩やかな共通点のあぶり出しである。ベレルソン／スタイナーが行った目録棚卸しの手法の一層前進した形での整理である。

ステフェンの論文に対して，4 人の学者がコメントを寄せ，ステフェンがそれに応答している。そのなかにはマートン研究の専門家，クローザー，ストンプカも含まれている。マートンの中範囲の理論は，アプローチが多くても成果が少ない旧来の社会学の問題点を克服しようとするものであったが，それに成功していない，というステフェンの指摘を承認して，マートンの代わりにできなかった言い訳を述べて擁護している。ステフェンはそれをマートンを縮小するものだとさらに反論する。本稿の読者にはくれぐれもストンプカのように，「マートンの仕事に成果は少なかった」と誤読しないことを願っている。

Stephen Park Turner（シカゴ，1951 年生まれ）は，ミズウリー大学で，社会学と哲学の学位を得た。彼は 1975 年以来, サウス・フロリダ大学に勤務。1987 年に大学院教授に昇格して，大学での主要キャンパスが哲学部に次第に移ってからは哲学関係の仕事の比重が大きくなったが，訳出した論文は久方ぶりの社会学の仕事である。

社会統計学の用語については本学人間科学科　神林博史氏の教示を得た。パースの abduction の訳語に定訳のないことを本学言語文化学科　伊藤春樹氏から教示を得た。お二

方に記して謝意を表したい。

社会学関係の著作

1980　*Sociological Explanation as Translation.*　Rose Monograph Series of the American Sociological Association.　Cambridge, Ma : Cambridge University Press.

1986　*The Search for a Methodology of Social Science.　Durkheim, Weber and the Nineteen-Century Problem of Cause, Probability and Action.*　Dordrecht, Holland : Kluwer Academic Publishers.

1990　（with Jonathan Turner）*The Impossible Science : An Institutional Analysis of American Sociology*.　Beverly Hills : Sage.

哲学関係の著作

1994　*The Social Theory of Practices : Tradition, Tacit Knowledge, and Presuppositions.* Oxford : Polity Press.

2002　*Brains/ Practices/Relativism : Social Theory after Cognitive Science.*　Chicago : University Chicago Press.

2010　*Explaining the Normative.　A Critical Examination of Normativism.*　Oxford : Polity Press.

編著

Stephen Park Turner/ Paul A. Roth（eds.）2003　*The Blackwell Guide to the Philosophy of the Social Sciences.*　John Wiley & Sons.

Stephen Park Turner/ Mark Risjord（eds.）2007　*Handbook of the Philosophy of Science.　The Philosophy of Anthropology and Sociology.*　Amsterdam : Elsevier.

Stephen Park Turner/ William Outhwaite（eds.）2007　*The Sage Handbook of Social Science Methodology.*　Sage Publications Ltd.

平成 24 年度　東北学院大学学術研究会評議員名簿

会　　長		星宮　　望		
評議員長		斎藤　善之		
編集委員長		斎藤　善之		
評　議　員				
文学部	〔英〕	遠藤　裕一	（編集）	
	〔総〕	佐藤　司郎	（編集）	
	〔歴〕	加藤　幸治	（編集）	
経済学部	〔共〕	越智　洋三	（編集）	
	〔経〕	泉　　正樹	（会計）	
	〔共〕	佐藤　　滋	（編集）	
経営学部		斎藤　善之	（評議員長・編集委員長）	
		松岡　孝介	（会計）	
		折橋　伸哉	（編集）	
法学部		黒田　秀治	（庶務）	
		白井　培嗣	（編集）	
		木下　淑恵	（編集）	
教養学部	〔人〕	鈴木　宏哉	（編集）	
	〔言〕	伊藤　春樹	（編集）	
	〔情〕	乙藤　岳志	（庶務）	
	〔地〕	金菱　　清	（編集）	

東北学院大学教養学部論集　第 163 号

2012 年 12 月 14 日　印刷
2012 年 12 月 21 日　発行

（非売品）

編集兼発行人　斎　藤　善　之
印　刷　者　笹　氣　幸　緒
印　刷　所　笹氣出版印刷株式会社
発　行　所　東北学院大学学術研究会
〒 980-8511
仙台市青葉区土樋一丁目 3 番 1 号
（東北学院大学内）

FACULTY OF LIBERAL ARTS REVIEW
TOHOKU GAKUIN UNIVERSITY

No. 163 December, 2012

CONTENTS

Articles

Consideration About the French Professional Football League 1
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ MATSUBARA Satoru, TAKAHASHI Shinji・・・・ 1

Digital Divide of "Shin-Jinrui"・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ KATASE Kazuo・・・・ 19

Income Differentials of Asian Nations : The Regulation Factor
・・・YANG Shiying・・・・ 55

Cees Nooteboom lesen 5) Das Japan-Bild bei Nooteboom
・・YOSHIMOCHI Senji・・・・ 69

Translation

Stephen Turner, Many Approaches, but Few Arrivals : Merton and the Columbia Model of Theory Construction ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ translated by KUJI Toshitake・・・・ 107

The Research Association Tohoku Gakuin University
Sendai Japan